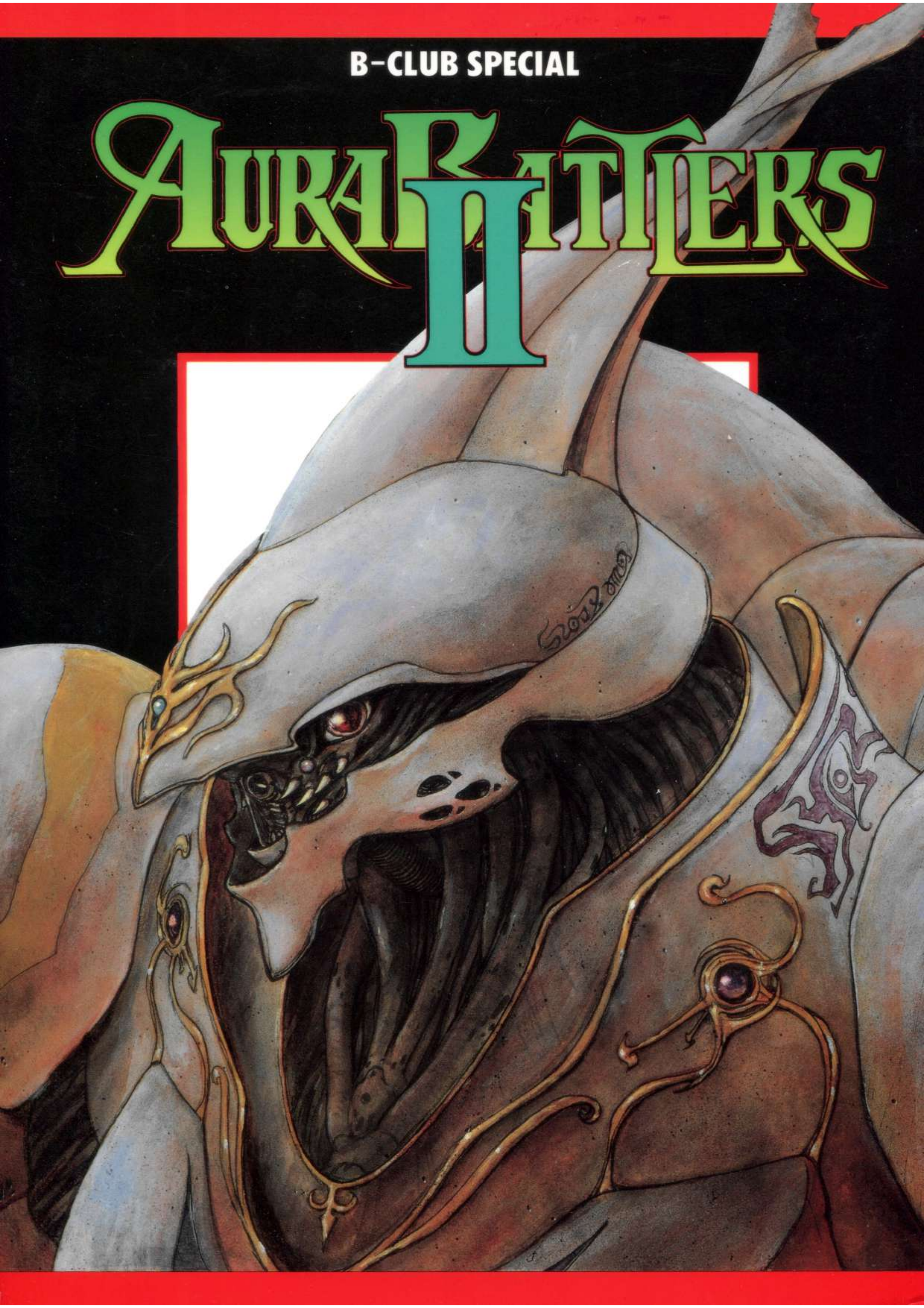
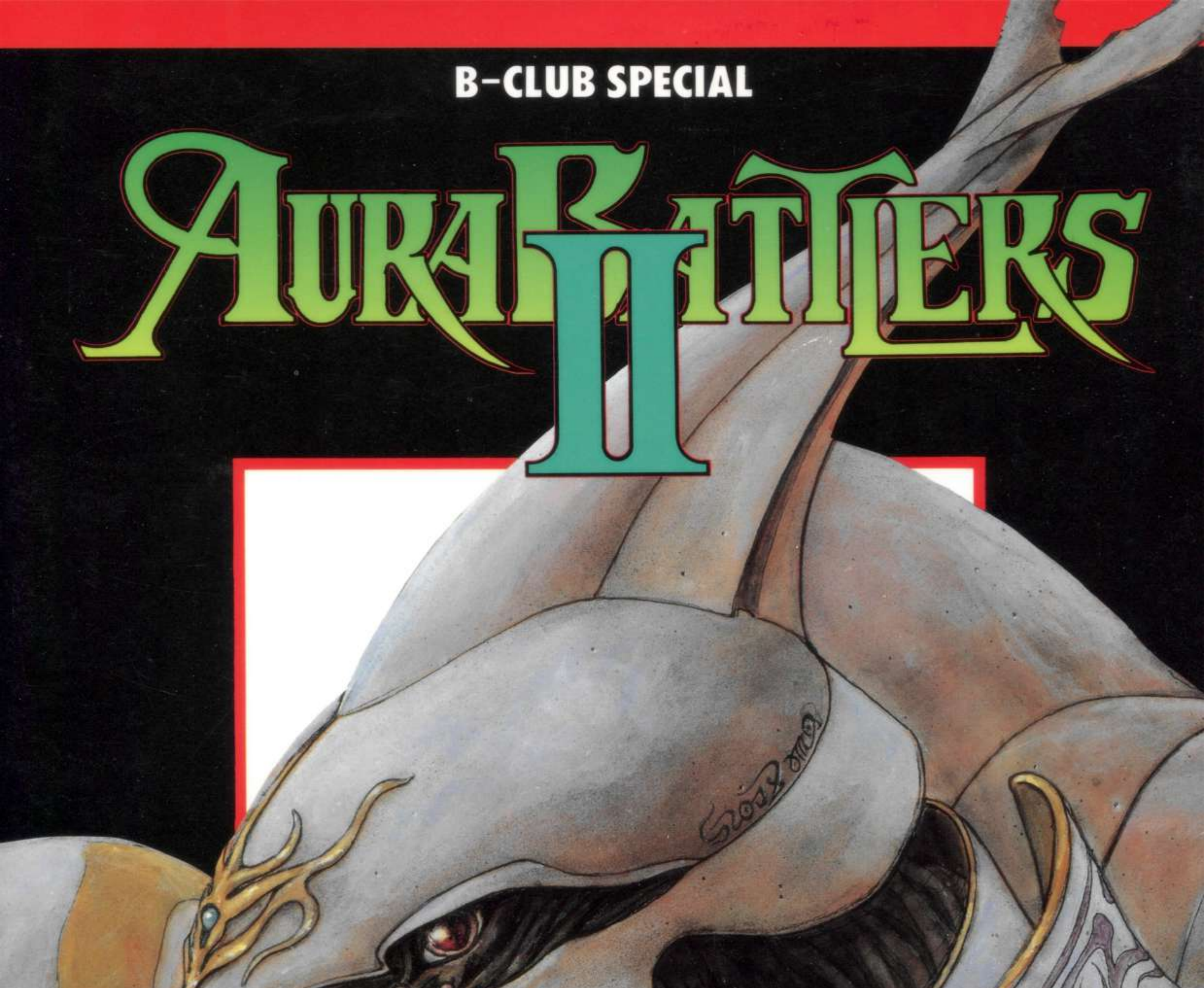

B-CLUB SPECIAL
AURA BATTLERS II

B-CLUB SPECIAL

AURA BATTLERS II

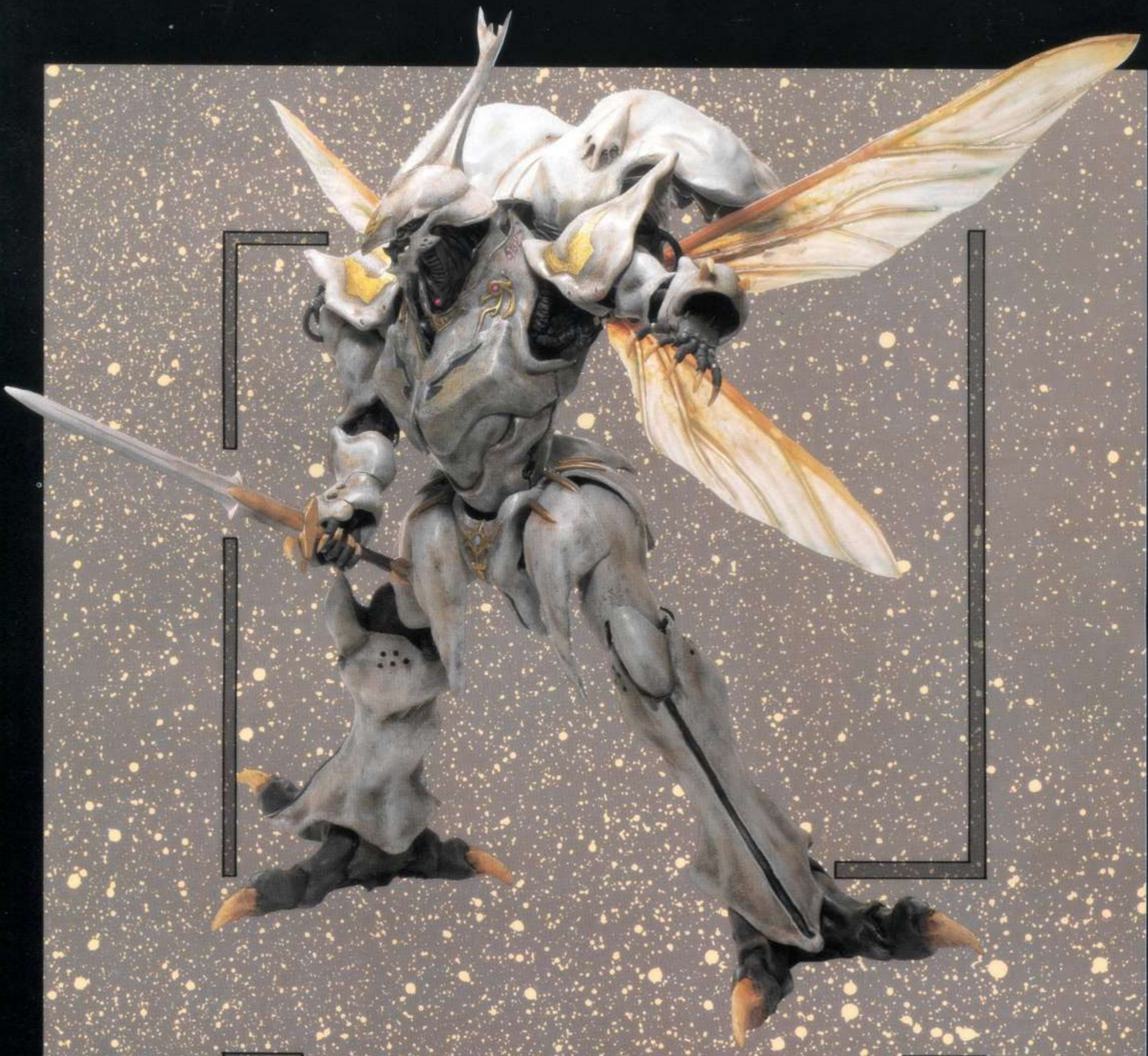


あの「聖戦士ダンバイン」がついにＯＶＡ（オリジナル・ビデオ・アニメーション）として復活した。数多くのファンの期待にこたえ、蘇ったニューバイストンウェル物語。今ここにその全貌を明かそう

オーラバトラー2



AURA BATTLERS 2



いま再びバイストン・ウエルに聖戦士の伝説が甦える。はるかな時を経ても、伝説は色褪せることなく語り継がれる。世が麻のごとく乱れるとき、聖戦士は巨人騎士を駆りて、悪しきものをその刃にて両断する。

MODEL/FUYUKI SHINADA

B-CLUB SPECIAL

オーラバトラー



AURA BAT









TLERS-2

目次













イラスト／幡池裕行



●サーバイン製造シーンをイメージしたディオラマフォト



フルスクラッチモデル

サーバイン 1／12スケール

by 品田冬樹



●野外で撮影したフォト。自然光がモデルのリアルさを引き出す。フィギュアは1／10スケールでやや大きい

OVA「ダンバイン」に登場したサーバインを立体再現した究極の造型である。全高75cm、1／12スケールのビッグモデル。しかも、頭部ヘルメットの脱着、コクピットハッチの開閉、さらに腕部アーマーの内部再現、アーマーの脱着までも可能にした、立体設定資料と呼ぶにふさわしい造型である。材質はポリエステル樹脂でFRP成型を多用している。また、関節は木製、ヘルメットの装飾には亜鉛板のエッチング加工を用いるなど、各種素材を駆使したハイブリッドモデルとなっている。そのおかげで外観、ギミックともに完璧なサーバインが完成したのである。なお、制作の詳細はBクラブ30・31号を参照して下さい。



●混沌（ケイオス）の巨大戦士、ズワウス





フルスクラッチモデル
1／72スケール
ズワウス
by 今池芳章



ズワウスは海洋堂とコトブキヤからそれぞれ発売されている。このモデルはガレージキットではなく、Bクラブ9号で発表した今池芳章氏のフルスクラッチモデル、ズワースを今回のビデオ版ズワウスのデザインに合わせて改修したものである。改修点は大ざっぱにいって、コウモリ状の羽、巨大な尾、剣などで、逆に推論すれば、今池氏のズワァースがいかに強かったか物語っている。生物感を強調したABモデルは、このズワァースがルーツだったのだ。

海洋堂ガレージキット
1／72スケール サーバイン



●対決！　サーバインＶＳズワウス





海洋堂メタルフィギュア 80㎜シリーズ
サーバイン







OVA「聖戦士ダンバイン」に登場するサーバインは、ガレージキットとして、コトブキヤ、海洋堂、MAXファクトリーの3社から発売されている。この作例は海洋堂の1／72スケールプラキャスト製キットである。原型製作は「北斗の拳」フィギュアで有名な片山浩氏で、アクションポーズがなかなかよい。海洋堂のA　Bシリーズは全体的に生物感が強調されているが、このキットでも羽の表現など工夫が凝らされている。また、盾は出渕氏が「オーラバトラーズ」で描きおこししたサーバインの盾をモチーフにしたものと思われる。

海洋堂の今年のトレンド、メタルフィギュアのAB版である。先に販売されている「FSS」のモーターヘッドとサイズを合わせている。原型は片山浩氏で、ほかのABも企画されている。また、「パトレイバー」のアルフォンスや、懐ロボなどもこのシリーズで展開する予定だ。

コトブキヤガレージキット 1／72スケール ズワウス

原型製作・柳沢仁





このモデルは一次原型を撮影のために急きょ完成させたものであり、販売バージョンにはさらに改良が加わる予定である。ジオラマベースは写真撮影用に製作ものでキットはズワウスのみである。海洋堂のモデルと見比べるとおもしろい。

コトブキヤガレージキット 1／72スケール サーバイン

原型製作・横井健一





コトブキヤのガレージキットは、出渕氏のデザイン画をほぼストレートに解釈している。このプラキャスト製サーバインも同様で余計なデフォルメは一切ない。バンダイの1／72キットに合わせやすいサイズだ。

海洋堂ガレージキット 1／72スケール ズワウス

原型製作・片山　浩



ズワウスのキットとしてはこれが第1弾。原型製作は先にサーバインを作った片山浩氏である。やや細身の印象もあるが、サーバインの3倍のボリュームはある。
　さすがズワウスのプロポーションの元となったズワースを出した海洋堂だけに手慣れたラインでまとめられている。

フルスクラッチモデル 究極のダンバイン Part2 by 竹谷隆之









Bクラブ16号、「オーラバトラーズ」に発表された竹谷隆之氏製作「究極のダンバイン」のパート2モデルである。これは複製キット（プラキャスト製）を竹谷市自身の手によって組み上げたもので、マスターモデル以上の完成度を見せている。前回との違いは手に持った武器が長剣から錫杖に似たライフルに変った他、全体的に梨地状となっている。表面仕上げがまた、今回のモデルは完全な固定ポーズである。

コトブキヤキャストキット 1／72スケール ガーゴイル 原型製作・杉田晋









ガーゴイルは出渕氏の「オーラ・ファンタズム」で発表されたオリジナルABである。原型製作は1／72スケールズワース、レプラカーンを担当した杉田普（多摩工房）である。このキットはBクラブ25号で一度発表されているが、これは改修を終えたプラキャストキットである。キットは頭部がコンパチブルで設定デザイン通りのものと、シャープにしたものの2種類が付いている。

設定では7の国で開発されたABで、ビアレスの後継機ということになっている。ビアレスと同じように巨大なトマホークを装備している。

海洋堂キャストキット 1／72スケール ガドラム 原型製作・坂本正則







これも出渕氏の「オーラ・ファンタズム」に登場するオリジナルABである。原型製作は1／35スケールのダンバイン、ボチューンを担当した坂本正則氏で、昆虫をイメージしたドラムロと異なり、このガドラムでは甲殻類（カニ）をイメージしている。

設定ではアの国製のABで、装甲としてガッターの甲羅ではなく、その3倍の強度を持つというグラバスの甲羅を用いている。

コトブキヤキャストキット
1／72スケール ダンバイン
原型製作・横井健一

●ガーゴイルＶＳダンバインの戦い





サーバインもよいが、今なおTV版ダンバインの人気は高い。このコトブキヤの1／72スケールダンバインは、デザイン的には変化はないが、生物感を強調し、TV版ABファンに受け入れられたキットである。材質はプラキャスト製でベース付。原型製作はサーバインも担当した横井健一氏である。



ウェーブガレージキット 1/35スケール ライネック



ウエーブのABシリーズ第2弾がこのライネックである。(第1弾は「オーラバトラーズ」で紹介したビアレス)1/35スケールのソフトビニール製で、しかも球体関節を使用しているため、関節は可動式。プロポーションも設定に忠実である。



ウェーブのABシリーズの第3弾。TV版「ダンバイン」でズワースと1、2を争う人気のレプラカーンをソフトビニールで発売した。なお、剣や爪などにはメタルパーツを使用している。作例ではあえてアニメ設定にこだわらず〝怪獣〟のイメージでまとめている。

フルスクラッチモデル ノンスケール ズワース バストール レプラカーン ライネック by コトブキヤ



●左からズワース、バストール、レプラカーン、ライネック

ウェーブガレージキット 1/35スケール レプラカーン by おぎのまこと

(塗装・高垣利信)

コトブキヤガレージキット 1／72スケール ビルバイン 原型製作・石川雄一





八須氏の連載企画「オーラバトラーキットを再点検する」で発表されたモデル。固定ポーズに変え、その分プロポーションを直すという点がポイント。詳しくはBクラブ32号を参照のこと。

ダンバインのパワーアップバージョンともいうべきABがこのビルバインだ。元のデザインがあくまでも玩具を意識したものであるため、強い反発を覚えるファンもいるが、このキャストキットのようにスタイル、ボリュームを変えるとしっかりABする。原型製作は石川雄一氏。残念ながら変形はできない。

バンダイプラキット改造 1／72スケール ボチューン by八須 誠





現在再販中のキットを改造。特に可動ギミックを入れたため肥満体となったボチューンをシェイプアップしている。詳しくはBクラブ32号を参照のこと。



バンダイプラキット改造 レプラカーン 1／72スケール by八須 誠

●雪原の行軍するズワース



バンダイプラキット改造 1／72スケール ズワース by 八須 誠

八須氏のABキット作例の第2弾。ジオラマフォトは、同キットのボックスアートを再現。また胴体以外は、プラ板の削り出し、エポパテ、ポリパテなどで改修を加えている。そのため、キットをベースにしているものの重量がかなり増加している。詳細はBクラブ30号を参照のこと。



バンダイプラキット改造 1／72スケール ドラム by 八須 誠に





八須氏のABキット作例の第I弾がこの1／48ドラムロである。なお、この1／48キットは一般兵用のみが発売された。改造点はこれまで紹介したものとほぼ同じで全体的なボリュームアップを加えている。関節部の筋肉組織をエポキシパテで型を作り、バキュームフォームで塩ビ板を成型している。表面処理は全面に溶きファンドをなすりつけたのちにサフェーサーを吹きつけている。

●バイストン・ウェルの大気を裂いて、翔べダンバイン！



バンダイプラキット改造 1／72スケール ダンバイン by K・ピエロ





今から5年前に発売された1／72スケールダンバイン（初期型）の改造モデルである。K・ピエロ氏の製作方針としては、極力キットのパーツを手に入れずに使用、どうしても我満ならないところを修整し、バランスを考えて他も直すとのこと。特に大きな改造点としては頭、胴、腰で第1話とボックスアートのイメージに近づけている。また、全体的に細いプロポーションの変更とディテールの追加が行われている。詳細はBクラブ27号を参照のこと。

バンダイプラキット改造 1／72スケール ゲド by 八須 誠

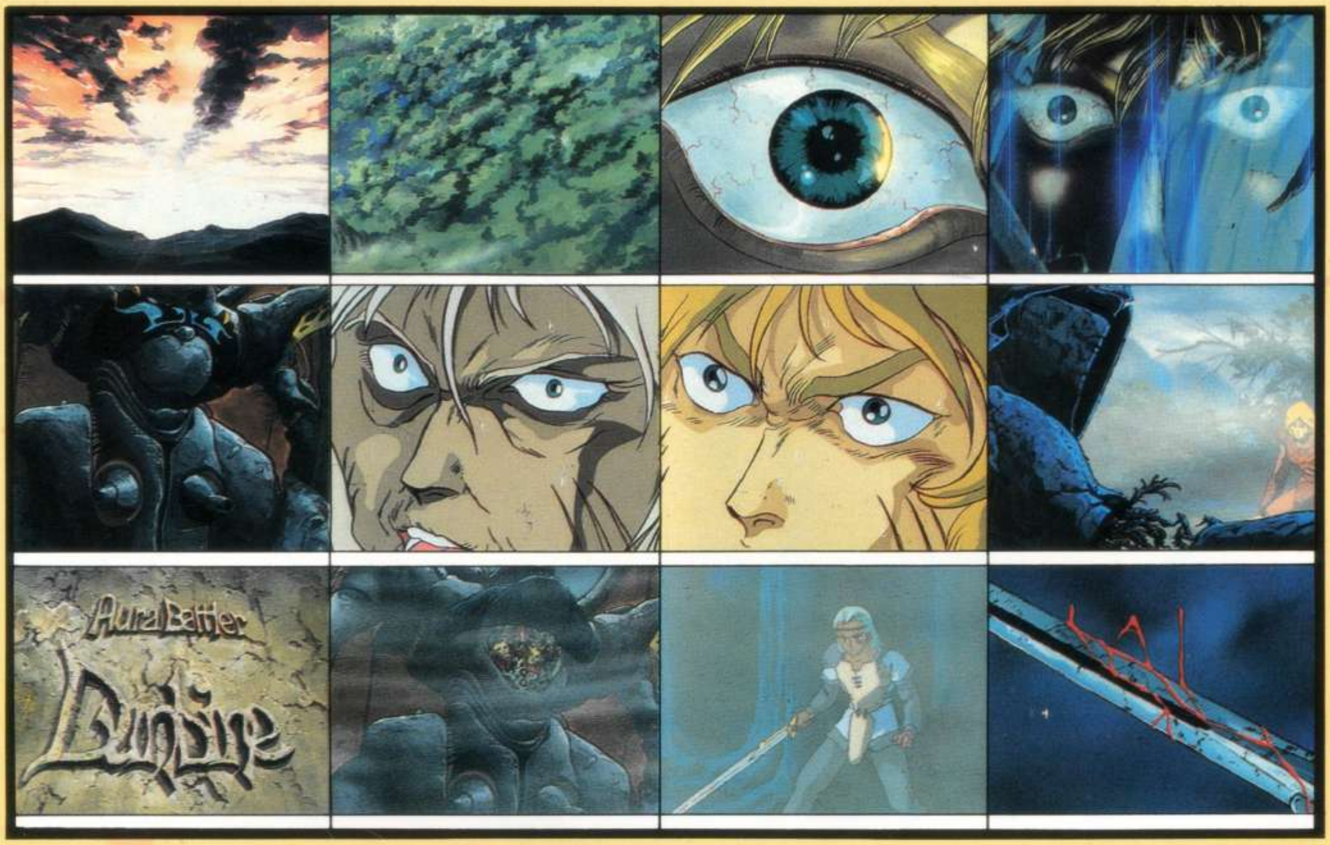


八須氏のABキットの作例第3弾で、出渕氏の「オーラ・ファンタズム」に登場した、亀型戦車アケロンの上に立つゲドを見て刺激されたという。これは八須氏のABキット作例全体を通じていえることだが、ポーズを固定とし、プロポーションをより設定デザインに近づけ、さらにカッコよく見せるディテールや表面処理を行っている。

なお、ジオラマベースは岩をフォルモ、波をファンドで製作している。詳細はBクラブ29号を参照のこと。

OVA 復活・七百年の野望・地上に近き者

フィルムストーリー



AURA BATTLERS 2

海洋堂キャストキット 1／1スケール 妖精（フェラリオ）シルキー・マウ by 山田秀樹





ＯＶＡ「ダンバイン」に登場するフェラリオ、シルキー・マウのキットである。原型製作は海洋堂で多くのプリティフィギュアを担当しているボーメ氏による。本体はキャスト制で、４枚の羽根はバキュームフォームによる塩ビ製。この製作時にはリボンのパーツが手に入らなかったため、山田秀樹氏は布地で再現している。また、首輪と足輪を真ちゅう製の薄い板で再現している。首輪はさらに裏からアルミ箔を張っている。塗装は大半がラッカー系、翼にはクリヤーイエローをスプレーしたとのこと。



このシルキー・マウはＭＡＸファクトリーから発売されるもの。原型製作はＢクラブでもおなじみの伊藤宏之氏である。全高１６３㎜の１／２スケールで、キットには羽根用の透明プラ板と型紙の他、木製デコバージュとピアノ線が付いている。海洋堂のシルキーとどっちがキミの好みかな。



フルスクラッチモデル 1／10スケール シオン・ザバ & レムル・ジルフィード by 後藤有宏

ＯＶＡ「ダンバイン」の新キャラクター、シオンとレムル（＋シルキー）をフルスクラッチした造型だ。材料は針金とファンドとパテだけ。１／12で製作を開始したものの、完成時には１／10のスケールとなってしまった。詳細はＢクラブ31号を参照のこと。

MAXファクトリーキャストキット 1／2スケール 妖精（フエラリオ）シルキー・マウ by 原型製作・伊藤宏之

新たなる巨人騎士

黒騎士ラバーン(声/速水 奨)





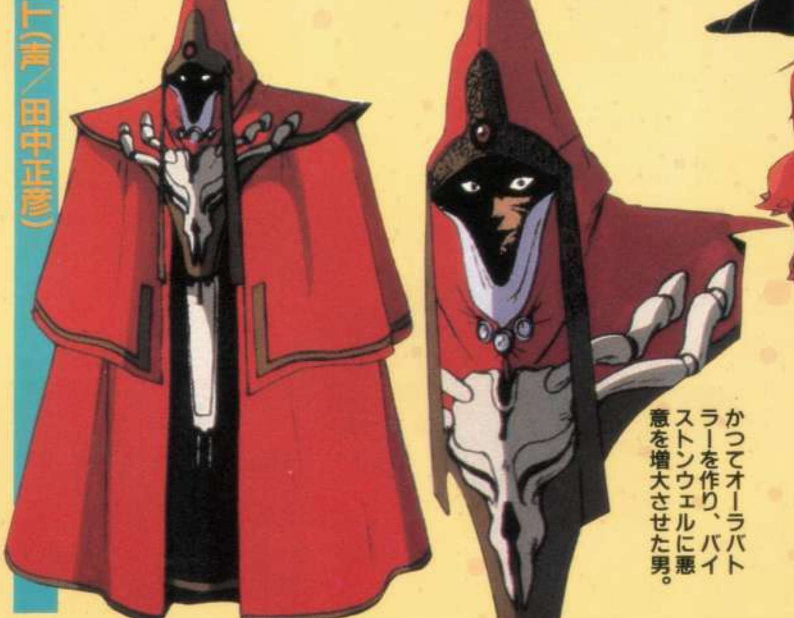
黒きオーラバトラーを使ってバイストンウェルを征服する野望に燃える謎の騎士。レムルを手に入れようと画策する。

ズワウス



ショットの作った巨大オーラバトラー。黒騎士が操る。

ショット(声/田中正彦)



かつてオーラバトラーを作り、バイストンウェルに悪意を増大させた男。

ベラーナ・ガリアッハ(声/安達 忍)



ラバーンの部下で騎馬隊を指揮する女傑。ラバーンに恋心をよせているため、レムルに嫉妬する。

の伝説が始まる!!



サーバイン

バランバランの白き秘宝。聖戦士シオンが搭乗したことによって長い眠りより目覚める。

シオン・サバ(声/中原 茂)

飛竜ザナを操るバランバランの狩人。森の獣やレムーナを取り生活している。

レムル・ジルフィード(声/鷹森淑乃)

王家の血を受け継ぐ、バランバランのお姫さま。シオンに好意をよせている。

シルキー・マウ(声/横沢啓子)

森でレムーナを取っていたシオンがつかまえたミ・フエラリオ。後にシオンを助けることになる。

フィルムストーリー



㉑ズワウスに攻撃をしかけた／



㉒「私のことに構わず早く逃げなさい！」



㉓ズワウスの巨大な手がレムルを捕えた



㉔ザナの行方をうかがうラバーン



㉕ザナは城の入口に舞い降りた



㉖「二度と人間に捕まるんじゃないぞ」



㉗「ザナ／」くるしみにもがくザナ



㉘シオンもズワウスに捕えられてしまう



㉙なにもなかったかのように静まった森



㉚洞窟の中、ズワウスと騎馬軍団が進む



㉛ラバーンの部屋に連れてこられたレムル



㉜「そうだ、私は人でなしだ」



㉝巨大なオーラバトラーの前に連れてこられるシオン。



㉞「行け／」「行かぬと殺すぞ／」



㉟ヨロイのようなものが、男の体を包む



㊱「うがアァ……」男、引きさかれる／



㊲「聖戦士……なんの事だ……？」



㊳シオン、おそるおそる座席にすわる



㊴巨大なＡＢの目が反応する



㊵「どうしたんだ……／」



㊶シオンをみつめる視線「聖戦士じゃ」

STORY

森の中を一体の異形の影が進んでいた。それは悪意が形を成したような凶々しき姿をしていた……

狩人の少年、シオン・ザバは、森で捕えたレムーナを届けにバランバランの村に訪ずれた。一緒に捕えてきたフェラリオのことをシオンは老人にたずねる。

と、そのときである。巨人騎士ズワウスを駆る黒騎士に率いられた騎馬隊が、バランバランに襲いかかった。シオンや村の人々は、翼竜やウルケロンに乗り立ちむかっていった。

しかし、巨人騎士の力は圧倒的であった。翼竜やウルケロンたちが次々と殺され、シオンも捕えられてしまった。

シオンたち捕虜は、黒騎士の城へと連れてこられる。そして、ひとりずつ城の地下で半分埋っている巨人騎士に乗りこまされる。乗った人間は、巨人騎士に食われるかのように消滅していく。いよいよ、シオンの番が来た。

だが、見よ。シオンが乗りこむと巨人騎士は彼の意のままに動き始めたではないか。


②前方をジッと見すえているラバーン


①森の中、ズワウスが進んでくる




⑥城の上空にあらわれた飛竜


⑤笛の音はウルケロンの食事の合図


④リムルが角笛をふく


③バランバランの城

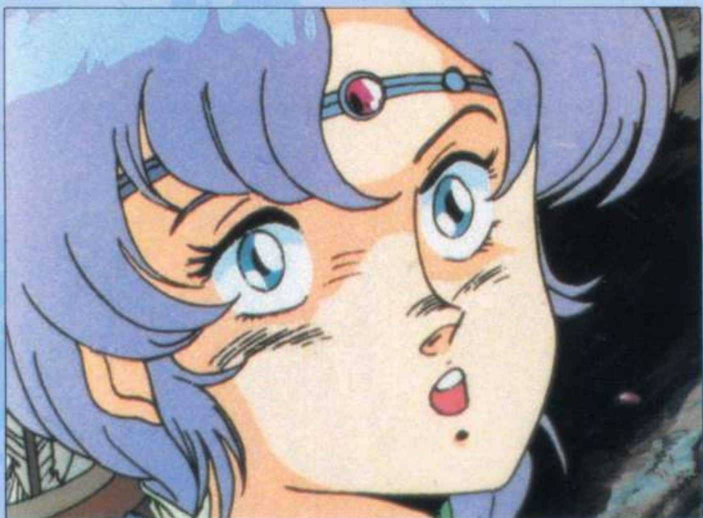

⑩森の中からジープと騎馬軍団が来る／


⑨「ほう、フェラリオか。お前が捕まえたのか」おびえているミ・フェラリオ


⑦着地した飛竜から降りた狩人、シオン


⑪「武器の用意を／早く／」


⑧「おお、シオンか」


⑯「／」目の前に着地したズワウスにレムル驚く


⑬軍団を指揮しているのはベラーナだ


⑫ウルケロンに乗り戦いに向かうレムル


⑮レムル、ボウガンにかまえる


⑭飛来するオーラバトラー、ズワウス


⑳飛竜ザナに乗り飛び立つシオン――


⑲「黒騎士め／　またか／」


⑱ウルケロンの首に突さささる


⑰ソードをかまえるズワウス――

フィルムストーリー


64 下方に気をくばりながら降りるシオン


65 おそるおそる降りるリムル


66 立ち並ぶ核弾頭付きミサイル

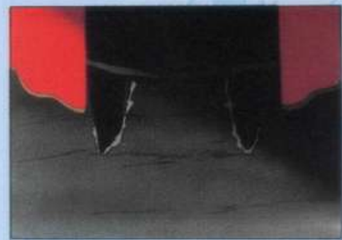

67 断崖の浅いひっこみを横に進む2人


68「うまくいく証は」「証はない……」


69 ショットの研究室から声が聞こえる


70「おお、聖戦士か……それにフェラリオも……」


71 宙を浮く男の姿におびえる2人


72「人質にするというのか？　フフフ」


73「ワシの肉体はとうに滅んでおる」


74 逃げだすシオンたち3人


75 小型のドラゴンが肉に食いついている


76 レムルを引き上げるシオン


77 弓が狙いをつけ、角度が変わる


78「バランバランの者と落ち合う筈だ」


79 ラバーンの手から虫が飛んでいく


80 虫はドラゴンの腹にはりついた

STORY

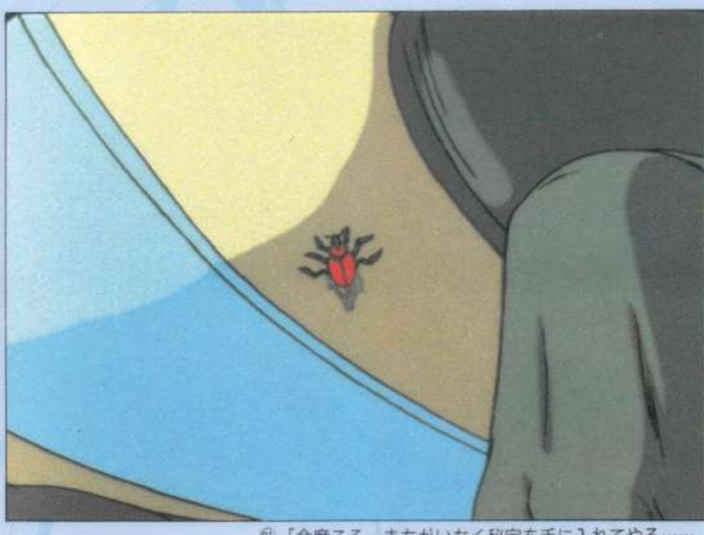
巨人騎士を動かしたことで、シオンは「聖戦士」としてむかえられることになる。しかし、シオンはそれを断ったため独房に入れられてしまう。

そのころ、フェラリオ、シルキーが黒騎士の城の中に忍びこんでいた。シルキーは、シオンと一緒に捕えられてきたレムルを見つけ、そのことをシオンに知らせた。

シルキーの助けを借り、シオンは独房を脱け出す。見張りの兵を倒しながら、シオンはレムルの牢にむかう。

レムルを救い出したシオンは、黒騎士の城を脱出しようとする。城の中を動きまわっているうちに、シオンたちは不気味な老人に出くわす。シオンは、老人を人質にしようとする。だが、老人は意に解さず近よってきた。老人は体を覆うマントをはらいのけた。その下にはミイラのような肉体があった。シオンたちは恐怖にかられ、その場を逃げだす。

ようやく翼竜を見つけ逃げ出すシオンたちだが、黒騎士はそれを見のがしていなかった。


81「今度こそ、まちがいなく秘宝を手に入れてやる……」



㊷シオンは牢に入れられてしまう。



㊸牢の奥、断崖から不思議な光が……



㊹上方から、光につつまれた巡洋艦がゆっくりと落ちてきた！



㊺ABが掘り出されている。



㊻裏切り者が断崖につき落とされた。



㊼「秘宝のありかを言っちまいな」



㊽「内緒で姫をここから逃がしてやる」



㊾「あなたはラバーンの女なのですか？」



㊿「！　死んでおしまい！」



51シルキーがシオンを探している



52断崖の下の様子をうかがうシオン



53「わざわざ、逃してやったのに……」



54「……助けられた事になるのですもの」



55大きなカンヌキに取りついて、力いっぱい引っぱるシルキー・マウ



56シルキー、リムルの牢に案内する



57見張りの兵士を倒すシオン



58シオン、剣をかまえて飛び降りた！



59兵士のカブトが叩かれた！



60意識の残っていた兵士が角笛を吹いた



61「！　まずいな！」



62牢の窓から外へ出るシオン



63「早く飛んで！」

フィルムストーリー


②サーバインに向かっていくズワウス


①「それまでだー！」と叫ぶラバーン




⑦ギシギシと引かれるズワウスの剣


④その衝撃でハッチが開いてしまう


③激突する2体のAB


⑥「……素人が！」


⑤ズワウスの剣が肩に叩きつけられた

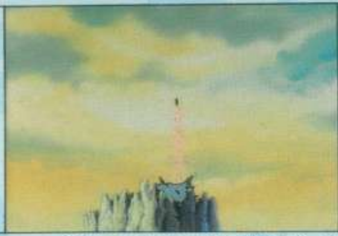

⑪シルキーの悲鳴とともに異常な現象が


⑩正面からズワウスが突進してきた！


⑨シルキーがコクピットをのぞきこむ


⑧「シオン！」シルキーが飛んでくる


⑮巨木の根元に落下した


⑭2体のABが大空に飛び上がった


⑬サーバインの噴射光が広がる


⑫地面に突き刺るズワウスの剣

STORY

シオンの乗るサーバインとラバーンの乗るズワウスの対決が始まった。だが、シオンはまともにABを操縦することができない。ズワウスの攻撃にサーバインは危機を迎えた。心配するシルキーがサーバインの操縦席に入った。そこにズワウスが突進する。その時、異常なオーラの増幅する現象が起き、サーバインがズワウスをかかえて上昇を開始する。天井を突き破った2体のABは、そのまま墜落していった。


⑰ゆっくりとサーバインは立ち上がる


⑱だが、木に叩きつけられた


⑯サーバインの身体が光輝いている


82 森の中を飛んでいるドラゴン


83 光るしっぽの虫が後を追ってくる。


84 光をたよりに追いかけるベラーナたち


85 後方にはなれて降下するズワウス


86 目的の場所に着陸したドラゴン


87 水の流れる洞窟を走ってくる2人


88 バランバランの秘宝。鍾乳石におおわれたオーラバトラー


89 おどろくシオン


90「1人でも味方が多い方がいい筈です」


91 ベラーナたちが攻め込んできた！


92 入口をくずしながら現れるズワウス


93 秘宝に向って走っていくシオン


94 ようすを見るしかないベラーナたち


95 秘宝と呼ばれたABが動きだした！


96「見たこともないオーラバトラー……」


97 おどろき見上げるレムルとシルキー


98 立ち上がるサーバイン


99 にらみつけるように顔をあげるAB


100「感じるぞ……俺のAB（オーラバトラー）！」

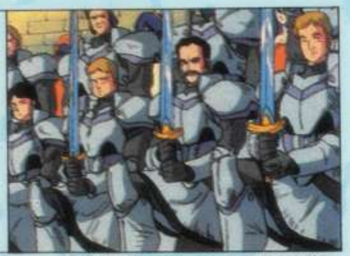

101 ズワウスと対峙するサーバイン。秘宝がいま目覚めの時を向えた

STORY

翼竜に乗りシオンたちはバランバランの秘宝が封印されている聖なる地へとむかった。バランバランを逃げだした王族の人々がその地へ集まっているのだ。シオンは初めて秘宝を目にする。それは、屹立する巨人騎士だった。

そこへ、シオン達を追いかけてきた黒騎士達が襲いかかった。無惨に殺されていく人々。

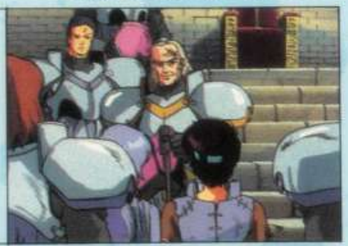
フィルムストーリー



㊶剣を立ててひざまづく兵士たち



㊷その間を進むシオンとレムル



㊸ギーがシオンたちを出迎える



㊹壊れた壁のむこうにゲア・ガリングが



㊺「これは異なことを申される。それがわれらの務めではありませぬか!?」



㊻「ンな事、俺が知るわけねえだろう」



㊼ギーは聖戦士の肩当てを渡そうとする



㊽だが、シオンはそれをはねのけた



㊾足早に出ていこうとするシオン



㊿ギーたちの制止をふり切るシオン



51兵のひとりがレムルを連れ去った



52「しばしの間、お預りいたす！」



53森の中を走るレムルとオリン



54滑空して降下するオリンの竜



55「頭を狙うんだ。外すんじゃないよ」



56オリンの身体に矢が突き刺さる



57流砂に落ちたレムルを助けるベラーナ



58嫌な顔をするレムル



59「もっとも事故で死んだとなると別だ」



60流砂の下の洞窟に落ちたレムル



61背後から地虫が……

STORY

驚くラバーン。また、シオンもシルキーもこの現象を理解できなかった。圧倒的なパワーで押すズワウス。だが、不思議な光がサーバインから発せられ、ズワウスは沼に水没してしまった。サーバインは手の上にレムルを乗せ、大空に飛び上った。

ひとまず城に戻るラバーンとベラーナ。ショットはベラーナに西に向かえと指示を出した。そしてオーラの増幅現象の報告を聞き、一人ほくそえんだ。

シオンたちは地虫に襲われたところをロズン家のものに救われた。彼らは大古の船（オーラシップ、ゲアガリング）を掘り起していた。そしてABに乗り、フェラリオを従えた聖戦士を七百年間待ち続けていたのだ。その聖戦士こそシオンだというのだ。だが、シオンは耳を貸さず、立ち去ろうとした。ところが、家臣の一人、オリンがレムルを連れ去ってしまう。だが、遠く離れた森でベラーナの待ち伏せに会い、オリンは殺され、レムルは地虫の巣穴に落ち込んでしまう。


㉑沼に落下するズワウス


⑳激しい光がズワウスを弾き返す


⑲跳躍し、上からつっこんでくるズワウス!


㉓レムルを乗せ飛び去るサーバイン


㉒サーバインの手の上に乗るレムル


㉗「やはりオーラは増幅されたか……」


㉖「西へ向かえ」と教えるショット


㉕ショットの研究室


㉔水面から浮上するズワウス


㉚何かがサーバインに接近する


㉙岩上の上に人影が…


㉘砂の谷間を進むサーバイン


㉜「あの時、いったい何が起こったの」

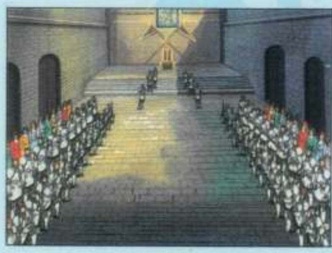

㉛眠り続けるシルキーを抱くレムル

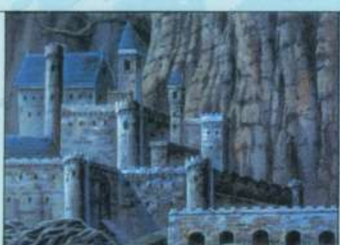

㊱引き上げていく地虫


㉟巨大な矢が地虫を貫く


㉞地虫がレムルに襲いかかる


㉝「いや、何だか判らないが……」


㊵大広間にそろう兵士たち


㊴巨大な木の上に建つロズン家の城


㊳「お待ちしておりましたぞ、聖戦士殿」


㊲「すごい矢だ。まるで槍みたいだぜ」

フィルムストーリー



(81)地虫を引きつけるため、サーバインは剣を突き刺して音を出した



(82)地虫たちは遠ざかっていった



(83)黒騎士軍がロズンの城を襲った



(84)気球にズワウスが積み込まれている



(85)戦闘が開始された



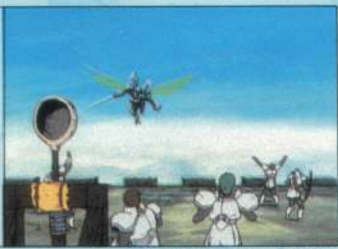
(86)ズワウスが襲いかかる



(87)ズワウスにはね飛ばされる兵士たち



(88)サーバインの気配を感じるラバーン



(89)城に接近するサーバイン



(90)「また奴だ！ダニのような奴め！」



(91)サーバインから飛び降りるレムル



(92)剣を交える2体のAB！



(93)剣を構えて突っ込むサーバイン



(94)頭の脇にサーバインの剣が刺さる



(95)ズワウスの尾が襲いかかった。

STORY

シオンはサーバインに乗って空からレムルを探していた。その頃、レムルは地下を逃げ回っていた。その後を地虫の群れが追っていた。あせるシオンの目に、レムルの位置を示す赤い光点が地表に見えた。シオンのオーラは急速に進歩を始めていた。砂の上から地虫を狙い撃ちするサーバイン。だが、地虫の数はきりがなかった。そこで、目覚めたシルキーを地下に送った。地虫は目が見えず、砂に伝わる振動を感じて獲物に襲いかかるのだ。シオンはサーバインの剣で地面をけずり、地虫を誘い出し、そのすきにレムルは脱出に成功した。

ラバーンはロズンの城を攻めた。巨大な気球船からズワウスが発進する。ラバーンはシオンを求めて破壊を繰り広げた。そこにサーバインが駆けつけた。シオンの腕は短い間に向上し、ラバーンと対等に戦えるようになっていた。だが、強力なズワウスにサーバインは押され始めていた。


64 地面に光点が見えた


63 シオンはレムルの悲鳴を感じた


62 レムルを探しにきたサーバイン


66 「シオン‼　助けてー！」


65 地虫から逃げるレムル


70 剣を突きたてようとするサーバイン


69 シオンとシルキーが共震現象をおこす


68 「そこだー！」


67 地面に降りたサーバイン


73 ベラーナが黒騎士に報告にきた


72 呆然とするレムル


71 サーバインの剣が地虫を切りさく


75 出陣する黒騎士軍


74 「私が指揮を取る！　先導しろ」


80 正面から近づく地虫


77 レムルの前にシルキーが現れる


76 シルキーがレムルを探しに出た


79 地虫の触手が近づく


78 地虫の群れがレムルを取り囲んだ

フィルムストーリー




①「……我らが参じるのは当然こと」


②すねるシオンを見て笑うシルキー


③「敵だ／ 敵襲だ// 城門をしめろ」


④ラバーンに勝負を申し込むシオン


⑤「姫の恋しい男がたずねてきたぞ」


⑥「聖戦士の首はどうだ?」


⑦応戦し始めるラバーン城の兵士たち


⑧「ラバーンめ//」


⑨飛び出してくるラバーンのズワウス


⑩サーバインに迫るズワウス


⑪ズワウスの剣を受け止めるサーバイン


⑫ボウガンを撃つベラーナ


⑬騎士に命中し爆発する


⑭ズワウスに剣をかわされるサーバイン


⑮「甘い//」


⑯ふりかぶるズワウス


⑰指を切り落とされるサーバイン


⑱牢に入れられるレムル


⑲「レムルを返せーっ//」


⑳逆流し始めるオーラロード


㉑「長い間待ち続けていた時がくる」

STORY

ラバーンにレムルを奪われたシオンは、サーバインを駆り、一路ラバーンの城へと向う。一方、ギーを殺されたロズン家の騎士たちも仇を撃つためにシオンと行動を供にする。

一斉に始まるラバーン城攻略戦。だが、ベラーナを頭とする黒騎士側の防戦も激しく、ラバーンの乗るズワウスと剣を交えるシオンのサーバインも、ズワウスのパワーの前に形勢不利な状況へとおちいっていた。



ズワウスに矢が突き刺った



ズワウスに弓を構えるギー



壁に激突するサーバイン



コクピットにスパークが走る



とどめをさそうと飛び上がった



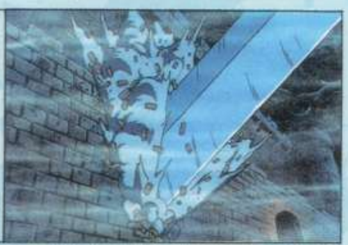
「シオン!!」駆けよるレムル



サーバインの剣がズワウスの腹に！



「じいさん！」



ズワウスが落した剣がギーをつぶした



気球に向かって飛ぶズワウス



ズワウスの手にはレムルの姿が!?



「退却だー！」



遠ざかっていく気球



飛び上がるズワウス

STORY

ズワウスにはね飛ばされ城壁に撃突するサーバイン。剣を構えて襲いかかるズワウス。指導者ギーは、矢をズワウスに放った。矢はズワウスの眼の脇にささり、ラバーンにショックを与えた。だが、ズワウスの剣が落ちてギーを押しつぶした。反撃するサーバイン。たまらずラバーンは退却し、レムルを連れ去った。シオンは追うこともできず、ラバーンに対して強い敵意を抱いた。



雲海に消えていく気球



サーバインは動くことができない



「ラバーンめ……」

フィルムストーリー



㊹シオンに呼びかけるラバーン



㊺つるされているレムル



㊻「お前の良心が痛まなければいいがな」



㊼シオンたちに気付くラバーン



㊽ラバーンの前に現われたシオンたち



㊾オーラロードに引き出されたシオンら



㊿「やめて！　やめて下さい!!」



51「私の自由になるか？」



52「俺の方から飛び込んでやる」



53「わかりました」



54「このガケから追放ってことだ」



55岩を必死に押すシルキー



56突然兵士につきささる矢



57ボウガンを構え出現するショット



58ガルーにつきささる矢



59ガケから落ちていくガルー



60「俺たちをどうするつもりだ」



61不敵に笑いながら答えるショット



62ショットに飛びかかるミシュラン



63呆然とするミシュラン



64「殺す気ならとうに殺しておる」

STORY

シオンはサーバインを捨て、数人だけで城へ忍び込もうとする。だが、夜襲を警戒していたガルーたちに捕えられてしまい、水牢に入れられてしまう。

水牢に入れられた一同を待っていたのは、そこに巣くう巨大なミミズのような化物(モンスター)であった。モンスターの攻撃に、深手を負うボーゼ。シオンは自分の責任かのように気落ちするが、ミシュランの励ましの言葉に気を取り戻し、ラトーの習性を利用して見事に水牢から脱出することに成功した。

一方、シオンらの脱走を知ったラバーンは、レムルを人質にシオンを呼び出そうとする。そして捕えたシオンの命と引きかえに、自分の自由になれとレムルに迫った。シオンを救うためにそれを承諾するレムル。しかしラバーンは、約束をやぶりシオンたちを殺そうとする。そんな彼らを救ったのはショットだった。


㉒そして夜を迎えた


㉓戦いはロズン側にも……


㉔ラバーン側にも多くの死傷者を出した


㉕「命拾いをしおった……」


㉖４人だけで城に忍び込もうとする


㉗先にレムルを探しに行くシルキー


㉘「へっへっへついてねぇなお前ら」


㉙「そこでせいぜい楽しむことだな」


㉚水牢に入れられてしまったシオンたち


㉛水の中からモンスターが現われる


㉜モンスターにつかまるボーゼ


㉝鎧にくい込むモンスターのキバ


㉞必死の思いで剣をつきたてる


㉟シオンたちもボーゼを救いだそうと、それぞれ剣をつきたてていく


㊱ボーゼを見守る一同


㊲「だから俺についてくるなって……」


㊳シオンをはげますミシュラン


㊴何かに気付くシオン


㊵ラトーを利用して脱出をはかるシオン


㊶ロープをたくり寄せるシオン


㊷「くそぉー」


㊸「ベラーナ、レムルを連れてこい」

フィルムストーリー



87「城が、私の城が燃えている」



88ズワウスをはね飛ばすサーバイン



89飛び上がるズワウス



90あとを追うサーバイン



91「逃がすものかあーっ!!」



92「あの化物みたいな老人のところへ」



93オーラロイドの逆流を知るショット



94スイッチを押すショット



95岩壁をつき破り入ってくるズワウス



96「騙したなショット、裏切り者め！」



97「それに気付いた所で何もできまい」



98「ならばともに殺してやる!!」



99ミサイルの中に入っていくショット



100「悪くても死、うまくいけば……」



101「シオンっ!!」



102レムルにきりかかるベラーナ



103「レムルっ!!」

STORY

シオンを葬むりさったと確心したラバーンは、攻撃頭の抜けた敵の夜営地に夜襲をかけた。必死に防戦するロズン側ではあったが、ラバーン側の優位はかわらなかった。
　乗り手のいなくなったサーバインを、自分の物にしようとラバーンのズワウスが手をかけようとした瞬間、突然サーバインが動きだした。死んだと思っていたシオンが乗り込んでいたのである。驚愕するラバーンに向かって、シオンはショットに助けてもらったことを語った。ショットの裏切りに怒るラバーン。
　その頃、レムルを探すために城に潜入していたシルキーは、レムルを見つけだし、城内に火を放って脱出を計った。
　一方、城に火の手が上がったのを見たラバーンは、ショットを捕えるために城に引き返した。ショットはオーラロードを逆流させ、核ミサイルを地上で爆発させて世界を崩壊に導こうとしていたのである。その計画のために自分が利用されていたと知ったラバーンは、防害しようとミサイルに迫るが……。



104シオンのオーラがレムルを救う



105ベラーナは機械を止められなかった



106「ええい、役たたずが」



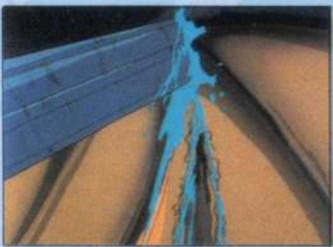
107ミサイルに向かうズワウス


68出撃するズワウス


67弓を構える騎士たち


66出陣してくるベラーナ


65疲労をいやしている騎士たち


72羽を切りさかれるズワウス


71覚醒するサーバイン


69サーバインに近づくズワウス


73「なにっ！　まさか」


70「私がいただくことにする」


77ズワウスの剣を押さえるサーバイン


76「ショットが逃したというのか」


75「驚いたかラバーンっ!!」


74ズワウスの腕をえぐるサーバインの剣


81「おい、何をやってる」


80「シオンたちはうまく逃げたわよ」


78「始めてから信じていた訳ではないが」


82自分の服を破るレムル


79牢屋内のレムル


86城に火の手が上がる


85油倉庫に火が広がる


84ランタンを手にするレムル


83見張りをつきとばし脱出するレムル

バイストンウェル絵巻

イラストギャラリー



AURA BATTLERS 2



(108)ミサイルの先端を切り落とすズワウス



(109)ミサイルにとりつくズワウス



(110)「お前のたくらみもこれまでだ」



(111)「やめろ〜っ!!」



(112)ミサイルを握りつぶそうとする



(113)「はっはっは無意味なことを……」



(114)「シオーンっ！　何とかしないと」



(115)「どうしたらいいんだぁーっ!!」



(116)機械に剣をつきさすサーバイン



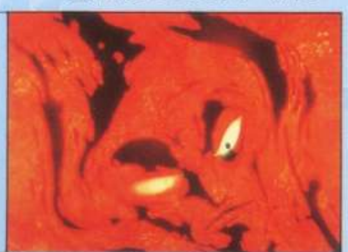
(117)ミサイルが爆発を始める



(118)次第に誘爆していく



(119)「う、うわぁー!!」



(120)ショットもまた消しとんでいく



(121)サーバインを包むオーラの力



(122)レムルをかばうサーバイン



(123)サーバインの周りは崩壊している



(124)たたずむサーバイン



(125)たたずむシオンとレムル



(126)シオン



(127)レムル

STORY

ミサイルにとりついたラバーンは、ショットが乗り込んだ先端を切り落とし、勝ちほこったように叫んだ。
だが、そんなことは無意味だとショットは高笑いし、ミサイルのカウントダウンは一向にやまなかった。成す術のわからないシオンは、サーバインの剣を機械につきたてた。
その瞬間、ミサイルがまばゆい光に包まれ、次々と誘爆し始めた。



(128)その後……



(129)手をとり合う2人



(130)シオンとレムルは……

イラストギャラリー



●ＬＤジャケットイラストPart3



●ＬＤジャケットイラストPart1



●ＬＤジャケットイラストPart2



●ＬＤジャケットイラスト by 幡池裕行 & 佐野浩敏



●ビデオパッケージイラスト　by　出渕　裕



●ビデオPart2宣伝ポスター　by　末弥　純

●シングルレコード　ジャケットイラスト　by　幡池裕行



GUEST ILLUSTRATION BY YUICHI EGUCHI

天駆ける巨人騎士

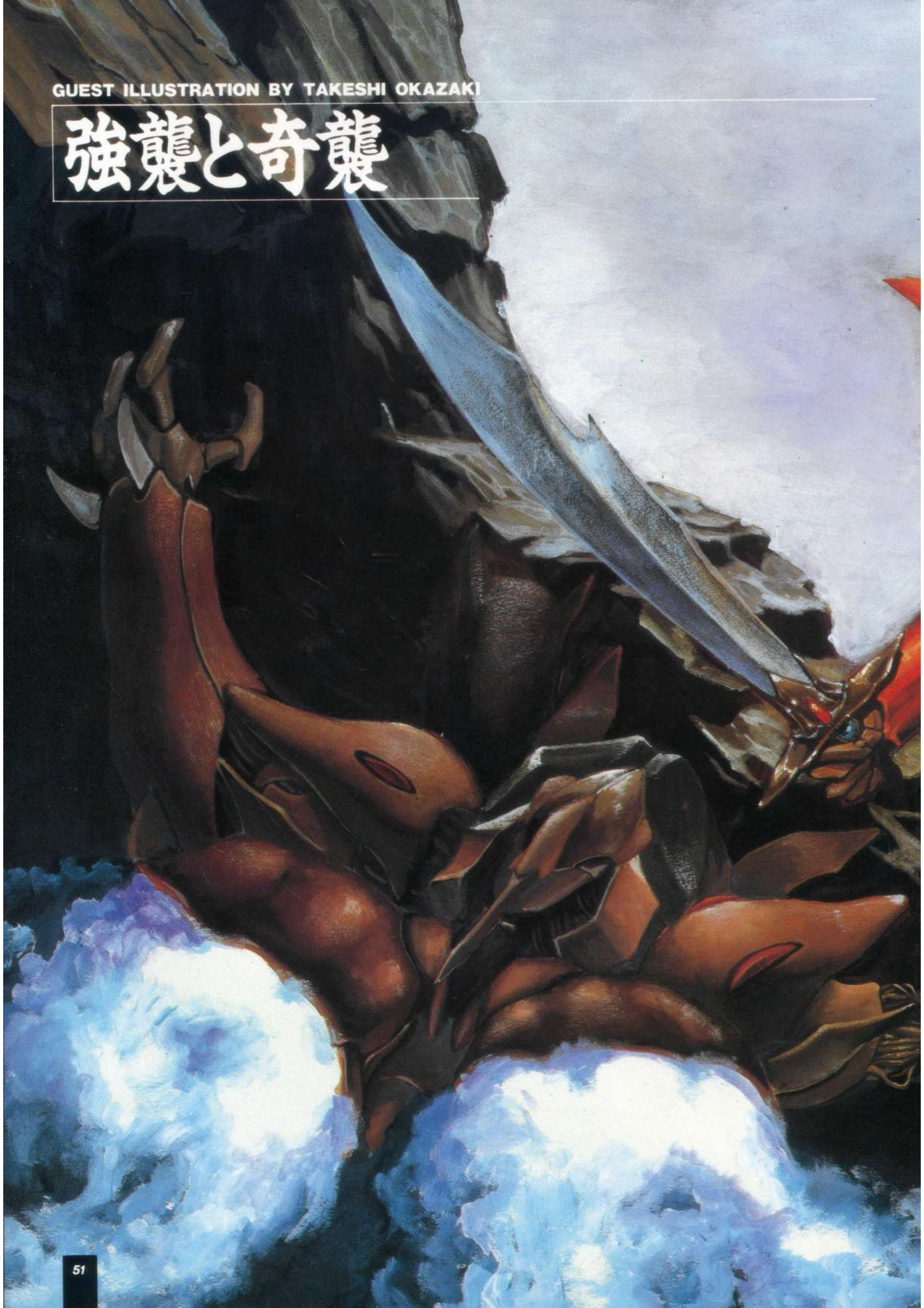




うっそうと生い茂る樹界の上空で2人の巨人騎士が剣を交えていた。一方は黒き邪神の化身、もう一方は蒼色の聖なる戦士。2人のあげる咆哮は、はるか樹界のかなたまでも鳴り響いたという。

GUEST ILLUSTRATION BY TAKESHI OKAZAKI

強襲と奇襲





その巨人騎士は大地に倒れこんだ。片腕を引き千切られ、翼はむなしく白煙を吹き出し、もう大空を駆ける力もない。すでに戦う力を失っていた。騎士はその軀に見切りをつけると、決死の覚悟で敵巨人騎士にとりついた。

GUEST ILLUSTRATION BY TAHIRO MINE

戦火の果てに……





道端に騎兵たちの死骸がころがっている。逃げ出してきた村を振り返ると、すでに炎に包まれている。いったいどのくらい逃亡を続けているのか…少年は身も心も疲れきっていた。その時、騎兵の上の少女が新たな敵を発見した。少年は気をひきしめて剣を手にした。

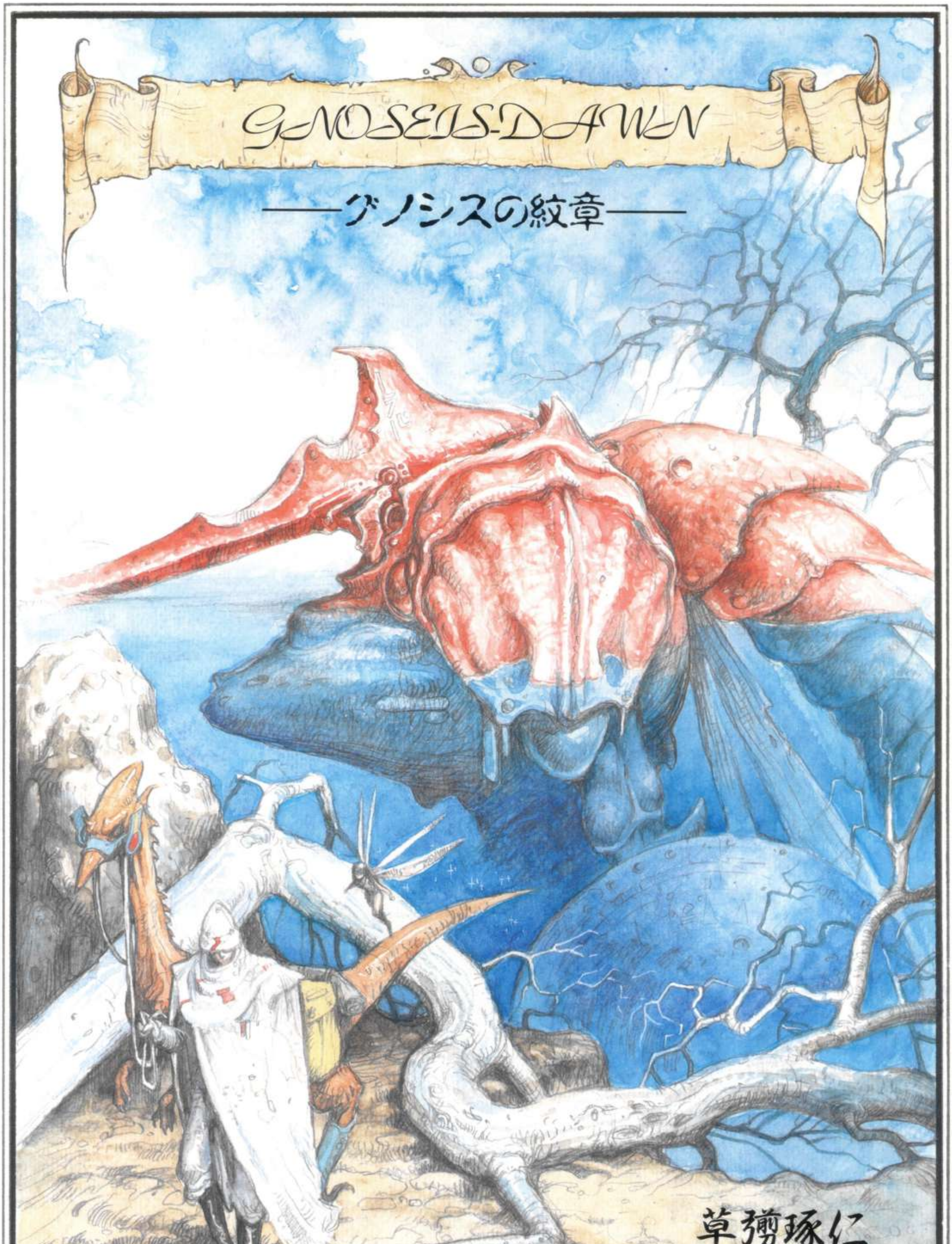
オリジナル コミック


同盟諸国の裏切り
主力遠征時の奇襲
私だけが生きのびて戻った時
賢王の統べりし国
グノシスはすでに
無かった
王は討たれ
王妃は未だ乳香児だった
王女と共に
虜囚として
連れ去られた
無事を信じ
私は
国中の城に
潜り
牢を破った
だが
そうして
見つけたものは
王妃の形をした
冷たい屍蠟
だけだった
あれから
すでに七紀の
時がたつ…
いや…
今の私にとっては
皆 昔の話だ
もう
思い出しは
すまい…

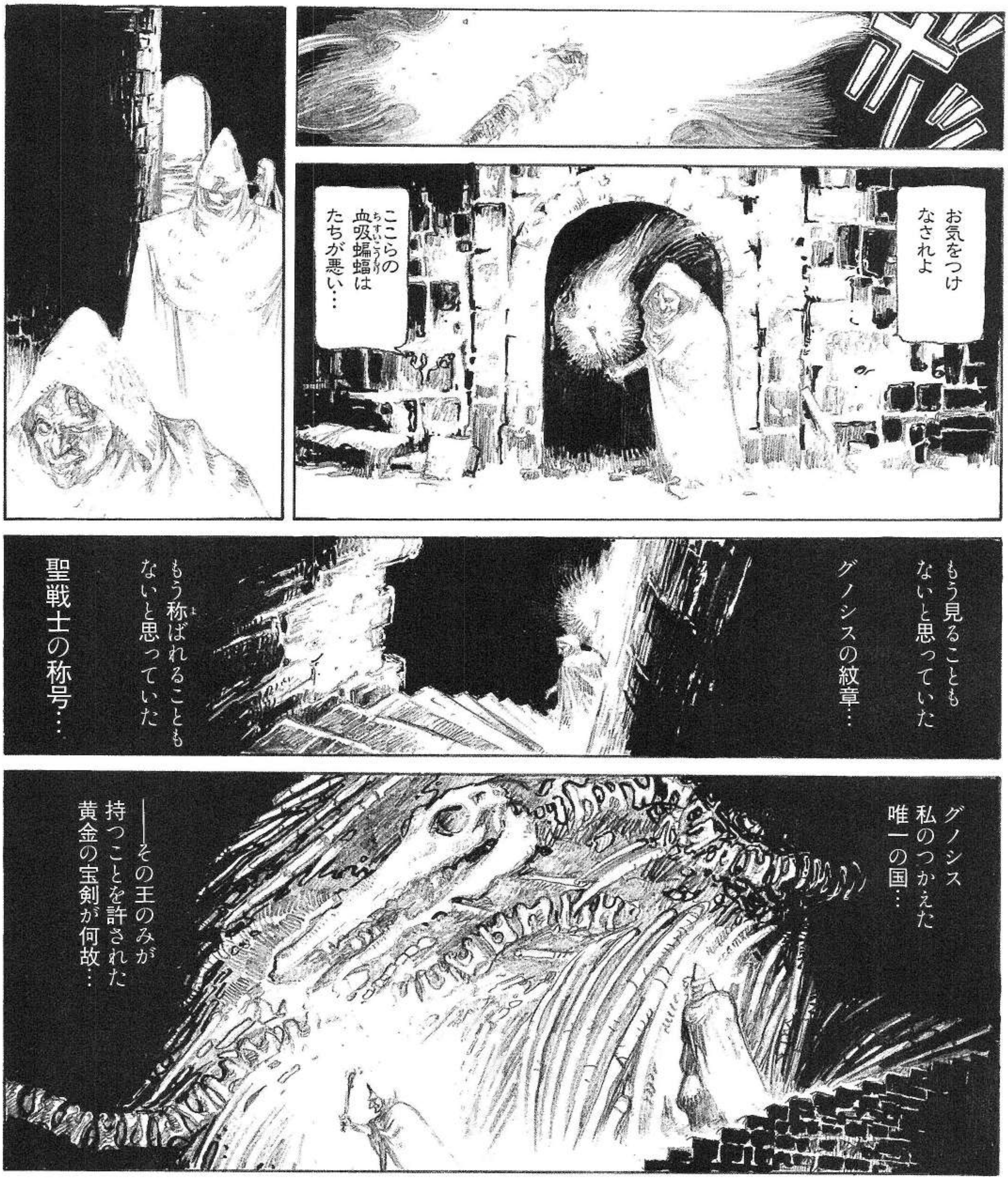

古への頃より
精霊ルーヴァは
この森で逝く幾多の
戦士達を眺めてきた
或者は名誉の為
或者は
守るべき者の為
戦い、死んでいった
そして又、今も
この精霊の森で
戦士達は
何かの為に
散っていった

オリジナル コミック


どうやら
オーラバトラーを
捨てたと云う
のは本当
らしいな…
ひっ
ま まってくれ
話があるんだ
渡したいもの
があるんだ
ひいい


GNOSEIS-DAWN
——グノシスの紋章——
草薙琢仁
TAK・KUSANAGI PRESENTS

オリジナル コミック


ボッ
お気をつけ
なされよ
ここらの
血吸蝙蝠(ちすいこうもり)は
たちが悪い…
もう見ることも
ないと思っていた
グノシスの紋章…
もう称(よ)ばれることも
ないと思っていた
聖戦士の称号…
グノシス
私のつかえた
唯一の国…
――その王のみが
持つことを許された
黄金の宝剣が何故…
こやつ一体何を
知っているのか…
へっへ
ここじゃ
ここじゃ
さあ とくと
ごらんあれ
ガコン


そそうだ!!
こいつを見れば…
これを見てくれ
この剣!!
!!
ひ――
肝を冷やした
わい
貴様
これをどこで
手に入れた?
へっへ
気に入られた
ようですな
じゃが
渡したいと云う
のはそれの事じゃ
ない…
これが何か
知っているのか?
へへ…
ついて来なされ
聖戦士殿

オリジナル コミック

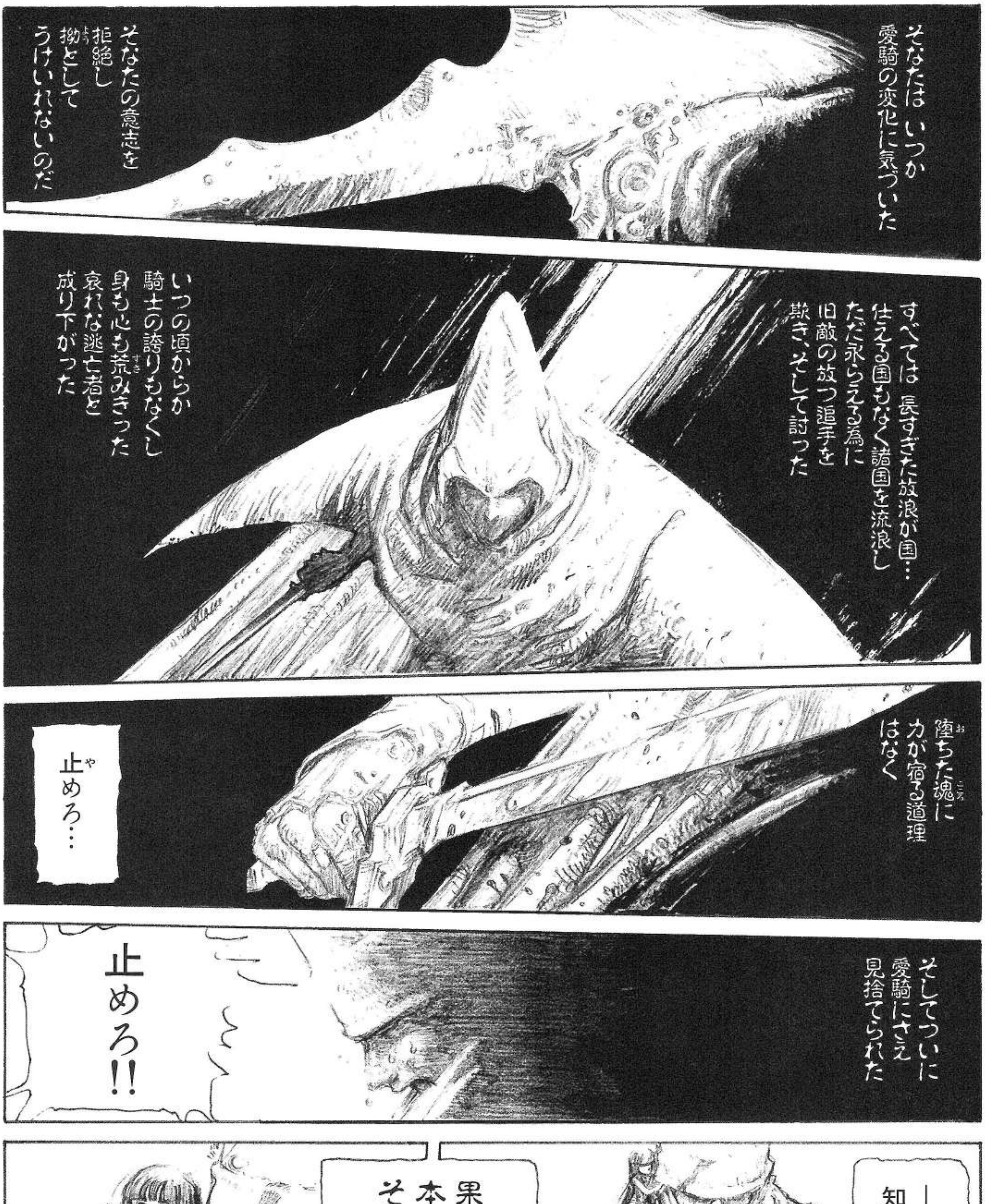

ようこそ我が宮殿へ!!
誰か!?
そのような事より用件は聞かれておろうな!?
用件?
すると渡したいものとは…
その通り この巨人騎士(オーラバトラー)
ユーゲレオンをそなたに授けたい
――何のつもりか知らないが…
私はもう…
そなたが巨人騎士を捨てたことは存じておる そしてその由(わけ)もな
今ここでそなたに明かせてしんぜよう



ORIGINAL AURA BUTTLER — YUGERON —

オリジナル コミック


すべてのオーラバトラーには限界がある…
騎士の力がそれを越えれば暴走をはじめやがては自滅する
じゃが名だたる工人の手によるものにはそうなることを回避する自己防衛のすべを具えもつと聞く
私の場合もそうだと云うのか？
解からぬ…じゃがその是非を確めたい
ためされよ!!そして戦われよ!!
戦う!?
相手はすでに待ちかねておる
!!
そなたに相応しき者のはずじゃ


そなたは いつか
愛騎の変化に気づいた
そなたの意志を
拒絶し
拗として
うけいれないのだ
すべては 長すぎた放浪が因…
仕える国もなく諸国を流浪し
ただ永らえる為に
旧敵の放つ追手を
欺き、そして討った
いつの頃からか
騎士の誇りもなくし
身も心も荒みきった
哀れな逃亡者と
成り下がった
堕ちた魂に
力が宿る道理
はなく
止めろ…
そしてついに
愛騎にさえ
見捨てられた
止めろ!!
――そこまで
知って…
果たして
本当に
そうなのか!?


搭乗なされよ!!
そして必ずや新たなる力を!!
ズゥゥン‥
ドクン・
!!
ドクン


――もし
貴様の云うようでなかったなら…?
その時は…
そなたは　このユーゲレオンに乗取られるじゃろう
!!
――面白い…
騎士として再びオーラバトラーを駆るかさもなくば虜となるか…
声の男よ
この試練喜んで受けよう!!
フハハハハ
それでこそ聖戦士よ


おお…。
聖戦士!!
ドゥオオオ
イィィィィィーン
ドクン
ハア
ハア
ハア
ドクン


こ……このオーラバトラーは!!
これは……
うおおお

オリジナル コミック




何というオーラバトラーだ
この感覚!!
この力!!
まるで力が
千倍にもなって
甦るようだ!!
このオーラバトラーならば
どのような敵にも…
負けは
せん!!
!!

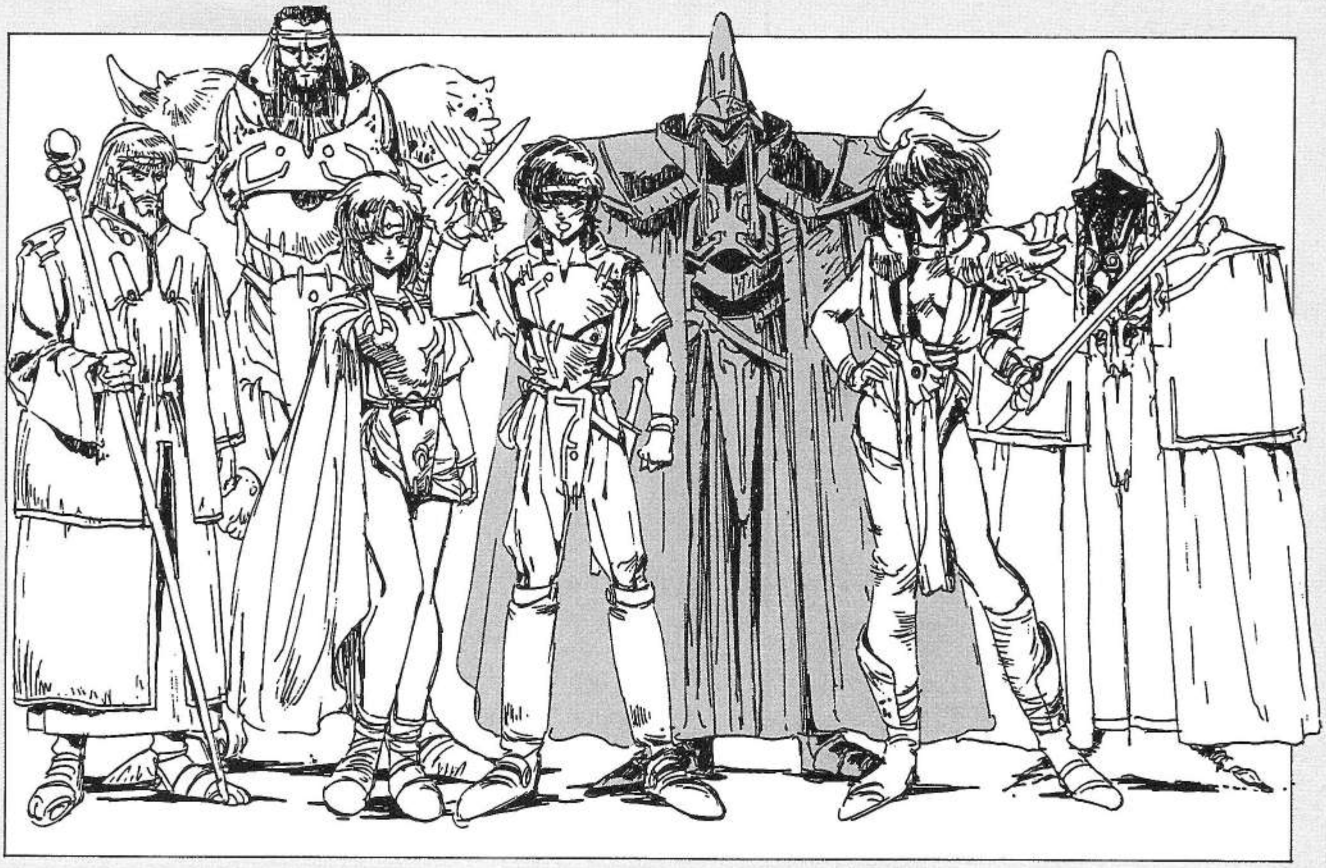
オリジナル コミック


数々の無礼
お赦(ゆる)し下され
そなたの真の力
我らの想像以上
!!
そなたこそ
聖戦士の称号は
相応しい
我ら
そなたと同様
今は亡(な)き
グノシス王に
恩ある者
そして
再びグノシスの旗
掲げんと
集(つど)いし者!!
!!
改めて
お願い申す
このオーラ
バトラー駆り
我らと共に
戦い下され!!
亡き王の忘形見(わすれがたみ)
正統なる継承者
シレイア姫の下(もと)
再び我らが王国を!!
何と
云われた!?
老師


すでに一刻・・・
果たして・・・ん？
!!
ズズン
そこまでだ!!
お見事です聖戦士

OVA

設定資料集

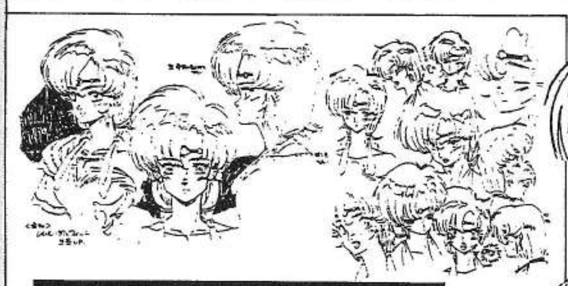


AURA BATTLERS 2



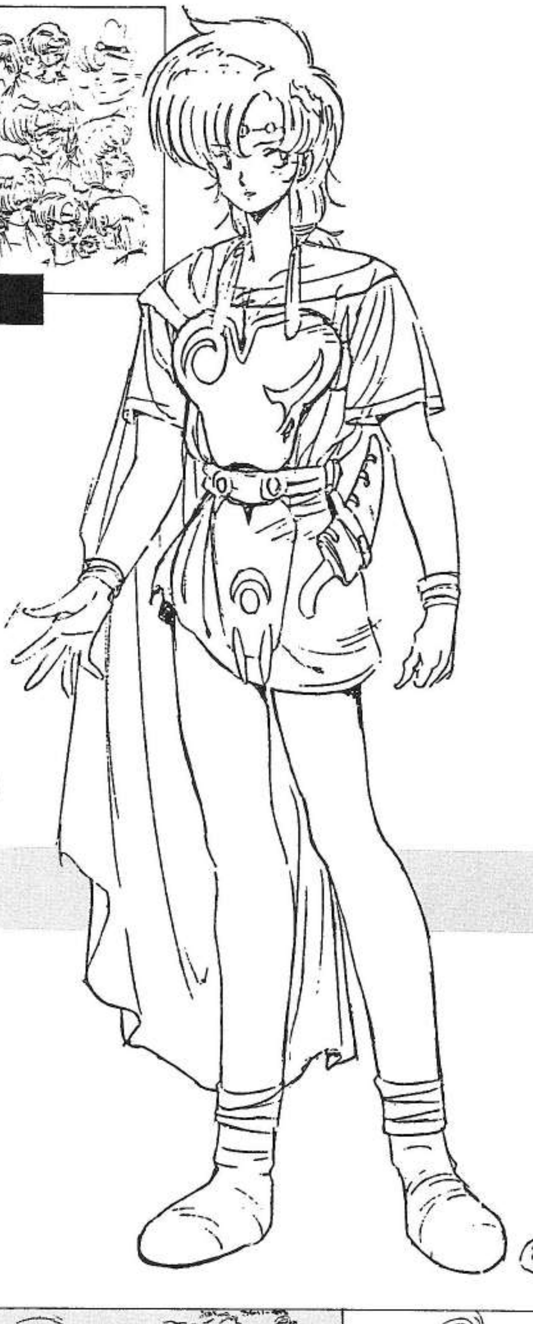
BGM R.SAKAMOTO ETUDE / PARADISE LOST

設定資料集



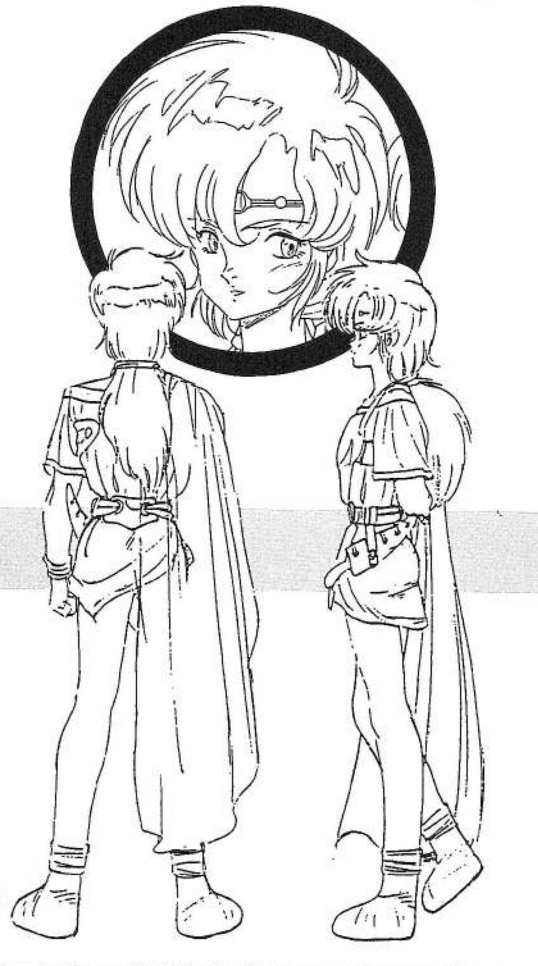
レムル表情集





レムル・ジルフィード

バランバランの王女として民とともに秘宝を守り続けていたリムル。黒騎士の乗るズワウスの襲撃のために、一族の民は殺され、ラバーンの手におちる。





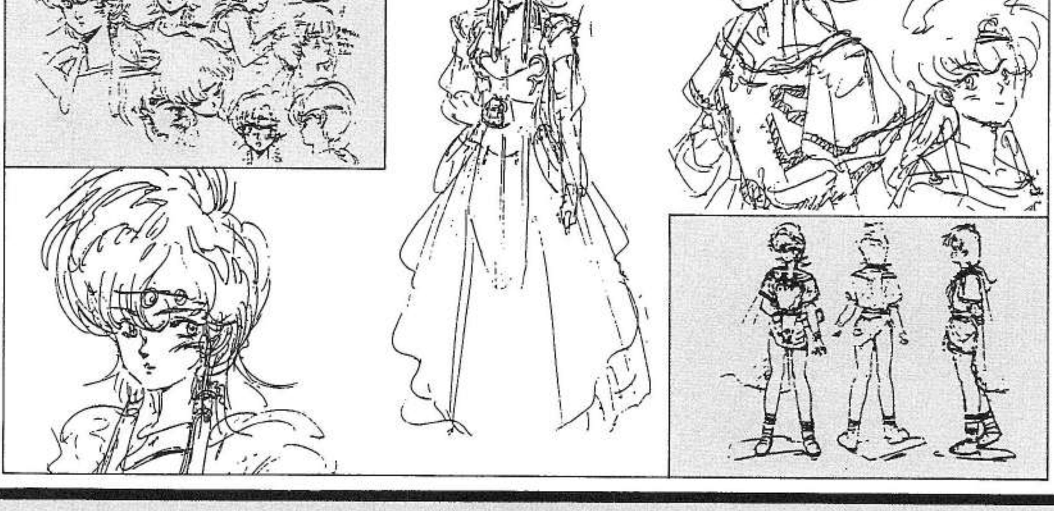
キャラ・デザイン
幡池裕行

角川書店や朝日ソノラマの刊行している小説さし絵等で活躍中のイラストレーター。

デザイン作業に入ったころ湖川（友謙）さんのキャラクターをかなり意識していました。その後、打つ合わせを重ねていくうちに、今のファンは出渕さんのお描きになった「オーラファンタズム」のイメージの方が強いのではという結論に達し、彼（出渕氏）の耽美なムードを出していくことになりました。

自分の絵が動いた感想というのは「奇妙なものだなァ」と思いました（笑）。僕はイラストレーターですからタッチ上のアクが強いんですよね。作画監督に谷口さんが決ったのも1本目のデザイン作業が終ったころでしたから、フィルムを作る上での打ち合せをする機会がなかったのが残念だったし、僕の反省点ですね。

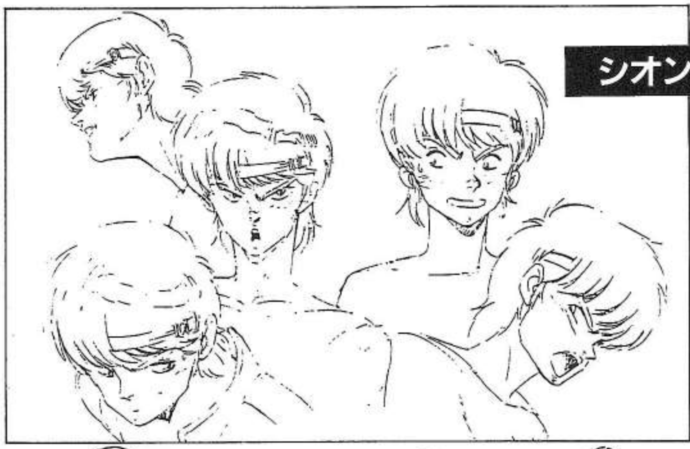
●レムルラフ稿

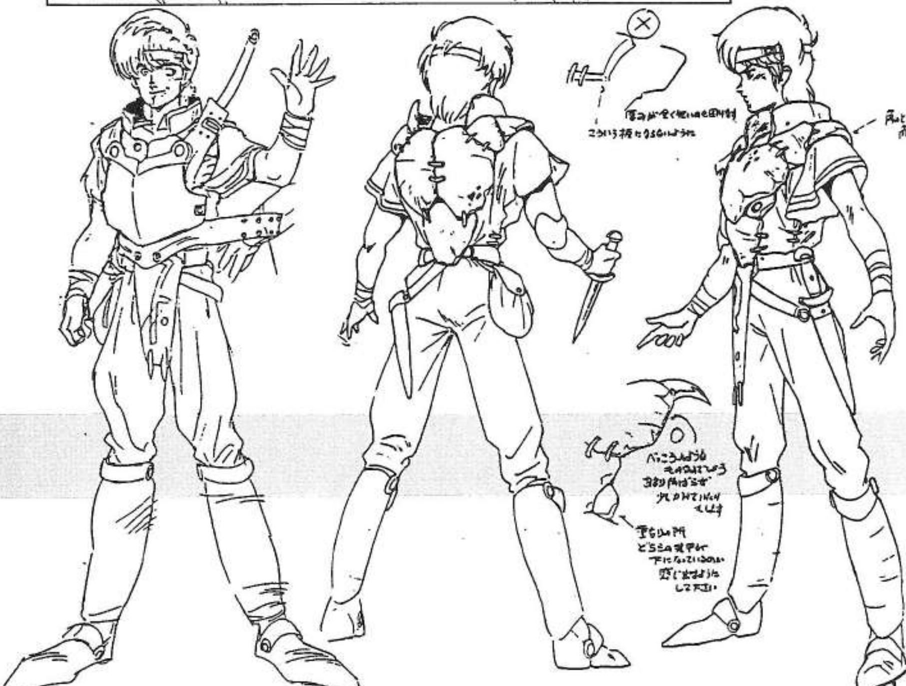


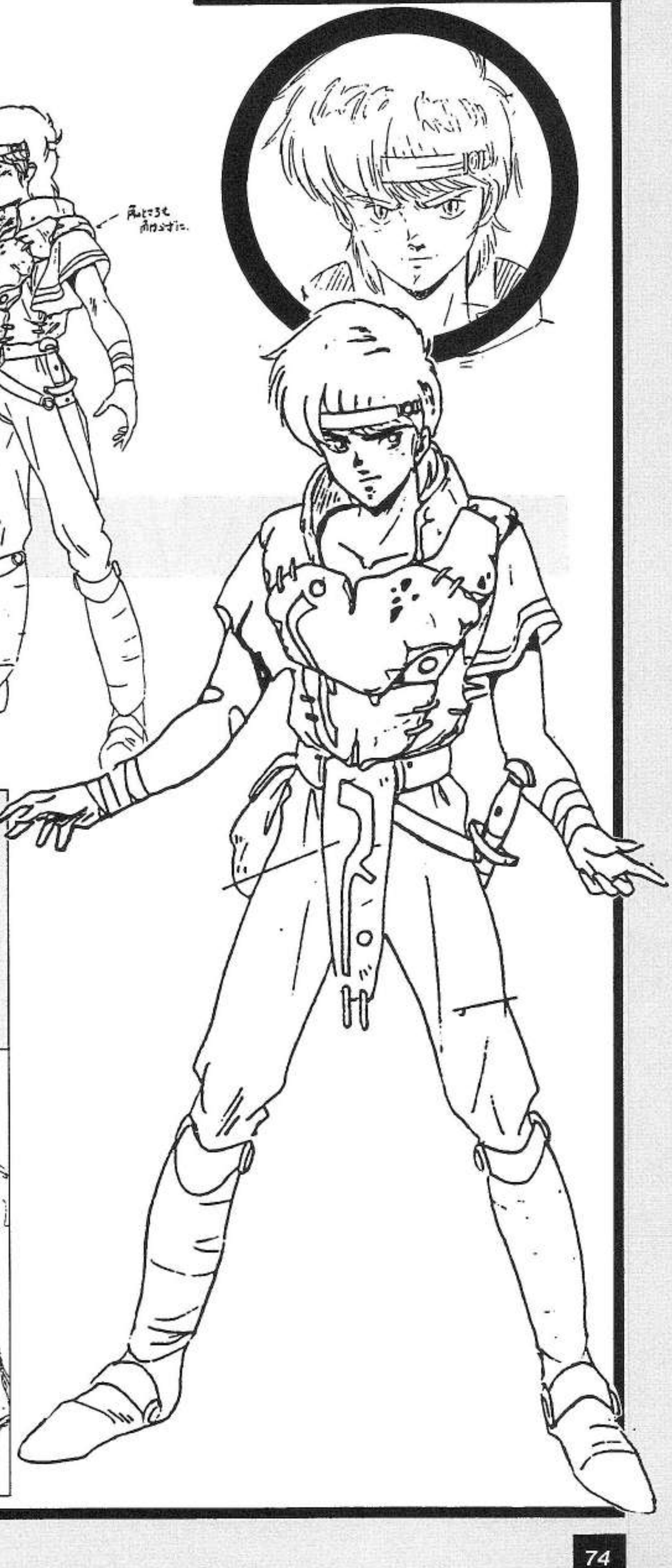
シオン・サバ

平凡な狩人の一少年であったシオン。森の中でフェラリオを捕えたときから、彼の人生は大きく変貌した。聖戦士として巨人騎兵（オーラバトラー）を操り、王女レムルを、平和を守るために黒騎士ラバーンと戦う。

シオン表情集







●シオン・ラフ稿

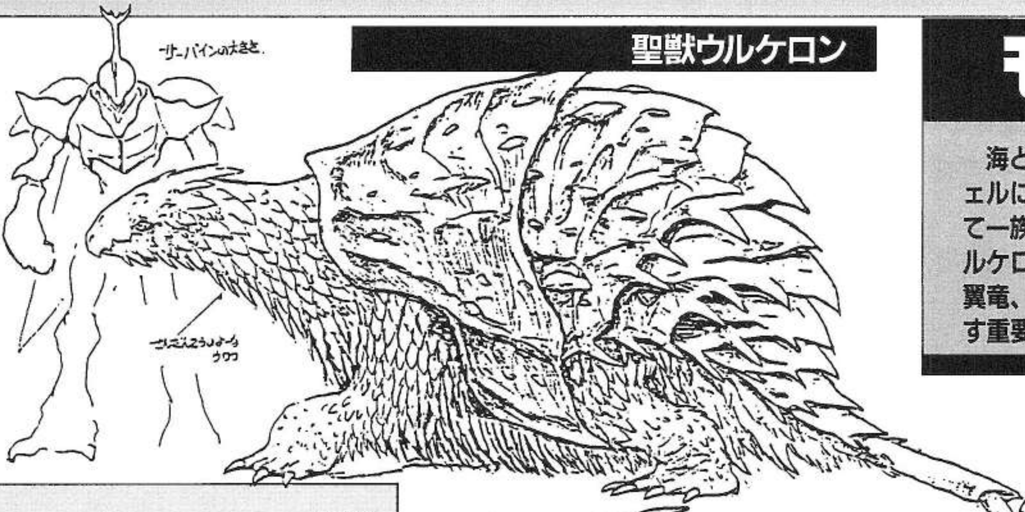


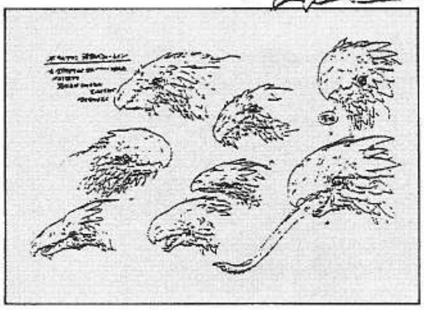
設定資料集

モンスター1

海と陸のはざま、〝バイストンウェルに生息する生物たち。聖獣として一族の守り神としてうやまわるウルケロン、乗り物として使用される翼竜、使い虫など世界感をかもしだす重要なキャラクターである。

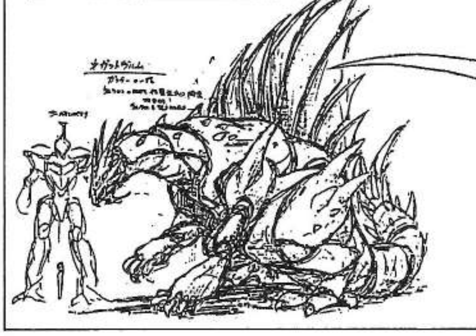
聖獣ウルケロン





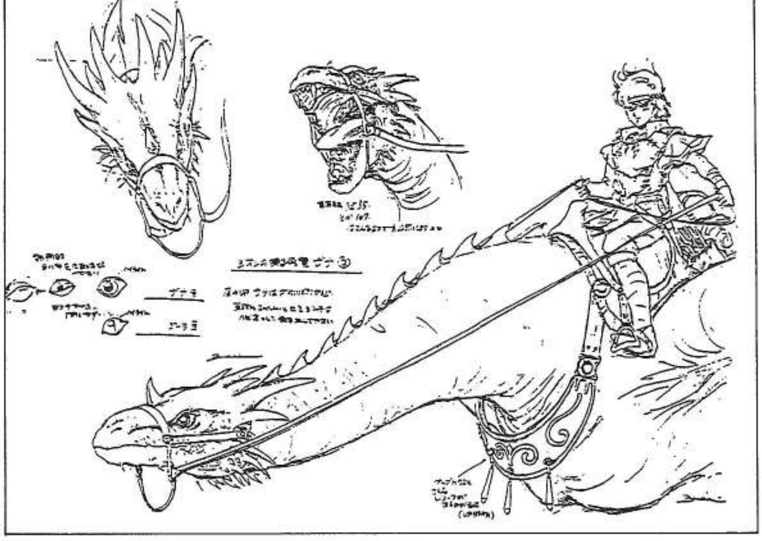


ガットヴルム(本編には未登場)

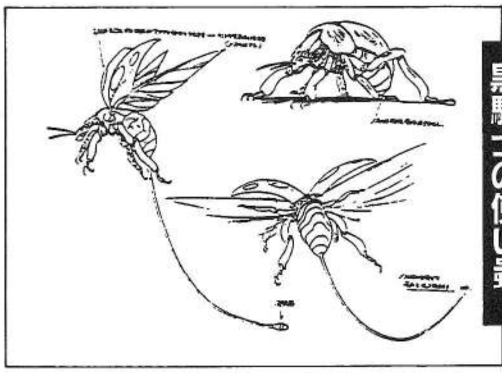




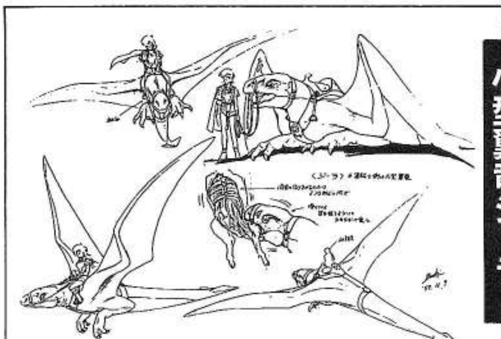
シオンの乗る飛竜 ザナ



黒騎士の使い蟲

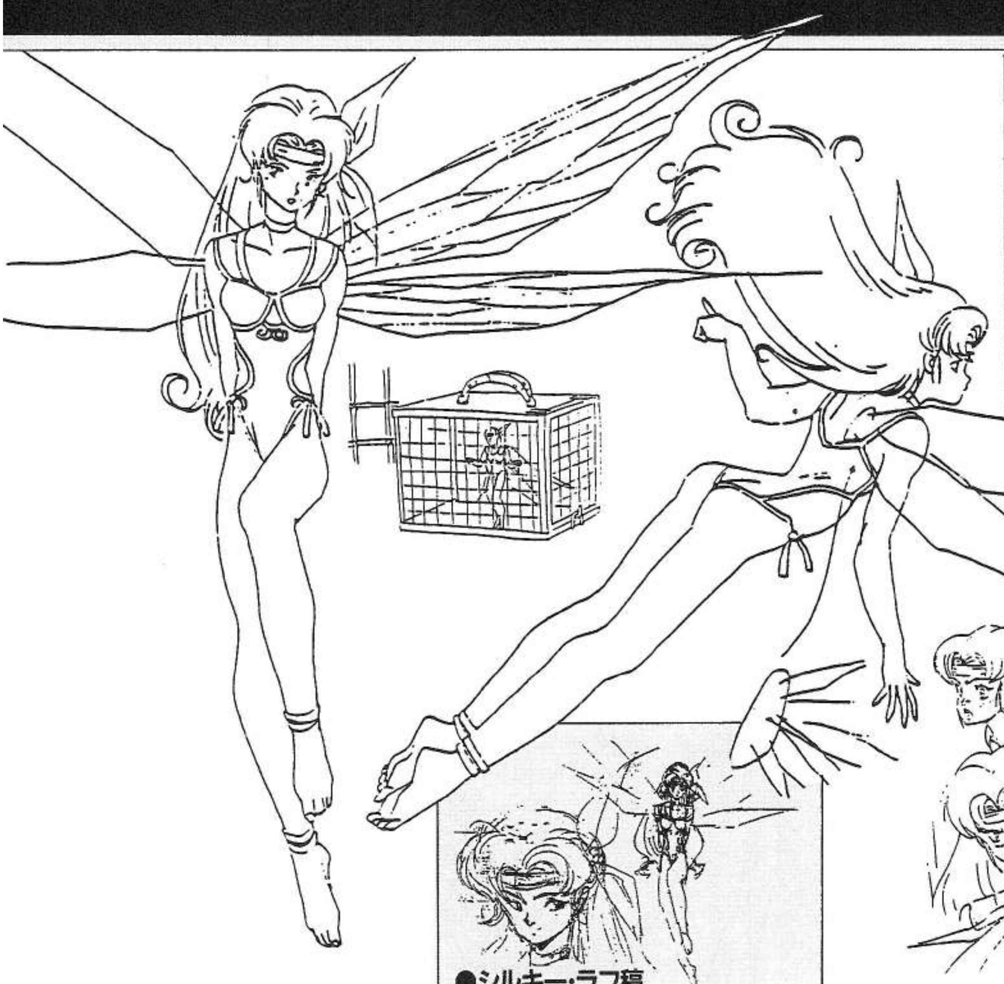


小型翼竜ジーラ



シルキー・マウ

シオンの手によって捕えられたフェラリオ。ラバーンの襲撃のさいに一度はとき放たれたが、シオンに好感をいだき行動を共にするようになる。シルキーのオーラがシオンを、サーバインを覚醒させる要因となる。



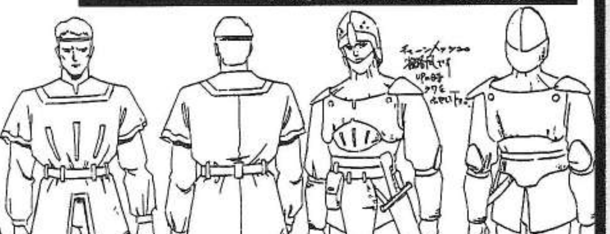


●シルキー・ラフ稿

バランバランの人々

王女レムルとともに秘宝を守り続ける谷間の民。森に囲まれたほんのわずかの空間でほそぼとそ生活を営んでいたが、秘宝を狙う黒騎士の野望の前に、そのほとんどの民が命を失ってしまう。

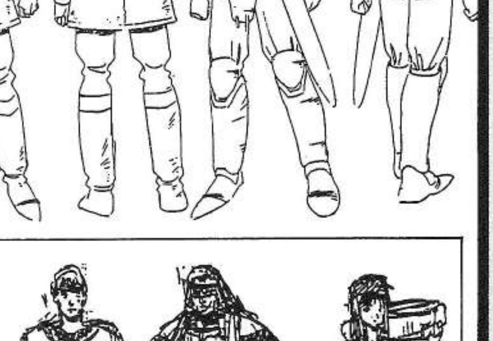
バランバランの城兵



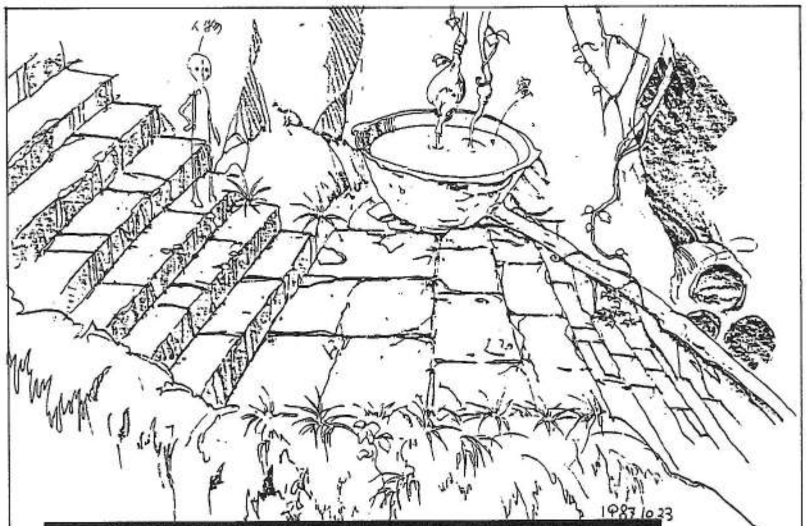


メムノン卿

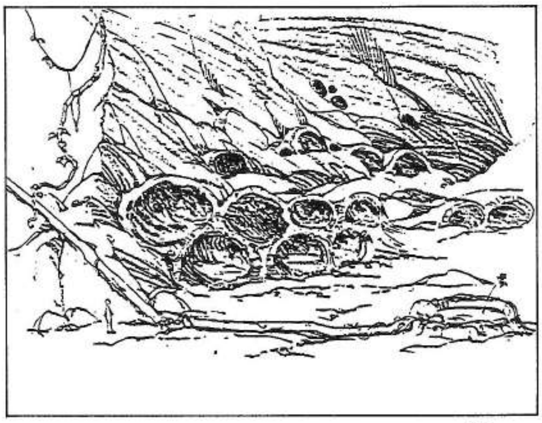
バランバランの村人



設定資料集



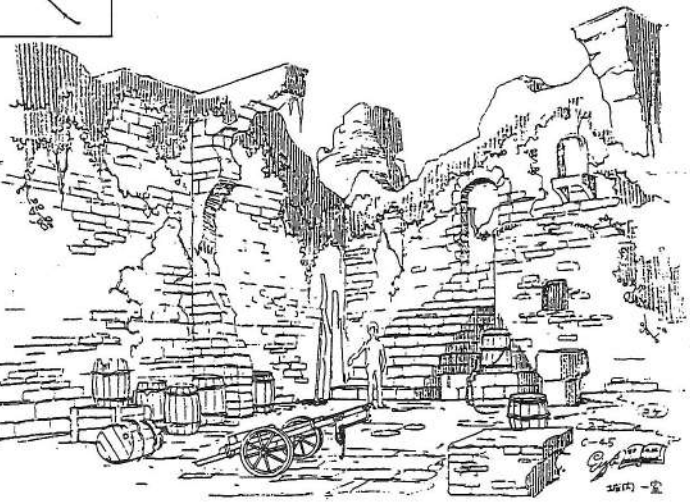
甲殻類の液体入れ



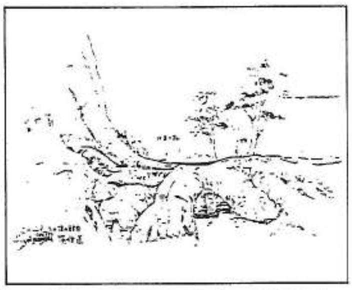
ウルケロンの巣穴



城の脇のヒョウタン



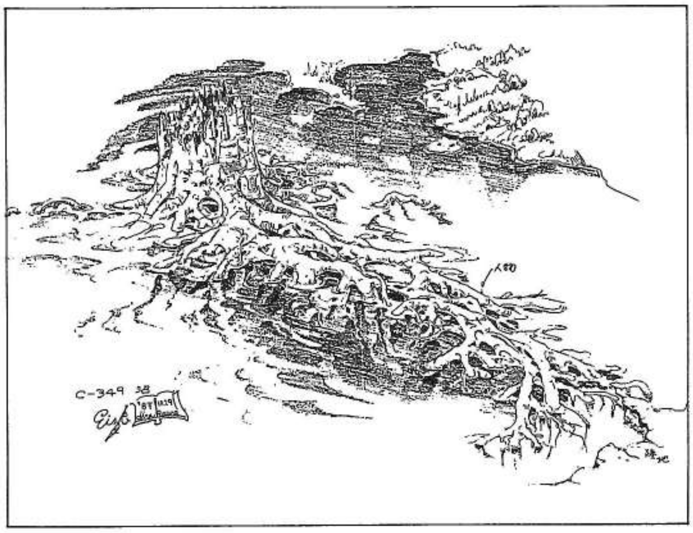
城内一室



巨木の根



巨木の根・UP



沼



監督
滝沢敏文

「ダーティペア（TVシリーズ）」のCD等で知られる映像派アニメーションディレクター。

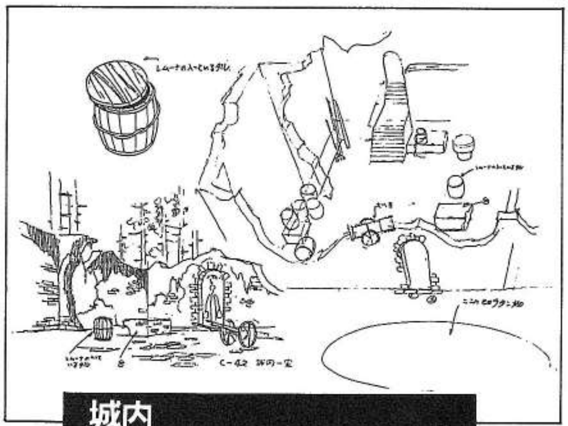
今回の作業に入る前「オーラバトラーズ」を見せられたんですよ。それでガレージキットのページを見て生物的な処理が「面白いな」と思いまして、ビデオではその質感を表現したくてハーモニー処理という手法をとったんです。よけいなお世話なのかもしれないけど（笑）、富野（由悠季）さんがTVシリーズでやりたかったこと、映像的には違ったんじゃないか、というのが私の意識にありましたからね。

お話はお姫さま奪還という基本ストーリーの中にホラー的なものやファンタジーの要素をとりこんで、とにかく楽しく見られるものをと思って作りました。僕としては3本をつづけて見てほしいですね。

バランバランの城

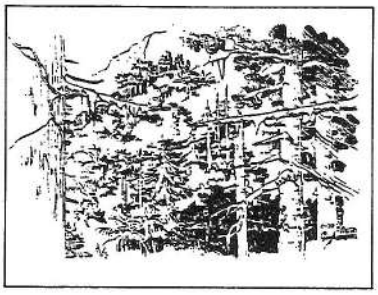
秘宝としてオーラバトラー、サーバインを護り続けてきた民、バランバランの谷人の城。

ところどころに破損のあとがあるのは、度重なる黒騎士の襲撃を物語っているのだろうか。



城内

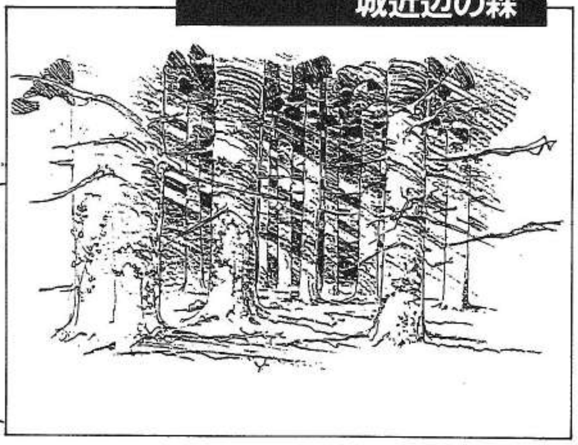
城近辺の森



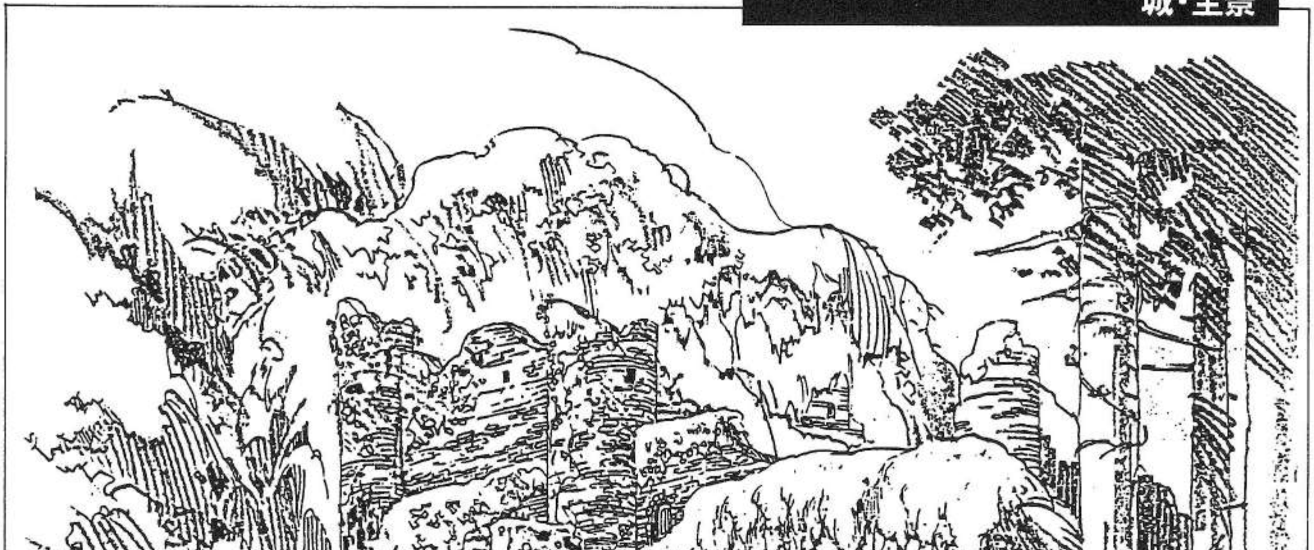


城を望む情景

城近辺の森



城・全景



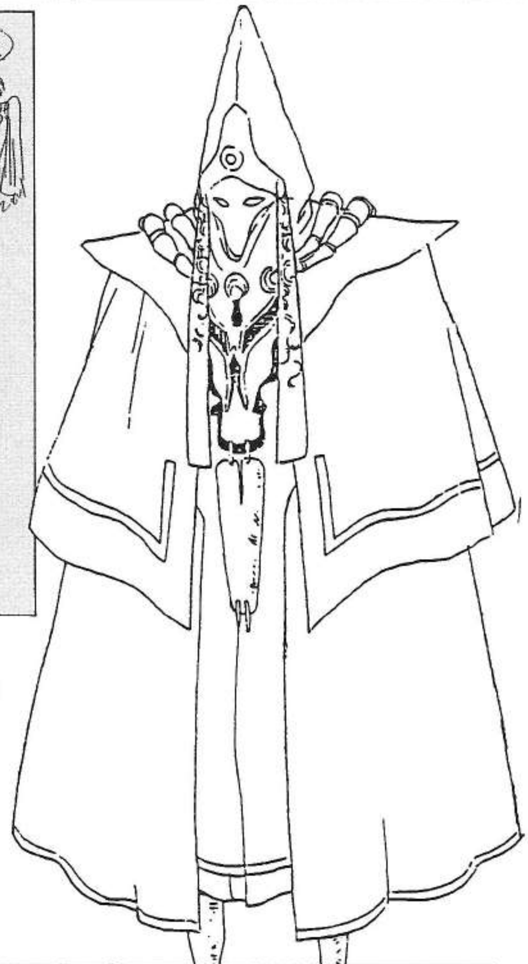
設定資料集

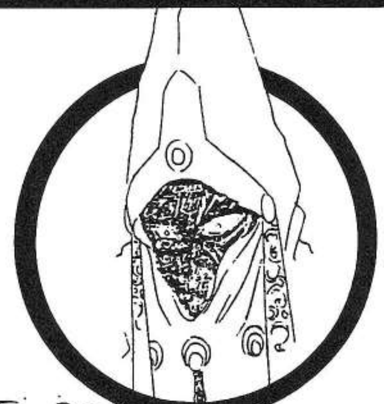
ショット

オーラバトラーを開発し、地上とバイストン・ウェルをまきこむ戦いの原因を作った男。その罪のゆえか、死ねない体になっている。彼は、再び戦乱を起すことにより、オーラロードを逆流させようとした。



●ショット・ラフ稿









ベラーナの部下



黒騎士の部下達

ガルーを長とする黒騎士配下のガロウ・ランの戦士たち。コモンの兵士たちに較べ、力は強く格闘技にも長けている。しかし、頭は良いとは言えず、ラバーンの命令の下、手足のように戦うのみである。



ガルー



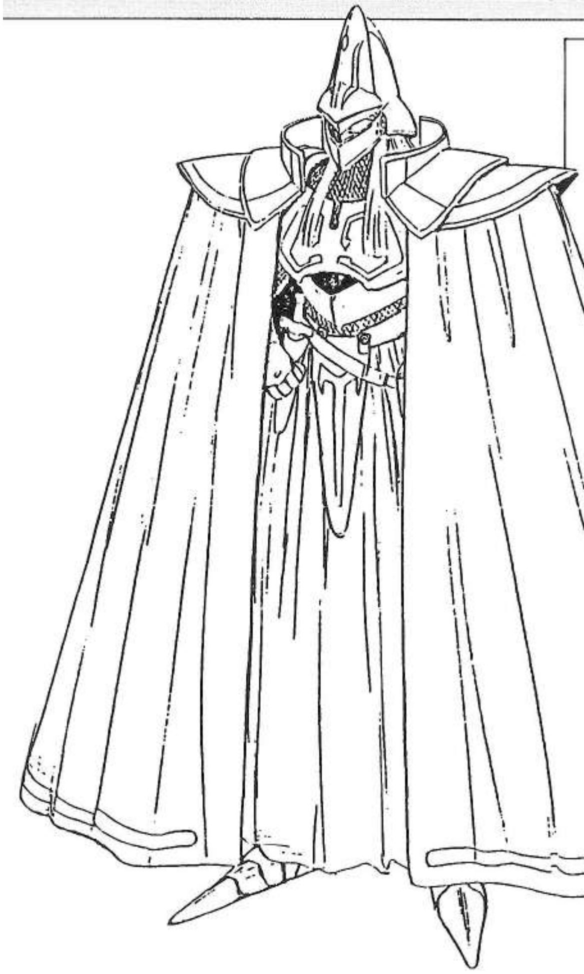
ガロウラン・鎧



黒騎士配下のガロウラン

黒騎士・ラバーン

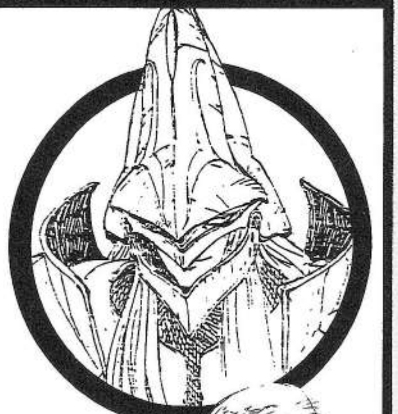
"黒騎士"の異名をもつ騎士。ショットより与えられたオーラバトラーズワウスを駆りバイストン・ウェルを支配しようとしていた。しかし、彼はその野心をショットに利用されていたのだ。





少年時代のラバーン







ベラーナ・ガリアッハ

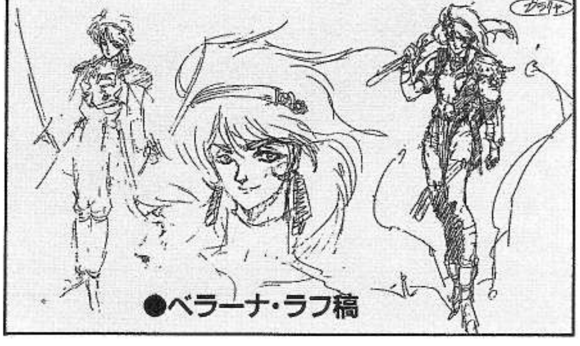
黒騎士の配下で、騎馬隊で、騎馬女丈夫。男顔負けの戦上手である。ラバーンに好意を寄せているが、ラバーンは彼女を兵士としか見ていない。ラバーンが興味を示したレムルに強い嫉妬心を覚える。



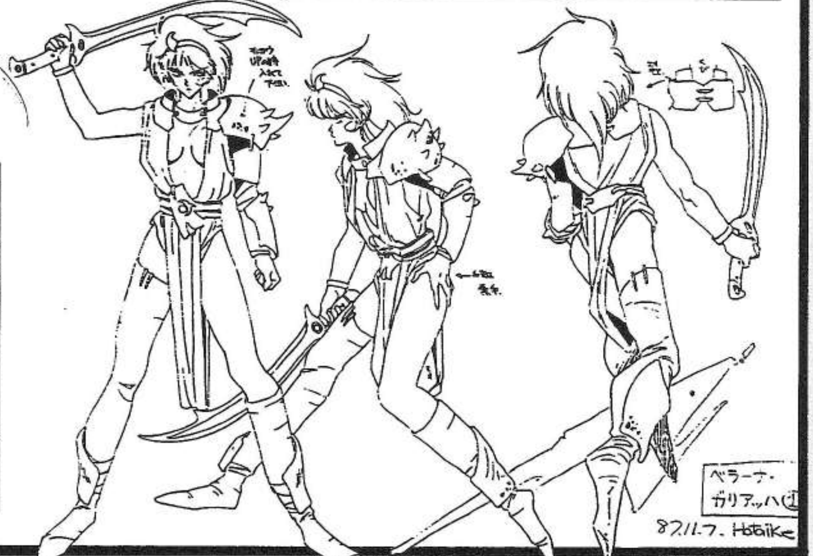
ベラーナ・ボリュームアップ



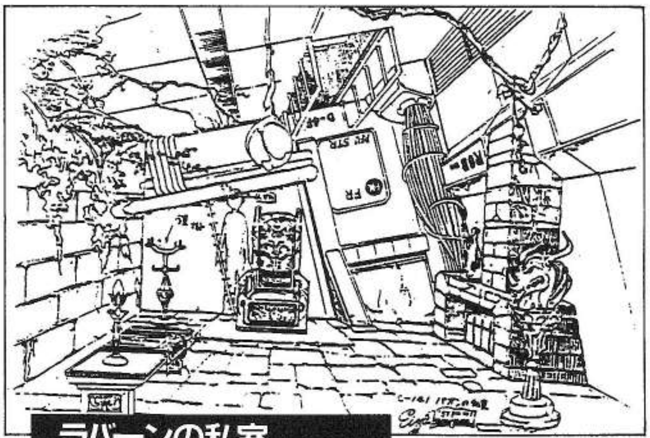




●ベラーナ・ラフ稿



設定資料集



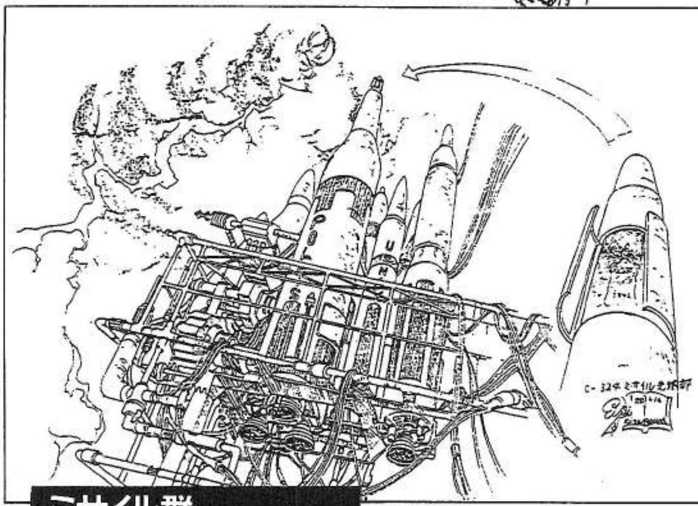
ラバーンの私室



シオンの入れられる牢屋



ショットの研究室



ミサイル群

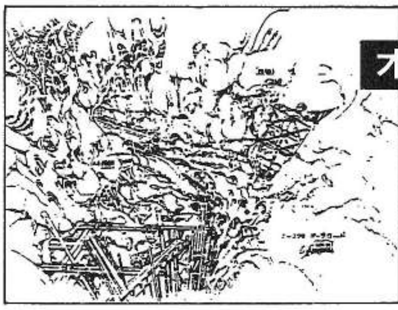


美術監督
平川栄治

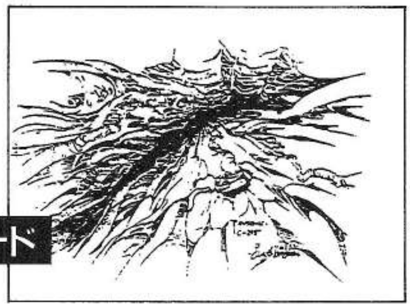
OVA「アモンサーガ」で美術助手を務め、今回初めて美術を手がけた。

美術監督という仕事は初めてだったので思考錯誤の繰り返しでしたね。これで良いだろうか、と不安になると絵におもいきりがなくなってしまうんです。その点でかなり滝沢監督に注意されました。

今回のオーラバトラーの処理で使ったハーモニーという手法は、背景の仕事なんですよ。通常では、動画で描かれたものをトレスマシンでセルに起こして裏から単色で塗っているんですが、逆にセル表から絵の具を塗り重ねて立体感を表現します。これが手間のかかる作業ですので、背景の人たちはかなり苦労されたんですよ。本当にご苦労様でしたと、背景のみなさんに感謝したいですね。



オーラロード



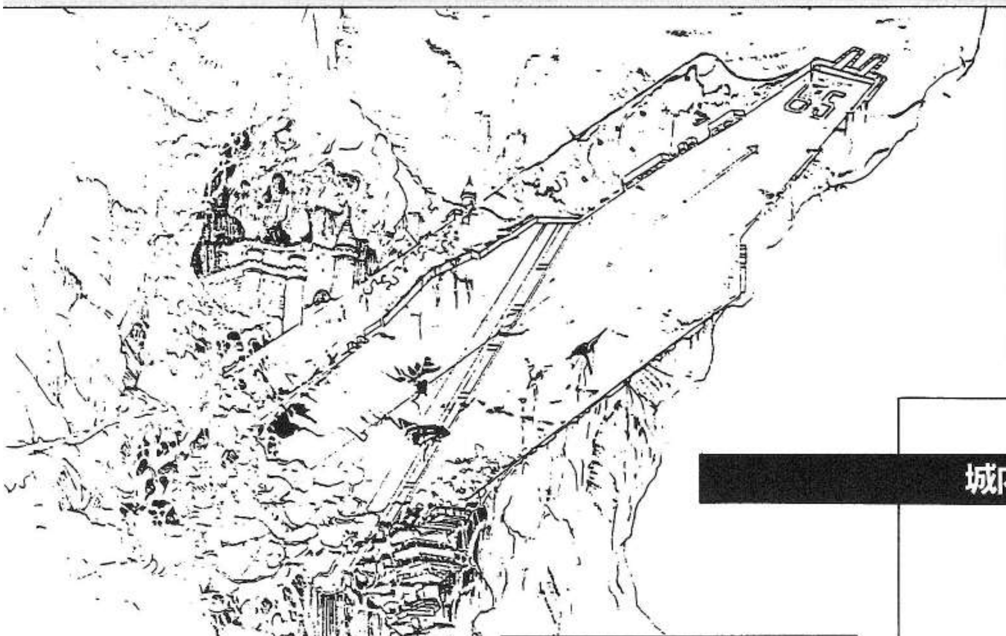
オーラロード



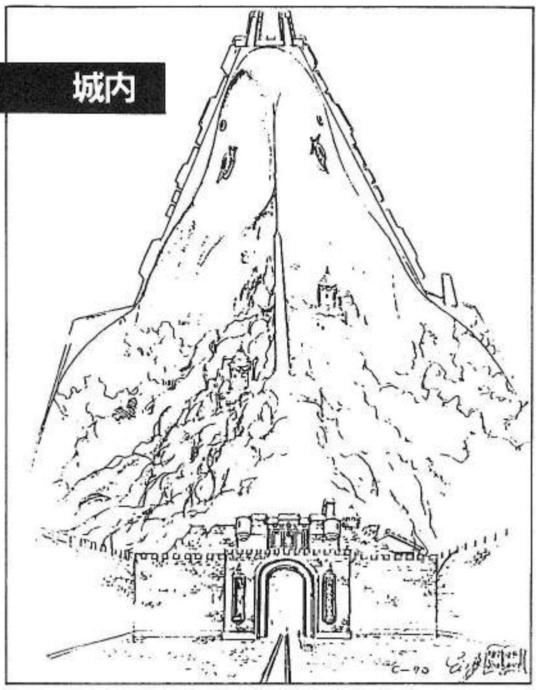
研究室内ABのサンプル

ラバーン城

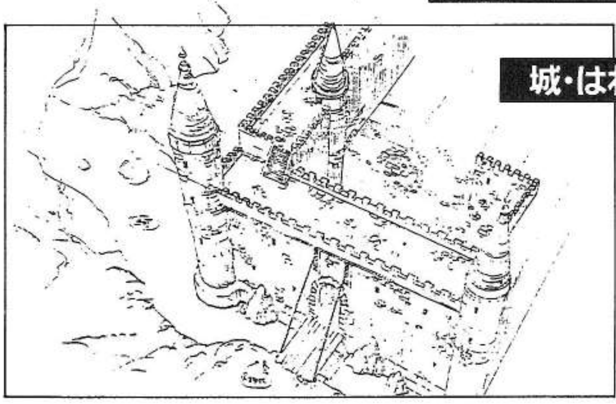
地上の船が突きささった山腹に築かれたラバーンの居城。
船の内部から、山の中へとはりはりめぐくされた城内には、不気味なショットの研究室や開放されたオーラロードがある。



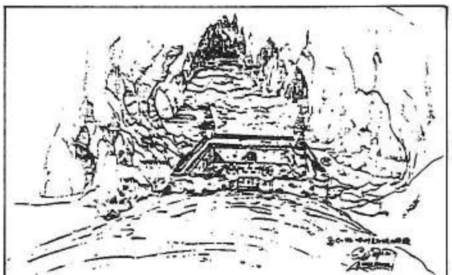
城・遠景



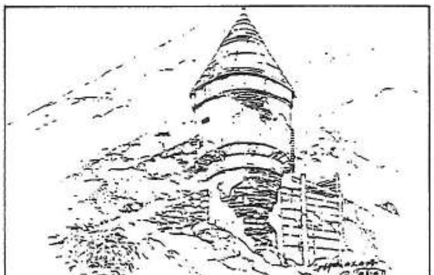
城内



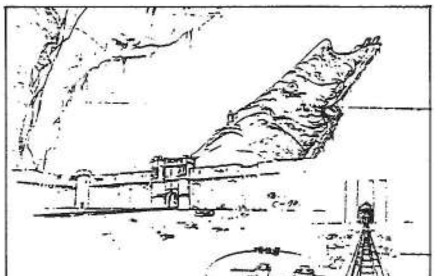
城・はね橋



塔より見た城内



城の上の塔



城内



城からの風景



城・遠景

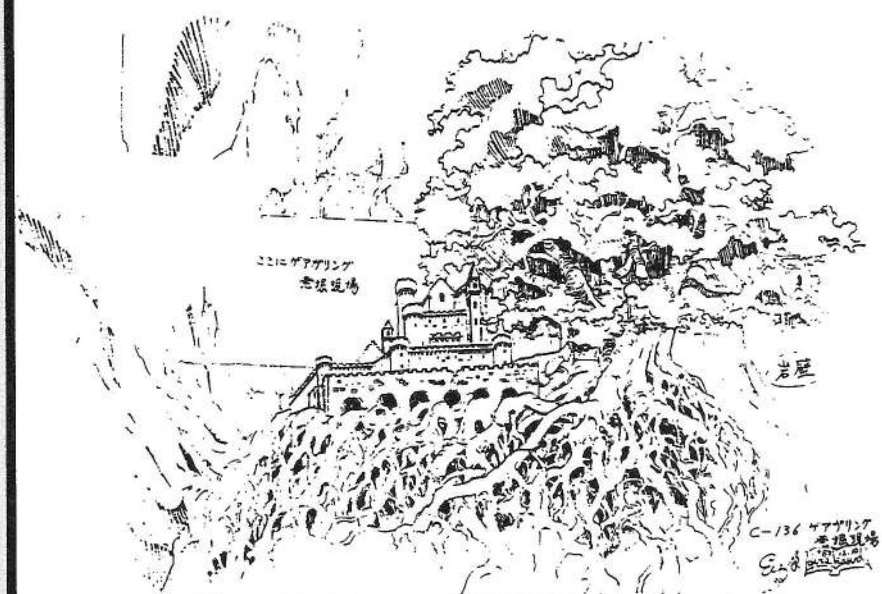
設定資料集

ロズン城

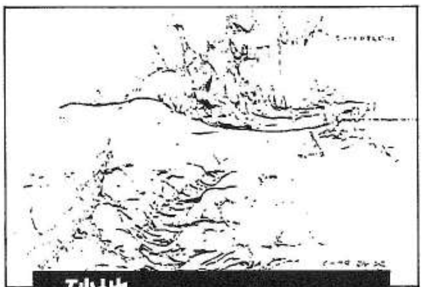
聖戦士の帰還を待つロズン家の人々が守りつづけてきた。城の裏には巨大な古の船（ゲア・ガリング）が埋っており、彼らは聖戦士のためにそれを堀りだそうとしていた。シオンを追ってきた黒騎士に襲われる。



城・遠景



城・全景



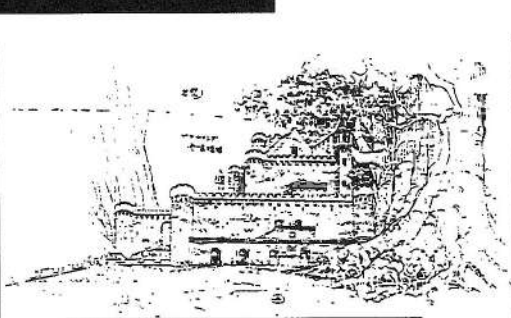
砂地



地下の空洞



城内・大広間



城・広場



空洞内の水たまり

ロズン城の人々

大いなる機械仕掛けの鎧に乗り、フェラリオを従えて来る聖戦士の帰還を、代々700年間も待ちつづけてきた人々。シオンを聖戦士を信じ、彼とともに黒騎士との戦いにおもむく。







ギー



女官たち



作画監督
谷口守泰

「蒼き流星SPTレイズナー」等での活躍で知られているベテランアニメーター。

幡池さんはイラストレーターですから、彼の作ったキャラクターというのは、どうしてもアニメーションにしずらい点がありましたね。特に女の子の表情がむずかしくてウチ（アニメアール）の女の子に原画をやらしてみたりして工夫しました。

あとは、やはり主人公が描きにくい部分がありましたね。僕は元来、主人公って描きにくいってあるんですけどね（笑）。脇役のほうでは楽しく描かせてもらいましたよ。特にベラーナなどは良かったですね。ただ幡池さんの描く荒々しさが出なくてやわになってしまったかな、という感じがあります。

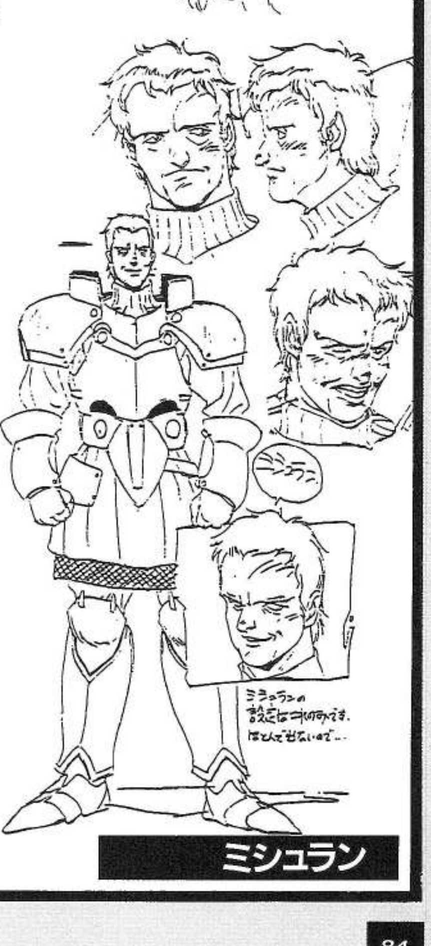
幡池さんの持ち味は若いアニメーターの方が出せるのでしょうね。



ボーゼ

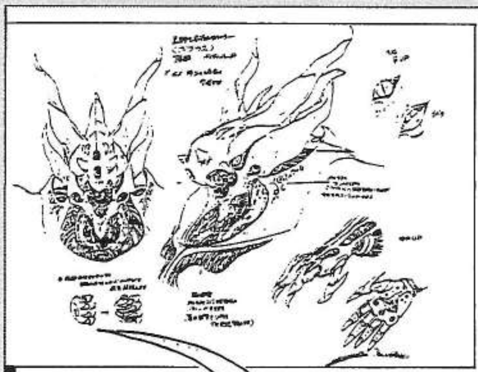


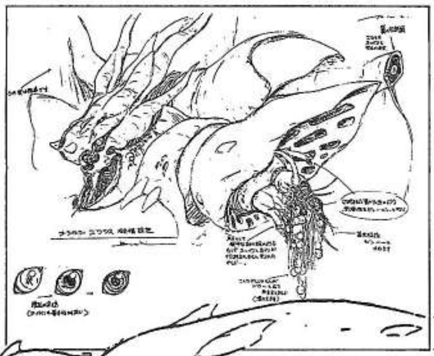
オリン



ミシュラン

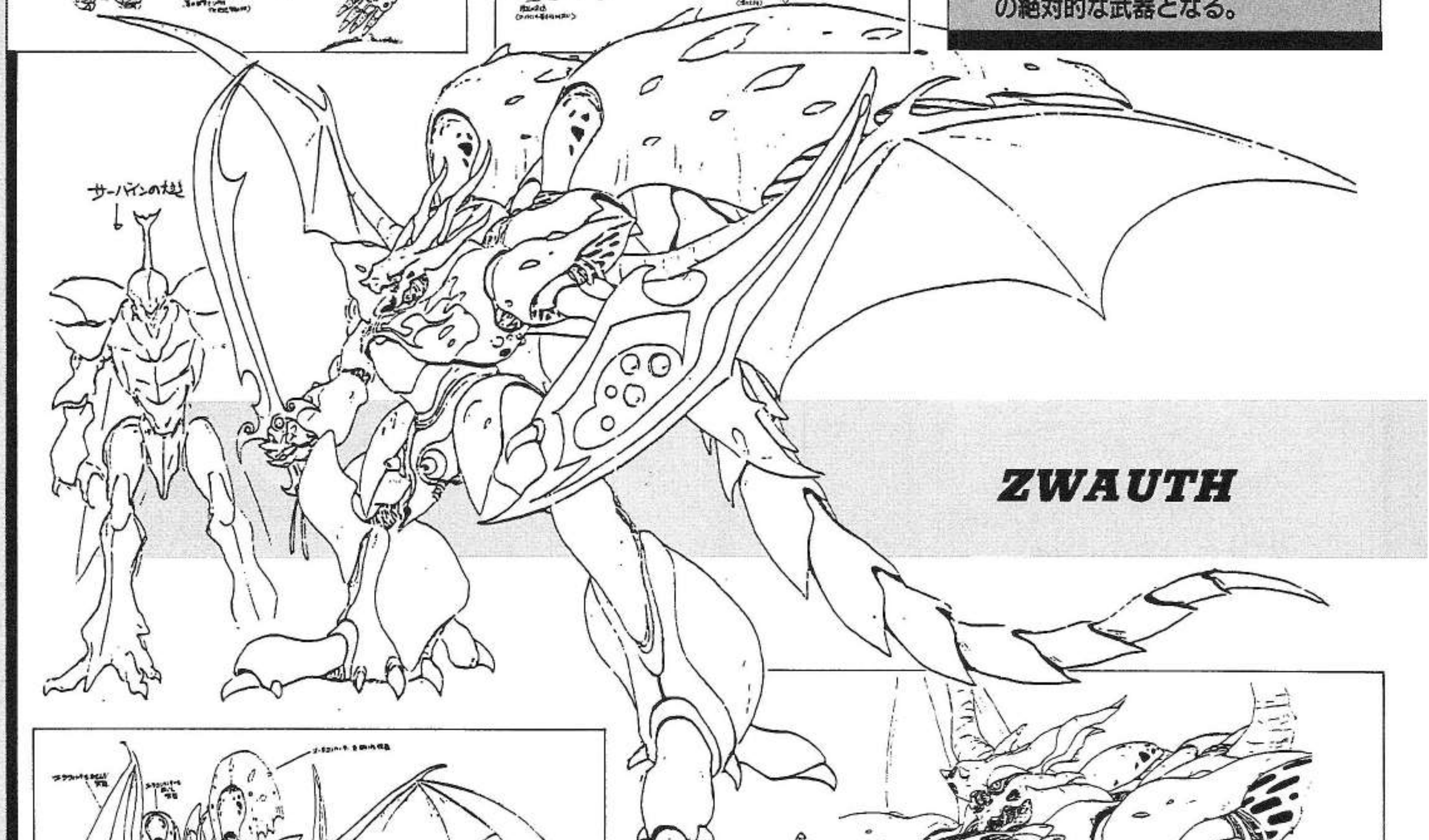
設定資料集



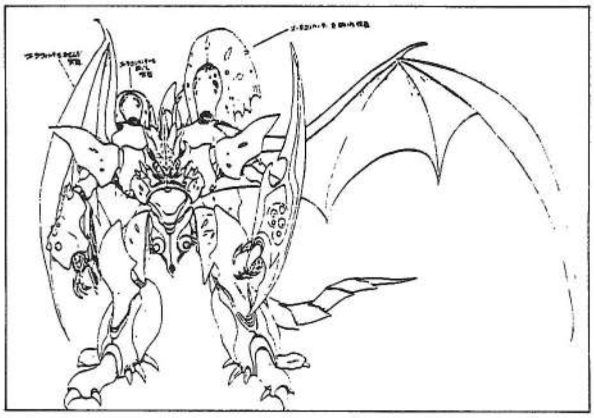


ズワウス

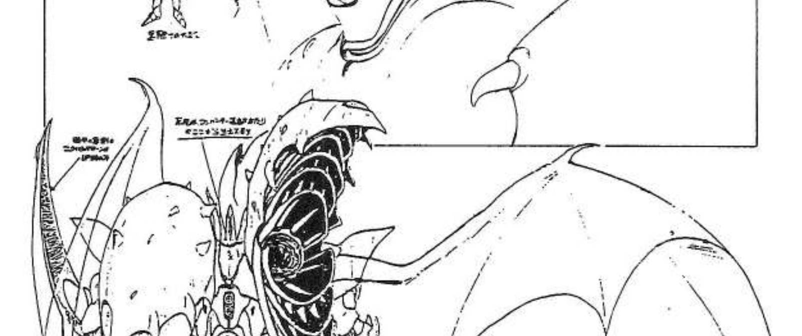
ショットが作りあげたオーラバトラー。巨大なコウモリのような羽と長大な尾により、そのシルエットは悪魔のようにもみえる。ラバーンのバイストン・ウェルを支配するための絶対的な武器となる。

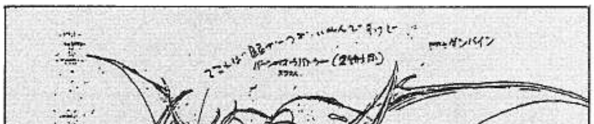


ZWAUTH





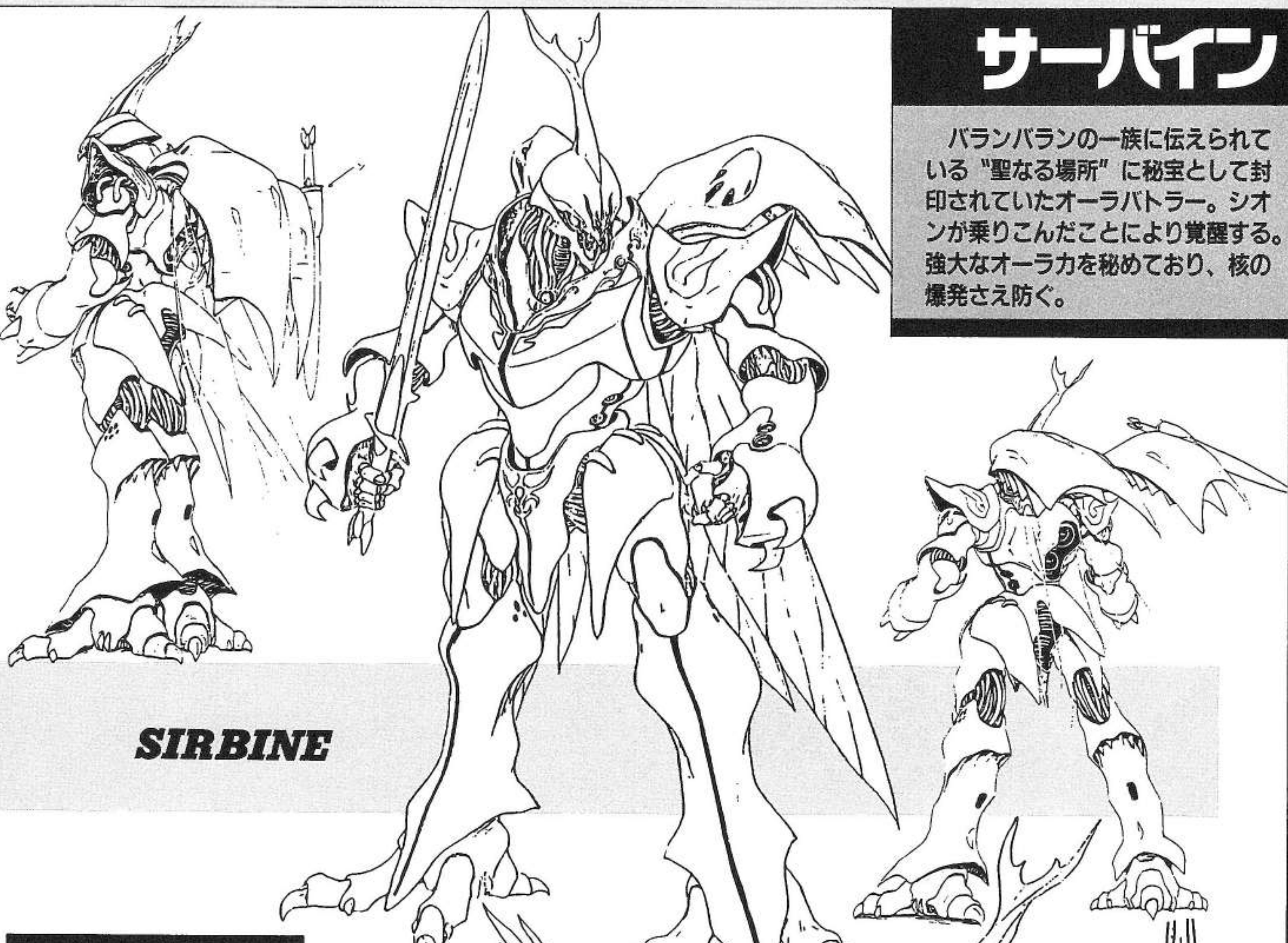




●ズワウス・ラフ稿

サーバイン

バランバランの一族に伝えられている"聖なる場所"に秘宝として封印されていたオーラバトラー。シオンが乗りこんだことにより覚醒する。強大なオーラ力を秘めており、核の爆発さえ防ぐ。



SIRBINE



メカ・デザイン
出渕　裕

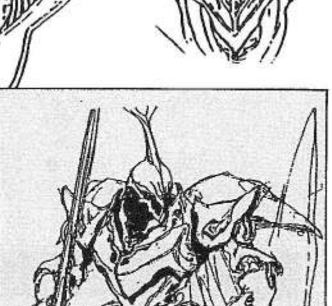


最近はメカデザイナー以外にもマンガやイラストにと八面六臂の活躍をしている。

今回のスタッフの中で、TVシリーズに参加していたのは僕一人ぐらいだったんです。だから「ダンバイン」における「バイストンウェル」という確立された世界観の気分みたいなものを押さえるポジションだったと思います。しかしキャラクターたちが転生した姿で登場しているのですが、今回の作品は前作とは別のものになってしまいました。

メカニカルデザインで今回はABのシルエットを残しながら生体というか、なにか不思議な雰囲気のものにしてみました。ハーモニー処理で着彩は滝沢監督の意図だったんですけど、僕はもっとABを動かして欲しかったんですけどね。

今回は反省点も多くて勉強になりました。



●サーバイン・ラフ稿

1

「メイネアさまぁ……でも……、こんなことをして……もしバイストン・ウェルと地上とがまた結びついちゃったりしたら、大変なことになるかもしれないよ？」

ミ・フェラリオのシルキー・マウは、小さなアクアマリンの瞳に不安げな光を宿して、ささやくように言った。

「シルキー、でも、聖戦士は必要なのです」

ナの国の王女・メィネアは答えた。白銀色の髪に縁取られた気品ある美しい顔立ちの少女……その青い瞳は哀しみに満ちていた。

「わたくしたちは取り返しのつかない過ちを犯してしまうのかもしれません。でも……大いなる災いを防ぐために、今はわたくしたちにはこれ以外の手は残されていないのです」

王女の手の平には、緑色のふわふわした髪をした、背に羽を持つミ・フェラリオ、シルキーがちょこんと座っている。

シルキーはなおも不安げにメィネア・ラパーナの顔を見上げていた。が、意を決すると、天を降り仰ぐ。

低い、何かが共鳴しているような音がする。

奇妙な夜——すべての音がその共鳴音の下で静まりかえり、生きる者すべてがその音に聞きいって、息を殺しているように思える夜だ。

ミ・フェラリオの躰が、光に包まれる。全身が金色に輝いていく。ビロード地に置かれた宝石のように、闇の中でその光は見事に輝く。

光が強まるにつれ、シルキーの小さな顔が大人びた……苦しげな表情になった。

(———こんな……こんな夜が前にあったような気がする)

シルキーは心の中でつぶやいていた。

(ずっと前……生まれる前に、同じようにとりかえしのつかないことをしてしまって……でも———でもっ！)

シルキーを包む光は強烈な閃光となり、凄まじい力となって、天へと昇っていく。

「メ……メィネアさま……」

王女につき従っていたナの近衛騎士団長、ラージア・ハンムはうろたえた声を上げた。

「オーラロードは開かれた。もう……後戻りは出来んよ」

その脇に立つ初老の小男、ナの宮廷工房に仕える職工頭のカトーは掠れた声でなだめるように言った。

妙に凪いだ、生暖かい風が男たちの頬をかすめた。

エリはパジャマに着替えて、ベットの中に入ろうとしていたところだった。誕生日にせがんで買ってもらったスイス製の鳩時計が丁度12時の時を告げようとしていた。

ボォーン、ボォーン……人形が飛び出してきて、柱時計がひとつ、ふたつと時を告げる。

(ったく……いやになっちゃうっ。せっかくの日なのに英語のテストがあるだなんて……)

机の上には英語のリーダーの教科書——明日は単語の小テストがある。もっともエリの心はそんなことより、テストの後の放課後の予定に八割方翔んでいたが。

ずっとあこがれていた中沢くん。親友のユッコがそんなエリの気持ちに気づいて後押ししてくれた。そして、ついにあこがれの中沢くんとの初めてのデートの段取りがついた。約束の日は明日。だから、明日は大事な日なのダ。

エリは深呼吸をした。

ひとり娘で、お嬢さま育ちのおっとりとした母親に育てられているエリは、万事につき人よりひっこみ思案。だから、中沢くんのこともずっと遠くから見守っているだけでいい、と思ってきたのに。それなのに、思いがけず、ユッコから告げられたのは、なんと彼もエリのことを気にかけていたらしい、との言葉。——もう、最高にハッピー！

(今夜……眠れるかな……)

枕を抱き締め、エリはベットに潜りこもうとした。そんな時のことだ。周囲が、グラリとゆがんだのだ。柱時計の最後の音がくぐもったおかしな音になった。

(……な……なんなのっ！……)

一瞬、これは夢なんだろうか、と自問する。夜中に地震が起こって、これは夢なのか現実なのかがわからなくなる、あの感覚に似ていた。

ゆがんだ空間の向こうに、人の顔らしきものが浮かんだ。哀しげな、海のような瞳……白銀色の輝く髪をした少女。そしせ、手を差し伸べている緑の髪の、背に羽のある小さな妖精がいる。

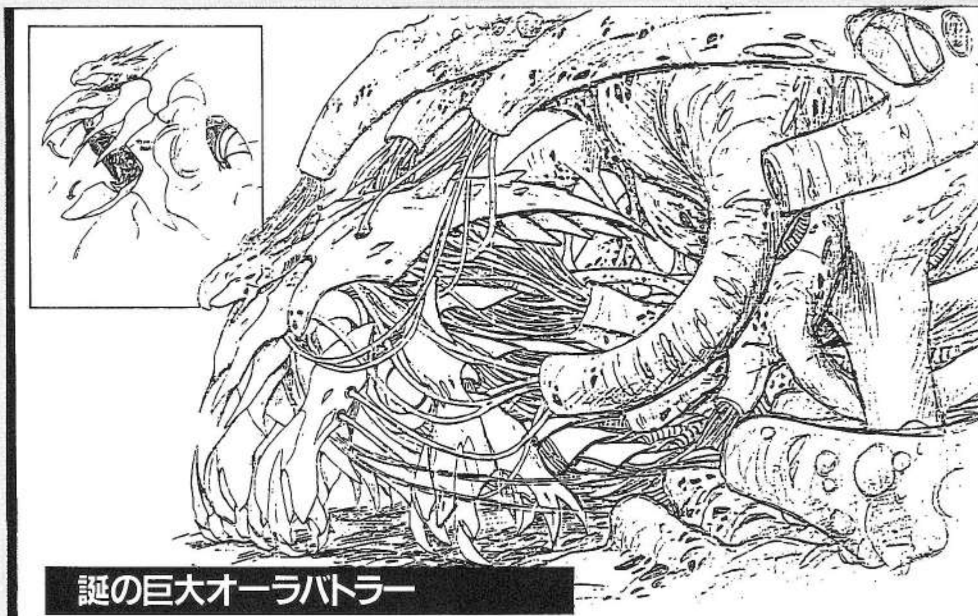
お気に入りのぬいぐるみが並んだ棚も、なにもかもが二重写しにゆがんで見える。

目暈がするように、体の平衡感覚が失われた。妖精の体を包んでいる光が目に焼きつく。それが自分に向かって突き進んでくるのが、奇妙にわかった。

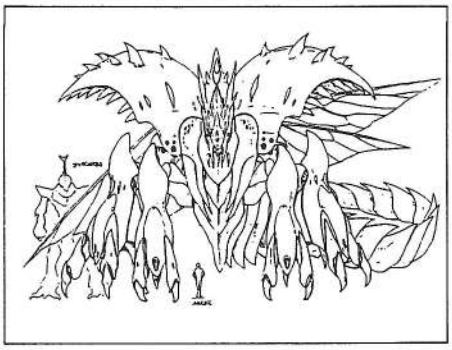


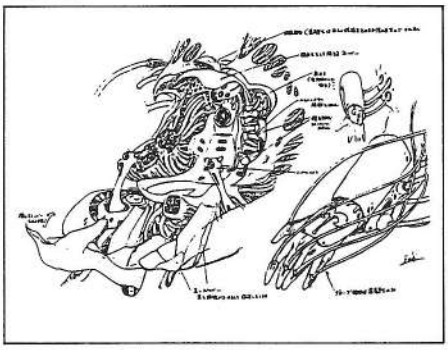
その他のメカ

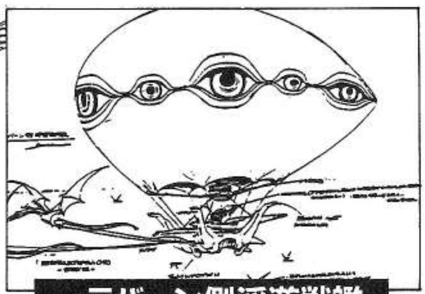
　作品の中で使用される機械類は、オーラバトラのの他にもいくつか存在する。
　黒騎士の使用する船（オーラシップを改造したもの）やベラーナの乗るジープなど。



誕の巨大オーラバトラー







ラバーン側浮遊戦艦



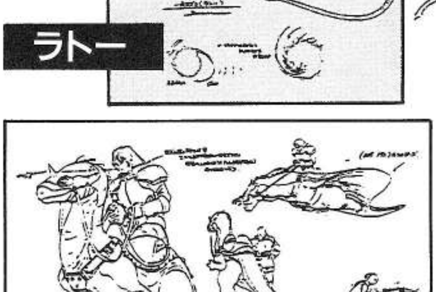
モンスター2

　バイストンウェルに生息している生物は、人間に操られるものの他にも存在する。
　砂模に住み地蟲や、水を好むミミズのようなモンスターなどは人間に害をおよばすものである。

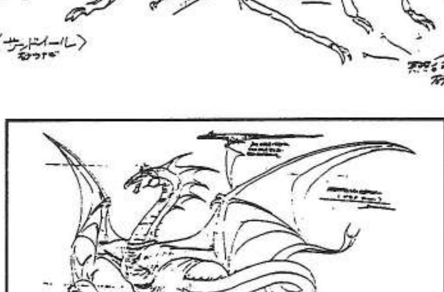




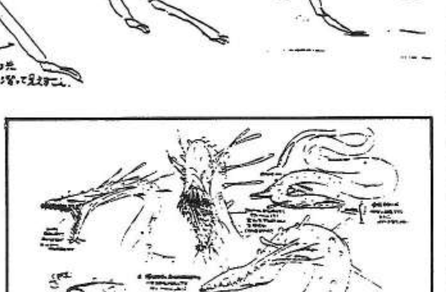
ラトー



グーン



ドラグ・ヴルム



水牢のモンスター

（こ……これって夢じゃないの？　お母さまっ――！）

エリはわけのわからない恐怖を感じて、すがるものを求め、夢中で階下にいるはずの母に助けを求めようと思った。

（キャアアア………ッ）

光がエリを捕えた。

体に浮くような感触が伝わり、次いで何か強い力がパジャマ姿の少女を捕らえ、引き込んだ。――落ちていく。エリは叫んだ。ずっと、叫び続けた。

その時――バイストン・ウェルと地上、海と陸を貫いて、強烈な光の柱が立った。

光り輝く魂のきらめきの道、オーラロードが開かれたのだ。その道を伝って、パジャマを着たひとりの少女が運ばれていった。

エリの目には、海の色が映った――難破船や、星のように見える光の群れが視界をよぎる。それは、急速に過ぎ去っていく。

視線を感じる。それは、最初に感じた、あの銀の髪の美少女や妖精のものであり、そしてもうひとつ……まるで観察するような暗い目の視線もあった。

（だ、……誰？）

誰かが、エリを見ている。

じっと、重苦しい眼差しで、落下していく彼女を見ている。その肩にはやはり小さな妖精のようなものを乗せている。

そして……森が見えた。

下方に世界が見える。

濃い緑が闇に沈んでいる。そこには人工の光はひとつも見えない。

森林――それにその向こうに一瞬見えた暗い平面は、あれは海だったのだろうか。

眼下に森がみるみる近づいてくる。……湖が繁みの間に見える。彼女の体は確実にその湖めがけて落ちていく。湖面が近ずいてくる。一瞬後……エリは水の中にいた。なおも体は落ち続ける。もがこうにも、まるで体は鉛のようで全然浮きあがることが出来ない。息がつまるが、不思議に呼吸は出来たし、口から水が入ってくる気配もなく、それどころか濡れる感覚もなかった。

海の底へと落ちていく。

あれは……？

………人のような。

が、すぐにそれは人ではないのがわかる。巨大な鎧……のような。それも、背中に金属の羽がある、昆虫と人の姿を模したような巨人装甲騎士が、透明な水の底にいる。あれは、何？　それは、呼んでいる――。

（お母さまぁぁっ………！）

エリは、ぶつかると思って、目をぎゅっとつぶった。が、エリの体はその騎士の中に、すうっと吸いこまれた。

ふ……と落下の感覚が無くなったのに気がつき、目を開けたエリは面食らった。なんだか、戦車か戦闘機の中にいるみたいだ。狭苦しい座席。彼女は、その椅子に座っていた。

周囲は薄暗い。そこがまだ水の中なのがわかるが、ただ、水はエリの居る場所には入ってこない。透明なカプセルの中にいるようだ。細かな水の泡が無数に周囲にまとわりつき、昇っていく。上の方に。

見上げると、薄明るい水面が見えた。エリは水の上に出たい、と思った。その瞬間に、エリの体は今度は上昇し始めていた。――巨大騎士は水面に向かって突き進んだ。そして、水の上へ………出る――。

＊　＊　＊

「――やったぁっ！　メイネアさまっ、聖戦士さまだよっ！」

耳を打つかん高い声に、エリは目をぱちくりさせた。

ようやく水面上に出たと思った途端に、突然目の前は壁となり、しかもその壁が後退してパックリと前が開けた。

外は暗く、野外の風が顔にあたったところからすると、どうやら夜であるらしい。とはいえ、手元を見てとれないほどの暗さではない。……などと思う間もなく、その声がしたのだ。

声がしてきた上の方に視線を少しだけうわむけると――背中に羽をいそがしくはばたかせた、手の平に乗りそうな小さな女の子……世に言う妖精らしきものがいた。

緑の髪と、可愛らしいおしゃまな顔立ち。碧い瞳。

エリはそれをしみじみと見た後、手を伸ばして、その緑色の髪の毛をツンと引っ張ってみた。人形じゃなくて、生きている本物なのが信じられなかったからだ。

「いやぁんっ！んもうっ、髪に触わンないで、聖戦士さま

NEO BYSTONEWELL FANTASIC STORY 2

夢の来訪者

構成／出渕　裕
ストーリー／ひかわ玲子
イラスト／幡池裕行



じっと視線を投げた。

（わぁ…………）

エリは心の中で歓声を上げて、思わずその光景に見惚れていた。

森の中――濃い闇と深い静寂に覆われているはずの森は、案に相違して賑やかだった。

煌めく鱗粉を散らして梢の合間を飛び巡る妖精……ミ・フェラリオたち。エリの腕に止まっていたシルキーが嬉しそうにぴょんと立ち上がると、翔び立った。

「わぁい……みんな！　仲間たちだぁ！」

エリは飛んでいくシルキーを追って、視線を頭上に向けた。夜空を横切るように、そこでもミ・フェラリオの踊る群れが見える。

シルキーと同じような小さな女の子のフェラリオがエリのすぐ目の前に翔んできて、まじまじとエリの顔を覗き込んだ。エリがびっくりした目で見返すと、また軽く翔んで、森の奥へと行ってしまう。

ラージアが感じの良い、磊落な笑い声をあげた。

「ここはいつもこんな風なんですか？」

笑い声に励まされて、思いきってエリは尋ねてみた。

「いいや、こんなにミ・フェラリオが群れて人の前に現れるのは、そうあることではありませんな、聖戦士殿」ラージアは真面目な口調で答えてくれた。「恐らく――オーラの輝きに惹かれてやってきたのでしょう。ミ・フェラリオどもはオーラ力を喜びます。一説には、あやつらはオーラ力によって生きている、とも言いますからな」

（……オーラ力？）

「おそらく、聖戦士殿のオーラ力に惹きつけられておるのでしょう。……ほら」

ラージアが言うとまもなく、今度はミ・フェラリオの少年がふたり、連れ立ってエリの前をかすめて翔んでいった。

エリはその姿の愛らしさとまばゆい光に魅せられ、ほーっと深い感嘆の息を吐いた。

「夜営地に着きましたよ、聖戦士殿」

そんなエリの様子を柔和な表情で見守っていたラージアは、やがて腕を上げて、前方を指差した。

見ると、道の先には森の木々が伐採され空き地になっている場所があり、そこに篝火に囲まれた大きな天幕を張った夜営地があった。兵たちがそこを守っている。兵の大部分はラージアと同じような甲冑を身に鎧った騎士たちだ。二、三十人はいるだろうか。そのあまりの物々しさにエリは息を飲んだ。さらに、エリの驚きは広場の中央に炊かれた焚火の脇に巨大な人型装甲機械をみつけたことで大きくなった。エリが出現したあの湖のものと型はいくらか違うが、やはり白いオーラバトラーが一体、炎の照り返しを受けて立っていた。

「あれは、ボチューン……ナの白き護りと呼ばれたオーラバトラーです」

エリの視線に答えて、ラージアは教えてくれた。

夜営地に着くと、メイネアはすでに馬から降りてエリを待ち受けていた。ラージアに助けられて馬から降り、エリはその前に立った。

焚火の側で椅子を勧められる。目の前に座ったメイネアの白い貌の表情は心持ち厳しいものになっていた。夜風に少し震えていたエリにはマントが与えられ、そして暖かいスープのような飲み物が勧められた。メイネア姫はまっすぐにエリを見て、言った。

「エリさま、わたくしたちの願いはひとつです。あなたはサーバインが選びし聖戦士です。どうかサーバインに乗って戦い、わたくしたちを救って下さい」

エリは飲みかけていたスープをあやうく吹いてしまうところだった。

「戦うって……あのっ！　そんな、あたし」

「無理をお願い申しあげていることは重々承知の上です。ですが、もう地上人の聖戦士にお願いする他、わたくしたちには術は残されていないのです。

父は、オーラシップを復活させると言っています。それ以外にナの民草を守る策が無い、と言って……。確かに、敵はあまりにも強大すぎます。でも、そうとなれば、戦いは激化するばかり……過去のあの混乱と悪夢がやがては再現されることになるでしょう。そうなれば、結局はあの悪しき者の思惑通りになってしまいます。

最悪の場合はかの戦役の折のように、再び地上にまでこの戦いの火が移る事態になるやもしれないのです。

聖戦士さま、どうか、敵を打ち果たす助力を……手を貸して下さい」

エリはメイネアの真剣な眼差しから逃れることも出来ず、もじもじと身をよじらせた。周囲のこの武装した一団の雰囲気からすると――これが嘘っ子や冗談の問題でないのは明らかなようだ。

再び、地上に戦火が移る……？

「敵っ……て？」

「黒騎士です」

メイネアは即、答えた。それから、口ごもり、言い直した。

「いえ……悪しき野望の魂です。かつて、わたしたちはその者を一度、打ち果たしました。……打ち果たしたと、信じたのです。でも、それは間違いでした。それは再び、より強力になってわたしたちに復讐をしに戻ってきて、わたくしのもっとも大切な物を奪っていきました。そして、今度こそ――その時の野望を果たそう、としています。

この世の――覇者になろうと」

エリは、以前に母から聞いた話を思い起こしていた。エリが生まれる前……世界に起こった奇怪な出来事のことを。パリ、という世界で一番美しかった都が炎上し、たくさんの人が死んだ事件。――今でも、その事件の謎の全貌は明らかにされていない、という。

……あの事件が、エリの身に起こったこのことと関係あるのだろうか？

そういえば……妖精は本当にいるって話もあったと、学校の先生が冗談まじりに授業中に言ったこともあった。

「あたし……なんだか、よくわからないのですけれど――でも」

エリはオズオズと言った。

「お母さまは、人のためになることなら、なんでもやれることはやりなさいって、いつもあたしに言っています。出来ることなら、お手伝いはしますけれど……でも、あたし、戦ってやったことがないし――何かのお役に立てるのでしょうか？」

「エリさま……お言葉、嬉しく思います」

メイネアはほっと表情を緩めた。

「――メイネアさまっ！」

いきなりその時、ふたりの間にミ・フェラリオのシルキーが翔び込んできた。慌てた様子でメイネアに跳びつく。

「あいつが来たよっ……黒騎士だ！」

シルキーの言葉を聞くと、ラージア始め近衛騎士団の者たちは気色ばり、メイネアとエリを守ろうとするかのように円陣を組んで立った。ラージアが長剣を抜く。

ミ・フェラリオたちの群れが何かから逃げ出すように繁みから飛び出し、周囲を舞い散った。そして、森の奥の方に蒼

っ！」
確かに、感触があった。リアクションまであった。女の子はその小さな手でエリの指を押しのけたのだ。
「髪形がくずれちゃうっ。ちゃんとするの、大変なんだから！」
抗議の声をあげて、急いで緑色をしたふわふわの髪の形を両手で整える。
「あ……ごめんなさい」、エリは頬を赤らめて、慌てて謝った。そして、ドギマギしながら、尋ねた。「あの、あなた……は？　妖精？」
すると、それはぷるんと首を振った。
「あたしぃ？　シルキー・マウ、ミ・フェラリオだよ」
そして、女の子はひょいと浮き上がって滞空すると、背後を振り返って嬉しそうな顔を何かに向ける。つられて、エリもその視線の先に目を向けた。
ちゃぷちゃぷと波が打ち寄せている微かな水音が聞こえた。夜なのにさほどの暗さを感じないのは、星明りのせいだろうか。
星の光を映してキラキラと煌めいている藍色の湖面を隔てて、向こう岸に松明を掲げた十数人の騎馬の者たちがいる。ものものしい銀色の甲冑を身につけた騎士たちと、彼らに守られた少女だ。
騎士たちと少女を乗せる馬にはどれも一角がある。
特に少女が乗っているのは真白い一角馬だった。
白銀の髪、銀色の服に真珠色のマントをはおい、腰には飾り帯をしめている美しい少女……少女は水際まで一角馬の歩みを進め、その眼差しを巨大騎士の上にいるエリに真っ直ぐに向けた。そして、鄭重な口調で呼ばわるように語りかけてきた。
「ようこそ、地上人のお方……わたくしはナの国の王女、メイネア・ラパーナです。サーバインに選ばれし聖戦士さま、どうかわたくしたちの願いをお聞き届け下さい」
エリはというと、ただひたすらに茫然としていた。

2

エリはシルキーの指示に従って巨大な機械仕掛けの奇妙な形の装甲騎士を動かして、岸まで行った。そこで騎士をひざまずかせ、腹部にぱっくりと開いたハッチのようなものから外へ出て、地表へと降り立った。
見上げると降るような星空があった。
エリが住んでいる東京郊外ではまず望めないような星空だった。
月は見えない。星ばかりだ。砂金をぶちまけたような多くの星々が森の上に広がっている。
（ここは……どこなのかしら……？）
エリはといえば、お気に入りのネコ柄のパジャマを着たままの姿だ。そんなに寒くはなかったが、それでもなんだか肌寒いような気分になる。エリはプルッと身を震わせた。
――夢？
出来れば、夢だと信じたかった。
こんな馬鹿げたこと、本当にあっていいハズがない。
エリの頭の上には、妖精が乗っている。本人は妖精ではなく、ミ・フェラリオだと主張し、エリにはその違いはよくわからないでいるが、ともかくそれは頭の上にいる。いや、別に重いとかそういった問題ではなく――それは重さなど感じないほどに軽かった――そういうものが頭の上にいる、という事実がっ（！！）、問題なのだ。
エリがその奇妙な人型の乗り物から降りると、すぐに少女に付き従っていた年配の小男がそれの操縦席を覗きこんだ。
「ほぉ……素晴らしい。とても湖の底に沈んでいるオーラバトラーとは思えないな。保存状態も最高のようだし……。メイネアさま、これならちょっと直せば、すぐ使えますぜ」
「整備を急ぎ、頼みます、カトー。すぐにも使わなければならない事態になるかもしれませんから」
姫君に命じられると、男は無言でうなずき、即座に操縦席へ潜り込んでいった。
松明（たいまつ）の灯りの下で、少女はエリに微笑みかけた。エリはなんとなく、どきりとした。まだエリと同じくらいの年齢に思えるのに大人びているし、それに人を包みこむような暖かい笑みを浮かべる。
「聖戦士さま。お名前を伺わせていただけますか？」
王女は落ち着いた口調で尋ねてきた。
「あ……はい。エリと申します」
エリは思わずかしこまって、答えた。目の前にいるのが一国の王女――お姫さまだと思うと、自然、言葉使いも丁寧になる。
メイネア姫はうなずき、言葉を続けた。
「エリさま、こちらへ。どうかわたくしたちといらして下さい。話を聞いていただけますか？　あなたのご助力をわたくしたちは求めております」
「あ……はい」
狐につつまれたまま、答える。
騎士が少女の白い一角馬を引いてきた。メイネア姫はその騎士の手を借りて、馬上の人となった。一角馬たちがいななきの声をあげる。戸惑うエリの前に、栗毛の一角馬の轡（くつわ）を持ったがっしりとした騎士がその手を差し出した。
エリが不安な目を彼に向けると、髭をはやしたその青年は、甲冑姿の恐い外見とはそぐわない優しい茶色の目でエリを見た。
「ナの近衛騎士団長のラージア・ハンムと申す者です。お見知りおかれい。聖戦士殿、我が馬にしばしご同乗願いたい」
「は……はい！」
騎士の申し出に、エリは思わず良い子のお返事をしてしまう。
「しからば、ごめん」
騎士はその重い甲冑ごと一角馬の上に体を持ち上げ、その腕を同時にエリの腰に回すと、ひょいと抱き上げた。エリはキャアと小さな悲鳴を上げたが、思う間もなく、鞍の前にすとんと下ろされた。
シルキーがパタパタと羽をはばたかせて翔んできた。腕の上に止まると、エリの顔を見上げてニコッと笑いかけた。
松明を持つ騎士が先導して、一行は夜の湖畔を歩み始めた。
騎士団長の馬に揺られながら、エリは心細げに周囲を見回した。
まるで銀盤のような湖……波頭に星の光を宿して、湖面は銀色の水を湛えているかのようだ。魚の鱗のように一面にさざ波が立っている。
湖の中央には島が見える。そこに廃墟のような黒い不気味な城跡を見てとることが出来た。そこは、今しも陰鬱（いんうつ）な古代劇を始めるための舞台であるかのようだ。
（お母さま、お父さま……助けて。ここはどこですの？　わたしは一体――？）
馬のたてがみの中央に見えるのは螺施（らせん）状の角、腕には妖精――ミ・フェラリオの女の子、そして体を支えてくれているのは、銀の籠手（こて）をつけた騎士のがっしりとした腕。何もかもが昔語りの中世の世界に迷いこんでしまったかのようだ。
（どうして、こんことになってしまったのか、あの方はわけを教えて下さるのかしら？……）
エリは前を行く白い一角馬に乗る少女のプラチナ色の髪に、

「だめぇぇぇっ！」

空中で、シルキーと裸身のフェラリオが交差する。一瞬、手が触れるほどに近く、裸身のフェラリオのチロチロと燃えるような激しい輝きを持つルビーのような熱い双眸がエリの目を覗いた。

「ダーク・フェラリオのマーブ・リン……ヤな奴っ！」

エリの肩の上にしがみつきながら、シルキーは口走った。

裸身のフェラリオが戻ってくると腕に止まらせ、黒騎士は兜に覆われた顔をメィネアに向けた。

「姫君、そなたに勝つ見込みなど無いぞ。そなたにはわたしを打ち果たせまい？　大人しく我が軍門に下るが良い。ナが廃墟と化す前に、な」

「誰が！　お前こそ……シオンをお返しなさい！　そして、闇へ戻るがいい。お前の戻るべき本来の姿へと」

「ふふ……威勢が良いことだな、ナの白き女王よ。それがいつまで続くか――とくと見せていただこう。のぅ、マーブ？」

蒼白い闇が――黒い騎士を取り巻く場所は明るいにもかかわらず、エリにはむしろ昏く感じられた――収縮していく。

森の中を、風が渡った。

森の繁みという繁みが一斉に騒いだ。

まるで――夜の王を見送ろうとするかのように。

それが終わると、再び森の夜が戻った。ミ・フェラリオたちが翔び、メィネアたちナ国の一行の周囲をオーラの光が乱舞した。

「シルキー、……シオンって、どなた？」

エリは、肩の上のシルキー・マウにそっと尋ねた。

「あたしのねっっ、友達。……でぇぇぇ、メィネアさまのフィアンセだったんだよね」

「だった……って？」

エリの問いに、シルキーは言葉をつまらせた。ミ・フェラリオはとっても哀しそうな顔をした。

3

そこは、ギンの岬、というのだそうだ。

エリの前には、広い海があった。

潮風が短い髪をそよがす。エリは与えられたオーラバトラーの操縦者用の動きやすい戦闘服を着ていた。

「この海の向こうには、ミの国とラウの国があります。この方向には、アの国とクの国が。アの国は先の戦役の発端となった国です」

岩の上に立って、ラージア・ハンムは説明してくれた。

エリはこの実直で礼儀正しく、頼もしいナの近衛騎士団長に全幅の信頼を寄せるようになっていた。髭のせいで老けて見えるが、実際はまだ若いようだ。といったところで、たぶん十歳は年が違うだろうが。

「ミの国は、わたしの故国です。わたしはア国に滅ぼされたミのハンム王家の、分家筋に当たる者です。ハンム家のお世継ぎで、ラウのフォイゾン王のお血筋でもあらせられた姫君・エレさまを守って城を脱けたひとりが、わたしの父でした。当時、父はまだ成人の式を迎える前の幼少の身の上であった、と伝い聞いております」

「大変な戦いがあったのですね」

エリが口をはさむと、ラージアは重くうなずいた。

「はい。オーラバトラーでこの地は荒廃しました。ここ、ギンの岬はその古戦場でもあります。ここに集結したナ国と反ドレイクの軍は最後の決戦を挑んだのです。多くのオーラバトラーとオーラシップがここで激突し――そのまま地上へと送り込まれました。そして、還りませんでした。

ゴラオンに搭乗されたエレさま、グラン・ガランに搭乗されたシーラ・ラパーナさま……誰も。

あの悲劇が二度、この地を見舞おうとしているのです」

エリはギンの岬を有名にしているという海岸線の奇岩の陰に隠してあるオーラバトラー・サーバインをそっと伺い見た。ナの工房で職工頭を勤めるカトーが整備してくれたサーバインを、エリはここまで操縦してきた。なんとか、動かすのだけなら、動かせるようになってきたのだが……。

メィネア姫の一行から二手に別れ、旅を始めてから既に四日……。

「メィネアさまたちは、無事にここまで来れたのかしら……」

エリはつぶやいた。ここ、ギンの岬で落ち合う約束になっている。

「メィネアさまには、ボチューンがあります。まず、大事はないと思われます」

ラージアは答えた。

ボチューンは、ナの宮廷工房でカトーによって組み立てられたのだという。黒騎士に対抗するために。

既に、禁忌は破られてしまっているのだ。

これ以上、エスカレートさせるわけにはいかない、と彼らは言う。

エリは、自分が役に立つのだったら、それを拒むつもりは無かった。ナ国の王女、メィネア・ラパーナにせよ、ラージア・ハンムにせよ、その心差しが正しい人であることには確信を持てる。どうやら、この事件の収拾がつかないと、元の世界――彼らが言うところの地上に帰る目処も立ちそうにないようだ。

ただ……サーバインに乗ることで自分が役に立つかどうか、いささかエリには自信が無かった。どう見ても、ラージアでも登場した方がまだ役に立ちそうな気がする……。

再三、それはラージアにも言ったのだが、ラージアは聞き入れてくれなかった。

「わたしたちコモンのオーラ力より、地上人であるエリさまの方がずっとこのサーバインを操る力は優れているはずです。ましてや、エリさま、あなたはサーバインに選ばれた聖戦士なのですから。

無理をなさらず、少しずつオーラバトラーに慣れるようにしていって下さい」

とはいえ。実際に戦うとなれば、ただ乗っていればいい、というわけにはいかないだろう。

（何故、あたしなんかが選ばれたのかしら？）

エリは複雑な思いにかられる。本当は今ごろ、初めてのデートで心ときめかしていたはずなのに……。

潮風が心地好い。岩場の絶崖の遙か下で波が砕け、渦を巻いている。その音が耳をくすぐる。水平線が空を分け、澄み渡った空は雲ひとつ写さず、ラベンダー色に晴れていた。

「ハンム殿……いらして下さい！」

背後から近衛騎士のひとりの呼び声がかかった。振り向くと、大きく手を振っている。

「何ごとか！」

ラージアは後ろを向いて怒鳴り返し、岩場を大股でまたいで仲間のもとに戻っていこうとする。エリもその後を追おうとしてツルツルと滑る岩の上に足場を捜したその時――ずしんと大きく地面が揺れ、同時に空気を震わすような高い音があたりに響き渡った。

「キャア！」

エリは足を滑らせ、槍のような奇岩の合間にずり落ちた。

「エリさま！」

間一髪、ラージアがその手首を摑んで、エリの体を支え上



白い陽炎のような明るみが立ち、そこに人の姿が浮かぶのが遠目に見えた。

ラージアたちが色めきたつのを、メイネアが凛とした少女の声で制した。

「鎮まりなさいっ！　あれは実体ではありません！」

……その通りのようだ。それは木々の繁みを縫うでもなし、こちらの方に近ずいてくる。

全身を黒い不気味な甲冑で鎧い、顔さえも兜の下に隠している。黒いマントをしているが、その裾は少しもなびかない。

肩の上には小さなフェラリオが止まっていた。黒い長い髪——微光を帯びた緑色の肌をした、裸身のフェラリオ……その肌には赤い紋様のような入れ墨がある。背には透き通った美しい羽を持っていた。

黒い騎士を取り巻いて異様なオーラが立ち昇っていた。フェラリオたちはそのオーラに巻きこまれまいと逃げ惑っている。

「メイネア殿、お久しゅう？　ご機嫌はいかがですかな？」

「良くはありません。そなたを見てしまいましたから」

メイネアはきつい口調で、きっぱりと答えた。

「それは、つれなきお言葉ですね。あなたとわたしの仲だというのに」

「しらじらしいことを！」

……エリは、その王女の言葉に深い哀しみを感じとった。嘆き……ともすれば底知れない絶望にすら捕えられてしまうような。

「……何の用です？」

「用はわかっておられるだろう？　その聖戦士殿を渡してもらおうか」

エリは、ぴくり、と体を震わせた。この男……！　エリはオーラロードを通ってきた時に気がついたねばりつくような視線を再び感じていた。

メイネアが、すっとエリの前に立って、その背に彼女を庇った。

「あなたには渡しません、決して！」

「ふん……今のところは良いだろう。いずれはいただく。なあ、マーブ？」

黒騎士に話しかけられた肩の上の裸身のミ・フェラリオは嫣然とした笑みを浮かべると羽をはばたかせるとひょいと滞空した。そして気がついた時にはメイネアたちの方に翔んできていた。

「放っていくのですか？　それなら、何故、何のために戦うのです？　ああした人々を救うためではないのですか？　もし、ここであの方たちを救うことすら出来ないのなら、わたしに出来ることなど、所詮は知れています！」
　エリの言葉に、ラージアは目を見張らせた。それから、髭面を微かにゆがめて、にやりと笑った。
「聖戦士さまのおっしゃる通りです。
　今、やつらが堀り起こしているオーラバトラーは相当完全体に近いもののようですし……作業を妨げるのは、我らの大義にも添いましょう。我らは地上より援護し、かの民たちを誘導します。
　ですが、エリさま――お気をつけ下さい。ここは黒騎士の勢力圏内です。もしオーラバトラーが出撃してきたら、無茶はなさらず、逃げて下さい。あなたはまだ戦闘に慣れておられない。メイネア姫のボチューンと合流するまでは、本格的戦闘は避けて下さい」
「わかりました」
　ラージアはエリの細い肩を太い手で掴んだ。そして、頼もしそうにその肩をぎゅっと握った。エリは大きくうなずいた。
　エリは隠してあるサーバインの方へと岩をよじ登っていき、その背後でラージアの号令が聞こえた。
「聞いての通りだ。我らは聖戦士殿の援護に回る！　騎乗せよ！」
　――エリがサーバインの傍らに行くと、白い機体の腹部は彼女を迎えるように開いた。操縦席に座る。中が密閉されるとほぼ同時に周囲の視界が開けた。
　オーラバトラーとは操う者の身の内にあるオーラ力を増幅するのだと教えられたが、確かに体の奥深い所から力がみなぎっていくのが感じられる。
　エリは座席の脇に置いたヘルメットを頭につけた。
　浮遊感――エレベーターに乗っているように視界が下へ流れていき、エリは空に飛び立ったサーバインから下界の光景を見下ろしていた。
　エリは剣を抜き、まずズバイグに襲いかかって、発掘途中のオーラバトラーの残骸とを結んでいるワイヤーを立ち切った。ズバイグは怒り狂っていた。その巨体からは意外なほど敏速な動きでズバイグはサーバインを追い、角が出た尾でまともに襲いかかってきた。サーバインは崖に叩きつけられた。
　が、すぐに体勢を立て直す。サーバインはズバイグの下に潜り込み、力ずくでその巨体をひっくり返した。すさまじい



地響きと砂埃りが立った。
　怪鳥に乗った者たちが攻撃してきた！　これは腕の一撃で落とす。兵が鳥から投げ出されて落ちていくのを見て、エリは心臓が凍るような思いがした……殺してしまったのだろうか？――しょうがないじゃないか、これは戦いなのだから！　もし死んだとしても、そいつらはあの労役に使われていた人々を虫けらのように惨殺した連中なのだから！――とはいえ、投げ出された兵士たちが地面の上で動いたのを見て、エリはやはりホッとした。
　エリは発掘現場を見下ろした。
　――薄汚れた格好の男たちがびっくりした目をサーバインに向けている。その中には、まだ子供といっても良いような少年も混じっている。
　ラージアたち近衛騎士たちの一団がその背後に現れた。人々を誘導する。
　ラージアが腕をあげてエリに注意を喚起した。何かを、叫んでいる。空を指差して。
（………え………？）
　エリはラージアが指差す方を見た。崖の遙か向こうから来る、あれは……オーラバトラー？　白いナの護り、と呼ばれるボチューンではない！　すると――！
　エリはうろたえた。
「エリさまっ！　逃げるんですっ……お逃げなさい！　ここはわたしどもにおまかせを！」
　ラージアが馬を操って下まで来て、叫んだ。
　エリはちらりと労役に使われていた民たちを逃がしている近衛騎士たちの働きに視線を走らせた。当初の目的は果たされたようだ。
「ラージア殿、頼みます！」
　エリは口の中でつぶやくと、逃げるが勝ちとばかりサーバインでその場から逃げることに決めた。が……！
　発掘現場の異変をめざして来るとばかり思われたそのオーラバトラーは、まるで始めからそれが目的だったといわんばかりに、岩影に身を隠すようにして逃げようとしたサーバインの方を真直ぐに追ってくるではないか。しかも、その速度は恐ろしく速い！
　必死に逃げるサーバインが捕捉されたのは、まもなくだった。
　追いつめられたエリは仕方なく岩影から出て、空中でそのオーラバトラーと対峙した。なんという不気味なオーラバト

げた。
「大丈夫で？　お怪我は？」
「平気です。それより……今のは何なのですか？」
エリはびっくりした顔で尋ねた。
「ハンム殿、あれです！」
近衛騎士の青年は興奮した声で言って、それを指差した。
砂浜の上で、奇妙な形の小山のような甲羅を持つ巨大な亀──が暴れている。狂暴な恐竜のような顔。高さだけでも人の五・六倍はあるだろう。それが前進しようともがき、地響きを立て、わめく、さきほどの奇怪な音はその啼き声だ。それというのも、大亀にはワイヤーが付けられていて、岩と砂に半ば埋もれた何かを引っ張っているからだ。だが、むしろその大亀の方が引き戻されている。
ワイヤーの先の、海岸の岩と砂から突き出しているものの発掘現場の方は悲惨な有様になっていた。そこにはどうやらそのために狩り出されているらしい大勢の者たちが群がっているのだが、大亀が無理にワイヤーを引くので、その度にわらわらと人が落ちたり、ワイヤーの下敷きになったりしているのだ。悲鳴が巻き起こっている。
その上を頭に赤い鶏冠（とさか）のようなものがある全身は灰色をした巨鳥が何羽も飛び回っている。その背には、人が乗っている。武装した兵士だ。彼らは作業員たちが怪我をしたり下敷きになったりして犠牲になっているのに一向構わない様子で、なおさらに彼らを狩り立て、作業を急がせようとしているのがわかる。
「強獣・ズバイグだな。──黒騎士め、あんなものをどこから運んできおったか。もともと森に棲む比較的大人しい生き物だというに──哀れな」
ラージアは早口でつぶやいた。
砂から頭を出しているのが、オーラバトラーの足であるらしいのに、ようや　エリは気がついた。
「あの人たちは何を　ているのですか？」
エリは尋ねた。
「壊れたオーラバトラー　残骸を掘り出しているのです、エリさま」、ラージアは答えた、「ここは、ドレイクとクのビショップの連合軍と集結した反ドレイクの兵とナの連合軍とがぶつかった激戦地の古戦場ですから。そのときに落ちたオーラバトラーの残骸が多く残されているのです。



主なものは戦いが終わったあとにナの王宮へと運ばれましたが、とてもすべてを回収しきれませんでした。それほど激しい戦いだったのです。黒騎士はそれに目をつけました。戦役の後は放棄されて廃墟となっていた、もとはナのものだったギンの岬の要塞を占拠して、悪しき力で発掘したオーラバトラーを修復し、ナに戦いを挑んできました。
メィネア姫の父王陛下が禁を犯してボチューンを復活させたのは、その攻撃から国民を守るためです……」
再び地響きが立った。震動で、ワイヤーに取りついていた男たちからまた二・三人が落ちていった。叫び声があがる。……たまりかねたのか、労役に使われていた者たちの間で騒ぎが起こった。
すると、旋回していた怪鳥が男たちの頭上を襲った。その蹴詰で、男たちの体を容赦なく薙ぎ倒した。血煙が上がる。威嚇するように、怪鳥の上の兵士は何かを怒鳴った。
エリは、身をすくめた。これは、映画ではない……実際に目の前で起こっていることなのだ！
死体が片付けられる。そして、岩の向こうからまた新たな労役夫たちが引き立てられてくる。ようやく、ズバイグは静まらせた。このままでは引き抜くことは出来ないと諦めたらしく、男たちに岩を砕かせ、砂を握らせる。
……ひどい！
「あの人たちは……？」
エリは震える声で訊いた。
「この近郊から連れてこられた者たちでしょう。ナの善良な農民たちです。黒騎士は……人を人とも思っていません。そしてあやつめは混乱が続いているアやクの不穏勢力とも連絡を取りあっていて、戦乱を引き起こそうとしているのです」
ラージアの言葉に、エリはやっとこの戦いというのが何なのかを悟った。
ただ、正義とか、そういう問題ではないのだ。戦わなければこの人たちは……殺されるのだ。
エリは、すくと立ちあがった。
「エリさま……？」
ラージアが怪訝な目で見上げる。
「わたしは、サーバインに乗ります」、エリは言った。「この人たちを助けましょう！　こんなこと──ひどすぎます！」
「エリさま……それは……！」
ラージアは慌てる。

小さな背に羽をはばたかせた影がその壁に翔んできた。それはほぼ垂直の石壁に取りついている少女の姿に気づくと真直ぐに近ずいてきた。

「エリさまぁ、良かった、みつかったぁ！　何してるのぉ？――って、聞くまでもないね。ラージアたちとみんなで助けに来たんだよっ、待ってれば良かったのに！」

「シルキー……！」

エリはその愛らしい声を耳にして泣きたいほどにホッとした。孤独な登攀は永遠に続きそうに思えていたのだ。

「メィネアさまは無事に着かれたのですね？　ラージア殿は？」

「エリさまのこと、すっごく心配してるよ。大丈夫？　降りれるかなぁ？シオンだったらこれっくらい、すぐに登ったり降りたりしちゃうけど……エリさまじゃ大変だよね、腕だってこんなに細いしぃ」

「なんとか……降ります。自分でやれるだけのことはやるように、といつも母が――。皆さんに甘えてしまっては……。あの、あたし、どのくらい降りました？」

「う……んと、半分くらい。――かなぁ？」

「まだ？」

エリはがっかりした声を出した。

「ん――でも、もうちょっと降りれば、壁が傾斜してくるから、ずっと楽に降りられると思うよ。頑張って、エリさまっ。メィネアさまもラージアも下にいるよ！」

シルキーが持たらした情報に励まされて、エリはなんとか気を取り直した。この状況では助けてもらうことが出来ないのは明らかだ。こーなったら、自力でともかくも下まで降りるしかない。

幸いなことに静かすぎるような夜で、歩哨の姿も見えないので、今のところ逃げだしたのはみつかってはいないようだ。ようやく、下を確められる高さまで降りた。シルキーが言った通り、下に降りるに従って石壁はゆるやかな傾斜を帯び、降りやすくなった。真っさかさまに落下する恐怖はなくなった。

下に着くと――そこは美しい庭園だった。植え垣に咲く色とりどりの花が夜目にも鮮やかに見える。

「こっちだよ、エリさま。急いでネ！」

シルキーが誘導する

淡く夜の闇に白く浮かぶくちなしに似た薄桃色の花をあちこちで見かけた。それは、エリを不思議に惹きつけた。

立ち止まった折りに、エリはシルキーに尋ねた。

「シルキー、あの白い花は、何て言うの？」

「あれ？　あれはね、ポロポーズの花だよ。恋人同士が真実の愛を誓う花なんだ。贈る人がいないんだったら、手折っちゃいけないんだよっ！」

なんだか、ロマンチック――エリは思った。そんなことを思ってよそ見をしていたせいで、生け垣のすぐ向こうに人影があるのにエリはいち早く気ずいた。

「シルキー！」

息を殺した声で繁みの後ろに隠れ込みながら、ミ・フェラリオを呼ぶ。サルキーも慌てて、エリの肩の後ろに隠れる。エリが隠れたのは、ポロポーズの花の繁みだった。甘い、強い香りが漂って鼻をくすぐった。

繁みの合間覗いたエリは、ギョッとした。――黒騎士！黒い甲冑に黒のマント――確かに、あの男だ。

黒騎士は、ポロポーズの花を一輪、手折った。

……変だ、とエリは思った。なんだか……あの邪悪で異様な気配が全然感じられないのだ。

黒騎士の前にいる人影を見たエリは、更に驚いた！――メィネア姫！

黒騎士は、ポロポーズの花をメィネア姫に差し出した。メィネア姫は白い手にその花を受け取った。メィネア姫と黒騎士はじっとみつめあった。みつめあうことで、互いをひとつとしようとするかのように。

「――シオンだぁぁ！」

シルキーが嬉しそうな声で叫んだ。

飛び出そうとするシルキーを、エリは思わず後ろから掴んで引き止めてしまった。

「やん、放してぇ！」

「だ……だめよ、今、出ちゃ」

「なぁんでぇぇ？」

シルキーが抗議してジタバタする。

「それより、シルキー、あのっ……シオンって――？　あれは黒騎士でしょ？」

「だからっっ。シオンが黒騎士なの！」

（…………えっ？？？……）

メィネア姫の青い瞳から、涙がこぼれた。黒騎士は手をその頬にあて、姫の涙をそっと拭った。

「――シオン」

メィネア姫は叫んだ。少女は身を投げ出し、黒騎士はたおやかな少女の体をゆるく抱きしめた。

「姫……わたしが暗黒の力の支配から逃れることが出来るのは僅かの間です。すぐにも再び、この身は悪しき魂の虜に戻ります。もう猶予はなりません。

もし――もし、このままわたしがかの悪しき者の支配から脱することが出来ないなら、その時にはあなたがこの体ごと、わたしを滅ぼして下さい」

「シオン……そんなこと出来ません、わたくしの騎士さま、シオン――」

「メィネア、あなたはナの白き女王です。やらねばなりません。あの悪霊をこれ以上放置すれば、その害はバイストン・ウェル全土に及びましょう。そして――地上にも。それを阻むことが出来るのはあなただけだ……」

黒騎士の腕に抱かれながら、メィネア姫は首を振った。

「シオンという方は――黒騎士に人質に取られたのではなかったのですか？」

エリはシルキーに尋ねた。

「うん……それはそうなんだけどォ――黒騎士はシオンで……シオンじゃないんだっ！でも、シオンなんだよ！」

シルキーは悲痛な声で答えた。

その時、いきなり黒騎士はメィネアを突き飛ばした。苦しげに頭を押さえる。

「メィネア！　もうお行きなさい……奴が戻ってくる。わたしが黒騎士に戻る前に――早く！」

メィネアはためらった。が、傍らの生け垣からポロポーズの花を折ると、それを黒騎士の手元に握らせ、急いで走り去った。

「……エリさま、行こう！」

シルキーもその後を追って空に舞い上がった。エリも立ち上がって逃げようと思ったのだが、なんだか苦しむ黒騎士のことが気になって、つい、躊躇してしまった。本当にこれがあの黒騎士なの？

メィネア姫の姿が消えたのは反対側の生け垣の影からは闇そのもののような妖しい光を携えて、裸身のフェラリオが翔んでくる。ダーク・フェラリオは黒騎士の肩に止まった。

エリは黒騎士のあの邪悪な気配が戻ってくるのを感じとった。

彼は立ち上がり、手に持っている花を見ると、それを手の中で握り潰した。

ラーだろう！　全身のおどろおどろしい装甲は黒光りしている。長い尾、こうもりのような巨大な羽。そして……エリは感じた。邪悪な、強い、心！

「聖戦士殿、再びまみえましたな」

不吉なオーラバトラーから声が届いた。

「もっとも、このことはわかっていたことですが。あなたがわが軍営に降だって下さるということは」

黒騎士だ！

エリは、剣を振り上げた。が、その剣は黒騎士のオーラバトラーの剣と斬り結んで、呆気なくはね飛ばされた。

黒騎士のオーラバトラーの、がっしりとした爪のついた足が、操縦席があるサーバインの腹部を直撃して、蹴り上げた。衝撃がもろにエリの体を襲った。

「う……」

意識が朦朧とする。

大きく息を吸って、あえいだ。

（ダメ……こんなところで気を失なってちゃ……戦うのよ！）

黒騎士のオーラバトラー・ズワウスの腕がサーバインの胸もとを掴みあげた。黒い羽がバサバサとはばたき、その風圧でサーバインは腕を上げることも出来ない。機体がギシギシときしみ、火花が散る。ズワウスの足の一撃が再び直撃した。

今度こそ、エリは意識が遠のくのを感じた。

（お母さま……助けて……）

男の声が聞こえる。黒騎士の声だ。

「そう……そうしてしばらく眠っていて下さい。せっかくのサーバインを傷つけたくない。――ようこそ、聖戦士どの、我が軍営へ」

ズワウスはコントロールを失ったサーバインを、後から来たレプラカーンとともにギンの岬の要塞へと運んでいった。

4

細かな刺繍をほどこされた白いレースが見えた。ほのかな明りがそれを照らしている。

綺麗……あんなに大きなレースだもの、きっとすごく高価なものだわ……エリはぼんやりと思った。そして、目が覚めた。

そこは大きな木製の四柱寝台の上だった。レースは中世のお姫さまが寝ていた寝台のように高い天井からエリの頭を覆うように襞を幾重にも寄せて垂れ下がっている。

起き上がって、体の下のふかふかした寝具の、絹の感触を撫でてみる。

広い部屋だ。お城の中のような。燭台の柔らかな光が薄暗い室内を照らしている。

金色のにぶい輝きを放つ調度が目につく、あれは……本物の金製品なのかしら？

エリは戦闘服を着ていた。

その豪華な部屋にふさわしからざる自分の格好に気がついて、エリは自分の境遇を思い出した。

すると、ここは黒騎士の棲むというギンの岬の要塞なのか？

エリは寝台から降りると、部屋を横切って、まるで屋敷の玄関のように大きな扉の方へ駆け寄った。ノブを握って開けようとしたが、……ビクともしない。

扉の脇にあった椅子を取り上げて、扉にぶつけてみたが、二回・三回と打ちつけた所で壊れたのは――椅子の方だった。

「ああん、もう！」

エリは、部屋の中を見回して、窓を捜した。――反対側の壁にステンド・グラスをはめた美しい窓がある。

そちらの方に行こうとして、エリはその途中で、長椅子の上に用意されている薄いピンク色をした裾の長いドレスにふと目を奪われた。

足がそこでためらい……つい、薄くて軽い材質で出来た、淡く光るような色合いのそのドレスを手に取って、体に合わせてみてしまう。すぐ横に姿見の鏡があった。

（……お姫さまみたい……）

鏡に映る自分の姿に、エリは吐息をついた。

エリは着てみたい、という誘惑にかられたが、急いで首を振った。

（今は、こんなことをしている暇はないわ。ラージアにもみんなにも迷惑をかけてしまった……あたしはサーバインを預かったのに！――メイネアさま、ごめんなさい！）

窓に駆け寄る。窓には鍵はかかっていなくて、留め金をはずすとすぐに外側に開いた。

――目のくらむような高い所にエリはいた。エリは当惑して闇に包まれた外を見渡した。

ここはどうやら塔のような場所らしい。夜の海の黒い水平線が見える。竜の背のようにぎざぎざな海岸線がかろうじて見て取れるし、その絶崖を見下ろすことも出来た。――波の音。深夜のようだ。随分長いこと眠っていたのかもしれない。

海との間には箱庭のような、樹木が植わった中庭がある。要塞の外壁の内側にある庭のようだ。

――あそこに、降りれるかしら？　エリは自問した。常識で考えるなら――出来るわけはない。考えただけでもゾッとした。どうみても、五、六階分くらいの高さがありそうに見える。でも、やるしかないわ！　エリは思った。目で見るほどに困難ではないはず――きっと。壁は石を積んで出来ているから、足掛かりはある。

すぐに部屋の中に戻ると寝台に上がり、その絹と思われる敷布を接いで、縄を作り始めた。汗だくになってそんな作業をしていると――ふと寝台の上のレースが目についた。あれが使えないがろーか、とエリは思った。そして、実行してみることにした。

しばらくして。

エリは城の壁を伝い降りていた。

襞を広げるとレース布はすごく長くて、しっかりした紐になってくれた。それを壁に備えつけられた四柱寝台の柱に結びつけ、窓から垂らした。それでも中庭の地面までは届かなかったが、シーツを裂いて結び合せたものを繋ぐことでようやく下に着いた。紐はエリの体重くらいなら十分に支えてくれた。

……とはいえ。

降りる作業は思った以上に骨だった。

下は、見ないようにする。そんなことをしたら、目がくらんでしまう。

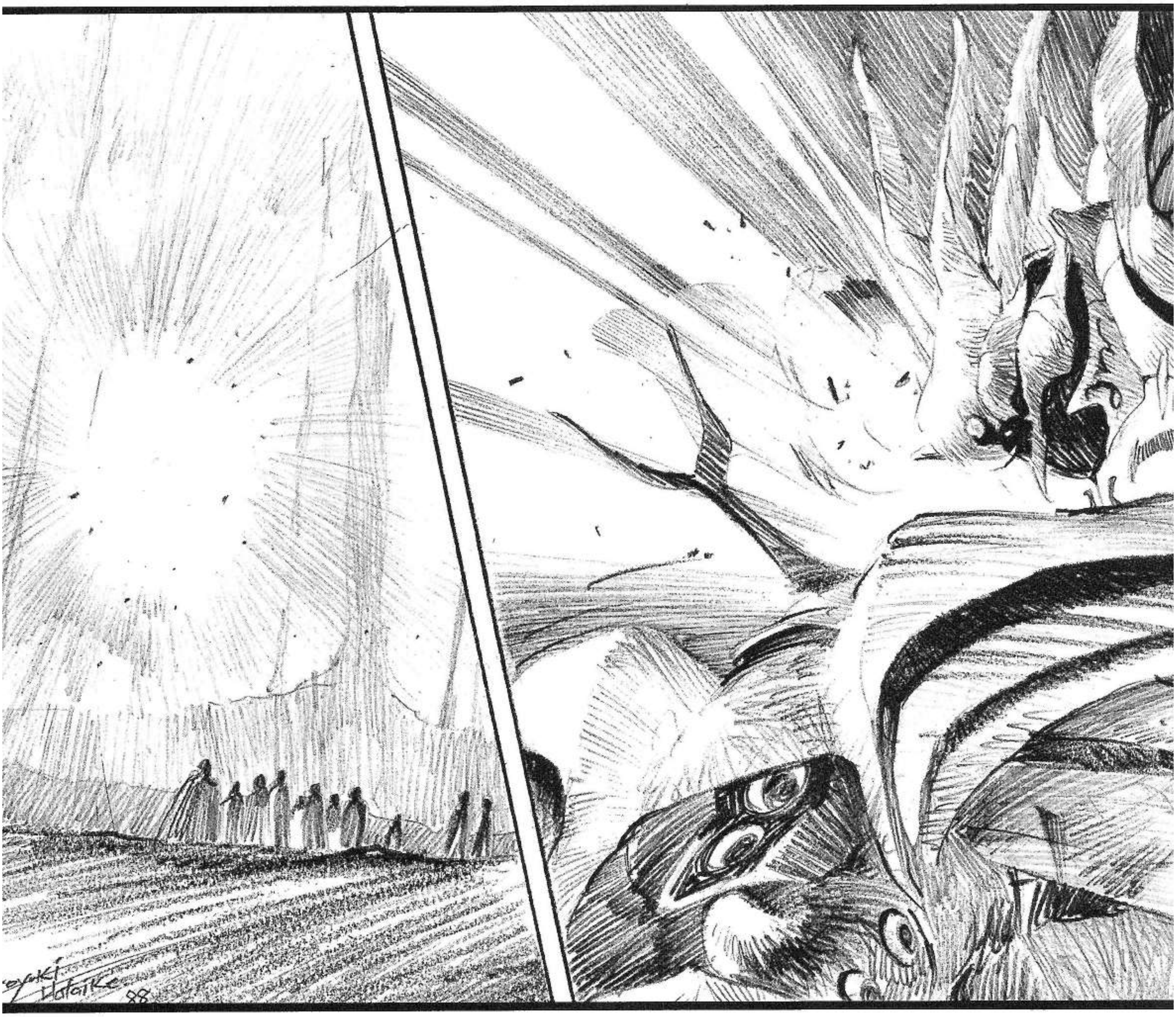
汗が滝のように流れ出て、手が滑る。潮を含んだ夜風は冷たかったが、そんなものはまるで気にかからない。肩も背中も痛い。気を少しでも許せば足を踏みはずしてしまいそうなので、一時たりとも気を緩めることが出来ない。――頭がガンガンしてきた。

中沢くん……不意に、デートをするはずだった彼の顔が頭に浮かんだ。ラグビー部に所属する彼なら、こんな壁はすぐに降りられたかもしれない。中沢くんなら、もっとメイネア姫たちを助けることも出来ただろうに、あまりに自分が役立たずなのが情けなかった。

泣き言のひとつやふたつが出てきた頃……光を散らして、


SKREEEE
VROOOOSH
VROOOMM.

ダーク・フェラリオは黒騎士に何やら耳打ちした。その顔が自分の方を見たのにエリはギクリとした。
「聖戦士どののそのような所で立ち聞きとははしたない。出ておいでなさい」
エリはすでにみつかってしまったのを悟って、立ち上がった。黒騎士は険しい目で睨みつける。
黒騎士は笑いを含んだ声で言った。
「せっかく最高のもてなしをしようとしてあげたのに、あの部屋を抜け出したのですかな？　困ったお嬢さんだ」
「あなたは……誰です？　その身はナの騎士のシオン殿。でも、あなたはシオンではありませんね。——誰？」
エリは厳しい声で尋ねた。
黒騎士は腰を折って、優雅に一礼した。
「ご明察の通り、わたしはアスタルテ・ブラードと申す者。又の名は、ショット・ウエポンとも。もとはあなたと同じ地上人で、アメリカ人でした」
「——ア……アメリカ？」
「そう。エリ殿、申し上げておこう、あなたを地上に戻してあげられるのは、わたしだけだということを」
「え……？　何のことです？」
どういうことなの？
わたしを呼んだのはメィネア姫とシルキーだし、これが終われば地上に還してもらえるんじゃあ……。うろたえたエリの表情を見てとると、黒騎士は肩の上のフェラリオに手を添えて言った。
「そう……ナのメィネア姫はあのちっぽけなミ・フェラリオに地上人をこのバイストン・ウェルに呼ぶ力があると信じたようだが、ミ・フェラリオにはそんな力は無い。お前を呼んだのはここにいる、マーブ・リンだ」
そういえば……オーラロードを落ちてきた時、黒騎士とマーブ・リンの視線を確かにエリは感じていた。そして、その力はひどく強いものに感じられた……。
「サーバインは我らの呼びかけには応じないので、あれを湖の底から呼び起こすにはナの姫君とあのフェラリオの力も必要だったが、こうなればもうすべては我らのものだ。
もし、お前が地上に還りたいのなら、お前はこのマーブ・リンに力を借りねばならん。……還りたいのだろう？」
エリはうなずいた。還りたい——家族と友達が待つ地上へ。
「それでは、我らに手を貸すことだ」
黒騎士の籠手をつけた手がエリの腕を掴み、引き寄せた。黒騎士はささやいた。暗黒が心に流れ込むのをエリは感じた……。
「我が傍らで闇の女王となるが良い。このバイストン・ウェルを、そしてやがては地上をも征服、支配することが出来る。ニューヨークもロンドンも——そなたの住む東京をもその手に握ることが出来るのだ。贅沢も思いのまま、ドレスや宝石——そなたが欲しいものは何でも手に入る……」
その声の響きがなんだか心地好くて、エリはうっとりとしてそれに聞き入った。あたりが真の闇に覆われる。オレンジがかった金色の髪が片目を斜すに隠している端正な顔立ちの若い男の顔が見える——アスタルテ・ブラード。かつて、その男はシオンとメィネア姫に打ち果たされた。が、その魂はよみがえり、復讐果たした——シオンの魂に取り憑き、その体を支配する、という形で。
炎と死が見える……この男の背後には。破壊、戦雲、哀しみ——だが、抵抗が出来ない。緑の肌に血のような色の入れ墨をした美しいフェラリオが彼女に微笑みかける。そのフェラリオがささやきかけた。
あなた地上に還してあげるわ……。
エリは抵抗をやめて、楽になろうとした。が、その闇に一筋の光が差した。黒い髪の意志の強い面差しの少年……シオン・メィネア姫の青い瞳が心に浮かんだ。そう、あのふたりのためにも——ここで負けたら！
「いやぁ——っ！」
エリは、黒騎士を突っぱねた。無我夢中で暴れて、身を引き剥がす。黒騎士の腕がさらに伸びると、必死であとずさった。
エリは叫んだ。
「還りたい……でもっ。だからといってあなたたちに勝手なことはさせないわ！　そんなこと、許さない……絶対に！」
エリの心を、深い哀しみが満ちた。何故、こんなことをするの？　破壊したり殺したり……争ったり！　そんなことの何が楽しいっていうの？
その時、夜の静寂を裂いて、爆発音とともに砦の一角が崩れ落ちた。空気がぴりぴりと音を立て、地面が揺れる。
「な……何だ？」
うろたえる黒騎士の頭上を、白いオーラバトラーが飛んでいく。ナの白き護り、ボチューンだ！　その手から発せられる炎の玉が砦を破壊していく。闇の声が起こった。それに応じて、砦の中から兵たちがばらばらと飛び出してくる。
「——エリさま！」
エリの前に、人影が飛び出した。ラージア！　手に剣を持っている。
「勝負だ、黒騎士！　わたしはナの近衛騎士団長、ラージア・ハンム！」
ラージアは黒騎士に襲いかかった。が、黒騎士は軽くかわす。さらに一撃——今度は剣は黒騎士の体をまともに払った。が……刀身は手応えなく空を切り、黒騎士の体は闇に溶けた。
「卑怯な！」
ラージアは叫んだ。
「今はお前たちにかまっておれぬのでな。後でじっくりと料理してやろう、騎士団長殿。姫君は歓待せねば」
黒騎士の笑い声だけが残された。ラージアは毒ずくと、エリの方を振り返った。
「エリさま……無茶をなさる！　ご無事で？」
「ラージア殿、今の攻撃はメィネア姫ですね？　あの方が出られたのですね？」
「はい、ボチューンで出撃なさいました」
エリは、ラージアの腕を掴んだ。
「わたしも、サーバインで出ます」
「エリさま……しかし、サーバインは黒騎士の手に。どこにあるかは——」
「わかります！——サーバインが……わたしを呼んでいます。サーバインの所へ行くまで、わたしを守っていただけますか？」
サーバイン……その白い姿がエリの目の奥に浮かんでいた。行けるわ。エリは思った。あの湖に呼ばれたように、わたしはサーバインに呼ばれている。
ラージアはあぜんとエリの顔を見た。が、うなずいた。
「はい、エリさま！」
……兵が庭中に散開していた。破壊され、炎上した砦の屋敷を消火する者、そして攻め入ったナの近衛騎士に応戦する者——。
ラージアは獅子奮迅の働きで、敵を蹴散らしていった。エリは、火を吹き出している、地下室への扉らしきものを見つけた。そこに、エリは強く惹かれるものを感じた。
「ラージア殿、あそこです！」
エリの叫びに応じて、ラージアは燃えている木の扉に体ご



よ！　エリさま、メイネアさまは大丈夫だからっ！　黒騎士を！」

シルキーがわめいた。

ズラウスの剣が襲いかかる。

「——所詮、わたしの敵ではないわぁー」

黒騎士が叫ぶ。その通りだ……圧倒的に、強い。詰め寄られて、間すら取ることが出来ない。巨大な羽を広げるズワウス——まるで暗黒の翼が空を覆いつくすかのようだ。絶望が胸をむしばみ、エリは気分が悪くなるのを感じた。

斬り結んだズワウスの剣を支える腕が次第に後退していく。

「聖戦士殿、もう一度、聞こう。——手を結ばぬか？　家族も誰も知りよしがないこんな地の底でひとりで死ぬのは嫌だろう？　仲間になれば、やがては地上の者たちの主人として君臨する立場で還ることが出来るのだ。死んでしまっては何にもならぬぞ？」

黒騎士のささやきに、エリはやはり、首をきっぱりと横に振った。メイネア姫は、恋人を殺そうとしたのだ。そして……そうさせたのは、この男！

「——誰の主人にもなりたくないわ！　そんなふうにして地上に還ろうとは思いません。あなたは、悪魔だわ！」

「よう言うた！　では……死ね！」

殺される！……お母さま、ごめんなさい！　お父さま、ユッコ、中沢くん——デート、したかったな……！　エリの心にいろんな思いがかすめた。

が、その土壇場で、奇妙な力が体に満ちるのを、エリは感じた。オーラの力が増す！　サーバインはズワウスの剣を跳ねのけ、あやうく下に逃れた。

『すぐにズワウスが来る！　体勢を整えて上昇するんだ！』

少年の声がエリに命じた。エリの体が何かに引かれたようにサーバインを操る。

「シオン……シオンなのぉっ！」

シルキーが叫んだ。姿は見えない。が、エリも黒い髪の、意志の強い少年の存在をすぐ近くに感じた。

「シオン……あなたなのですか？」

エリは声をあげた。

『ああ……黒騎士を倒す！　きみのオーラ力だけでは無理だが、おれの力と合わせれば……やっつけることが出来るだろう』

少年の声がエリにささやきかけた。

とぶつけていって、そこを突破した。そこは格納倉庫のような場所だった。オーバトラーの残骸のようなものが並べられている。そして、その中に、サーバインがある！
警備の兵が襲ってきた。それを、ラージアは一手に引き受けた。エリを庇って、サーバインまで走らせる。サーバインの腹部が開き、エリはそこに潜り込んだ。
「エリさまぁ……！」
戦っているラージアたちの頭上をかすめて光る者が翔んできた。そして、サーバインの腹部が閉まる一瞬前にかろうじて中に滑り込んできた。シルキーだ。
「——メイネアさまが、エリさまの方についてろって！」
「シルキー……ありがとう！」
エリはミ・フェラリオを肩にとまらせた。
髭面の騎士は足下で警備の兵をねじ伏せながらサーバインを見上げた。そして、叫んだ。
「——ご武運を、姫！」
エリはサーバインを発進させた。

5

炎をかちこちから噴き出す要塞が眼下に見えた。エリは目を走らす。黒騎士は？　そして、メイネアさまは？
「エリさまっ、あそこ！」
シルキー叫んだ。
海の上だ——荒い波が立つ沖合の暗い海上の空で、白いボチューンが三騎のオーラバトラーに囲まれている。黒騎士のズワウス、それに赤いレプラカーンが二騎。エリはサーバインに剣を抜かせた！
ぐんぐん近ずいていく——ボチューンが剣を振りおろし、レプラカーンの腕を斬り落とした！　その背後から、もう一騎のレプラカーンが襲いかかる。炎の玉の砲弾がボチューンの背を直撃した。かろうじて持ち答えたボチューンの体を、ズワウスが摑みかかる。ぐわしゃ、とボチューンの肩の装甲が潰れた。そのまま、ズワウスの爪がその装甲を剝いでいく。ボチューンは力ずくでそれを振り切ったが、右腕はすでにもげかかっている。
「——メイネアさま！」
サーバインは背後からズワウスにとびかかった。が、かわされる。ズワウスは反転して、白いオーラバトラー二騎——サーバインとボチューンに向き合った。
「エリさまっ、レプラカーン頼ます。黒騎士はわたくしが、この手でー」
メイネアの声がした。エリはうなずくと、無傷な方のレプラカーンに向かっていった。剣を振りかぶり、斬りおろす。レプラカーンの剣がそれを受け、オーラの閃光が起こった。
(ク………)
押し戻されそうになるのをこらえる。すると、脇から腕が無いレプラカーンが迫り、その火器が裂烈した。衝撃！
「——邪魔を、しないで！」
エリは叫ぶと、上に飛んで火器を逃れ、更に追いすがってきた腕の無いレプラカーンに逆に剣を突き立てた。剣はずぶずぶとそれの胸盤を突き破っていった。剣を引くと、レプラカーンは力つき、海に落ちていく。
「エリさま、右！」
シルキーが注意を引き、そのお陰で右からのもう一騎のレプラカーンの剣をかわすことが出来た。レプラカーンは素早く身を引くとその腕の噴射器から砲弾を投げつけてきた。避けきれず、足の膝のあたりがはじけ飛ぶ。バランスを崩すかと思われたが、なんとか持ち答えた。被害は軽微だ。エリは唇をかみしめた。レプラカーンを追う。今度は剣を下段から構え、追いすがって横に払うと見せて、上段が真一文字に斬り下ろした。
悪鬼を思わせる角の生えた赤い頭を真二つに——剣はレプラカーンを縦に裂いた。
「エリさま、すごいっ！……やったよ！」
シルキーが歓声を上げた。断ち斬った断面に神経組織のように蠢く配線が覗いた。まるで、生き物のようだ。エリはゾッとした。
メイネアさまは？
——エリは悲鳴を上げかけた。ズワウスの尾がボチューンを襲う。もう一撃！……ボチューンは今にも海に落ちようとしていた。エリはサーバインで飛んでいって、海面に激突する寸前に、既に力を失ったボチューンの手を取って救い上げた。
「エリさま、お構い下さいますな……それより、黒騎士を！　わたくしには……出来なかった……」
メイネアの悲痛な叫び……。
「メイネアさま……！」
エリはなんとか海岸までボチューンを運ぼうとした。その背をズワウスの砲弾が狙った。
「キャアアア——ッ！」
エリは悲鳴を上げた。
サーバインはボチューンを追おうとしたエリの視界の端に、海岸の絶崖の上から白い一角馬が身を踊らせるのが見えた。その背には白い翼が生え、それは天馬となった。ボチューンの操縦席が開き、そこから気を失なったメイネアがこぼれ落ちた。——それはメイネアを救い上げると、空を飛んだ。
「何……あれは？」
「『ナの白きドラゥゲン』の化身——ナの女王の守護者だ



シルキー・マウに魅せられて…



──あとがきにかえて──

文・イラスト　ひかわ玲子

アニメ世代の根っからのアニメ・ファンで、かつ、トールキンの『指輪物語』を嘗めるよーに読んでいるファンタジィ・ファンでもある私にとって、『聖戦士ダンバイン』は堪えられないアニメでした。

『ダンバイン』放映時にすでにお知り合いだった出渕氏に設定とかの話を聞かせてもらっていた私は、第一回放映をわくわくして見たものです。そしてその時、一目で惚れてしまったのは──シルキー・マウだったのでした。第一回……ドレイク・ルフトの館に地上からひきずり下ろされたショウ、そしてそのために囚われていたエ・フェラリオのシルキー・マウ。

水牢の中で涙を流すシルキー・マウの美しさときたら、絶品でした。哀しげに……疲れきった、けだるい様子で水の中へと落ちていくシルキーの横顔を、「何がそんなに哀しいの？　おねーさんに話してごらん」と言いたいような気持ちで、私は食い入るようにみつめたもの。あのシーンの印象はずっと美しい残像になって私の目の奥に残っていました。

シルキーは、バイストン・ウエルを騒がせた罰として、解放された後に、ミ・フェラリオとして五百年間を過ごすことを命じられました。そうか、あのきれいなシルキーちゃんはミ・フェラリオになるのか。シルキー・マウだったら、ミ・フェラリオになったって、飛び切り可愛いに違いない。私はひそかにそう思いました。──で、前回の『オーラバトラー・1』の仕事の時、私は出渕氏に申し上げたのです。

「ねえねえ、主人公の男の子のまわりに、チャム・ファウみたいなミ・フェラリオを翔ばしません？　で、ね──ほら、シルキー・マウっていたでしょ。あの娘がミ・フェラリオになっちゃってるわけだから、あの娘がいいな」

──というわけで、前回のオリジナル・ストーリー『黒の虜囚』にシルキーちゃんは登場したわけでした。あ……ご覧になっていない方はご興味があったら『オーラバトラー・1』を覗いてやって下さい、今度の話は独立はしてるけど、実はその続きって形になってます。シオンとメィネア姫がアスタルテ・ブラードをやっつける話ですネ。

その間にOVA化された『聖戦士ダンバイン』があったわけですが、このビデオではシオンのお供としてのシルキー・マウのアイディアが生かされた、と出渕氏から聞かされた時、私がとおっても幸せな気分になったのは、言うまでもありません。

もともと、常時体重が40キロ、とかふくよかな友人連中には目指せ45キロ、なーんてことを言っている私は（油断すると、すぐに40キロを切ってしまう）、体型的に限り無く近いから……ってわけでもないでしょうが、フェアリ・コンと呼ばれても仕方がないほど妖精が好きです。チャム・ファウがかあいくて大好きだったし（あの小さな体で一生懸命なトコロ）、そしてあの少々おつかない、エ・フェラリオのお姉さま方もなかなかでした。

今回、出渕さんからは、ダーク・フェラリオというモチーフを載いて、念願の美しいお姉さま、エ・フェラリオも書けたし。本当に機会をくださった出渕さんに感謝、です。



今度の二作を書いて、すっかり愛着が出てしまったのは、なんといってもズワウス。あんなに強そうなのに、なんだってやられちゃうんでしょーね、可哀そうに。……でも、あのズワウスの強さ、恐ろしさが好きです。惹かれます。ショットやアスタルテ、といった悪役というのも、どこか人を惹きつける所があります。たぶん……私たちのような普通の人、と必ず共通している、共感できる弱さ、を持っているからでしょう。私たちはそれに負けてはいけないんですけど、ね。うん。

この素晴らしい世界に心を遊ばせていただいたことについて、アニメのスタッフの方々に感謝します。私たちの心に、バイストン・ウエルをありがとう……。

ひかわ玲子プロフィール

小説家。現在、富士見書房発行「ドラゴンマガジン」に「パセット英雄伝エルヴァーズ」を連載中。ほかに創元社刊の「ダーコーヴァシリーズ」の翻訳を手がける新鋭女性ファンタジー作家

「でも……あれは、あなただわ！」
『そうだ。それが何だというんだ？　メイネアのためなら、おれはこの身を滅ぼすこともいとわない。力を……貸してほしい。お願いだ！』
ズワウスが視界に大きくなってくる。
黒騎士！　闇を背負って、その姿は迫る。サーバインは、剣を構えた。自信たっぷりだったその悪しき心に、最後の瞬間、狼狽が走るのがわかった。
「馬鹿な――この体はお前の！」
「ぬかったな、黒騎士よ。いや、アスタルテ・ブラード――それとも、ショットか？　冥府へと戻るがいい、お前にふさわしい場所へ――永遠にな！」
エリは、自分の口から洩れたその言葉が自分の言葉ではないことを知っていた。
サーバインの剣が、ズワウスを斜すに斬りかかる。ズワウスの剣がそれを受けた。オーラ力が激突した。が、サーバインの力が勝ち、剣はズワウスを袈裟懸けに裂く。オーラの輝きが両者を包んだ。
アスタルテの、ショットの断末魔の叫びが、耳に聞こえた。裂けたズワウスの装甲の間から、その時、光とともに、あの裸身のフェラリオ、ダーク・フェラリオのマーブ・リンが翔び出てきた。エリの目にはそれが奇妙にはっきりと見えた。ダーク・フェラリオはエリの方に翔んできた。……その緑色の体から血のような色の入れ墨が次第に薄れ、それどころかその体は光につつまれて人と同じ大きさに変わり、黒い豊かな髪の美しい女性の姿になった。美しい、どこか人でないような神秘的な女性へと。その女性は、エリに微笑みかけた。
（ありがとう……解放されました）
声が聞こえた。
サーバインはズワウスともつれあうように海に落ちていった。そして、その中からシオンとエリ、それにシルキーを救い出してくれたのは、その女性だった。

6

（わたしは、エ・フェラリオでした。でも、心弱く、滅びかけたアスタルテの悪しき魂に憑かれ、ダーク・フェラリオとなってしまいました。わたしが、かの魂をシオンのもとへと運ぶ役目をになってしまったのです……）
マーブ・リンはエリに語りかけた。
エ・フェラリオはシルキーとシオンを海岸へと運んだ。そこには、気を失っているメイネア姫を介抱するラージア麾下の近衛騎士団の者たちがいる。怪我をしている者も多く、ラージアも頭に血に染まった布を巻いていた。
マーブ・リンは気を失ったままのシオンとシルキーを、そっとメイネア姫と重ねるように横たえた。一緒になった恋人たちの姿に、エリはホッとした。
（さあ、あなたは行きましょう）
（――どこへ？）
（地上へ。還りたいのでしょう？　わたしの力はもう僅かしか残っていませんが、最後にあなたをオーラロードに乗せるくらいは出来るでしょう。その後、わたしの魂は浄化されます……さぁ！）
マーブの差し出す手を、エリは取った。
「エリさま」
ラージアが、マーブとともに空中に浮かぶエリに話しかけてきた。
朝が訪れようとしている。水平線に、光が差していた。ラージアは剣をすらりと抜き、それを顔の前に立てて、誓った。
「エリさま。あなたの勇気と清き心に我が騎士としての敬意と忠誠を捧げます」
エリは戸惑った顔つきになった。が、微笑み、答えた。
「ありがとう。嬉しく思います、ラージア・ハンム。でも、わたしは父と母のもとに還ります。皆さまによろしく。あなたたちに会えて良かった……」
「エリさま――わたしもです」
髭面で、ラージアは重々しく言った。
マーブの体が輝く。――オーラの光に。エリはその手を握りながら、もう一度、下にいる人たちを見た。シルキー、メイネア、シオン、ラージア、そしてナの騎士たち。
（――あなたのあるべき場所のあるべき時へ）、マーブはエリに話し、微笑んだ。（バイストン・ウェルを忘れないで。あなたは、いつかここに生まれ、いつかここにまた戻るのです。……ありがとう、エリ。あなたは多くのことを成しました）
オーラの光の中に、マーブの体が溶けた。
そして、その瞬間――エリの体はオーラ・ロードへと乗った。めくるめく光……そして、闇――。

*　　*　　*

「――エリさん、お起きなさい。遅くなりますよ。今日は英語のテストもあるっておっしゃっていたでしょう？」
ノックの音。優しい声がドアの外からエリを呼んだ。
「はいっ、お母さま」
エリは答えて、ベットから起き上がった。カーテン越しに朝の光が部屋に満ちている。
ネコ柄のパジャマを着たエリは目をしばたたかせ、そして首を傾げた。
夢……？
それなら、どちらが夢で、どちらが現実だったのか。なんだか、どちらも夢であり、どちらもが現実のようにエリには思えた。
（……還ってきたのね、地上へ）
雀ののどかな鳴き声。そして、今日はデートの日。なんて幸せなんだろう。
エリの目は、本棚の一冊に惹きつけられた。それは……『真夏の夜の夢』。エリは本を開いた。そこに、ミ・フェラリオたちがいる。エリは、思わず微笑んだ。
（――シルキー？）
バイストン・ウェルの夢。いつか、そこに生まれ、そこに還る。それならば、それで良いのかもしれない。……夢でも。
エリはカーテンを開き、元気に服を着替えにかかった。

END

オーラバトラー設定資料集

オーラバトラー設定資料集 巨人騎士図鑑

■TV版ABを網羅したメカニックデザイン集

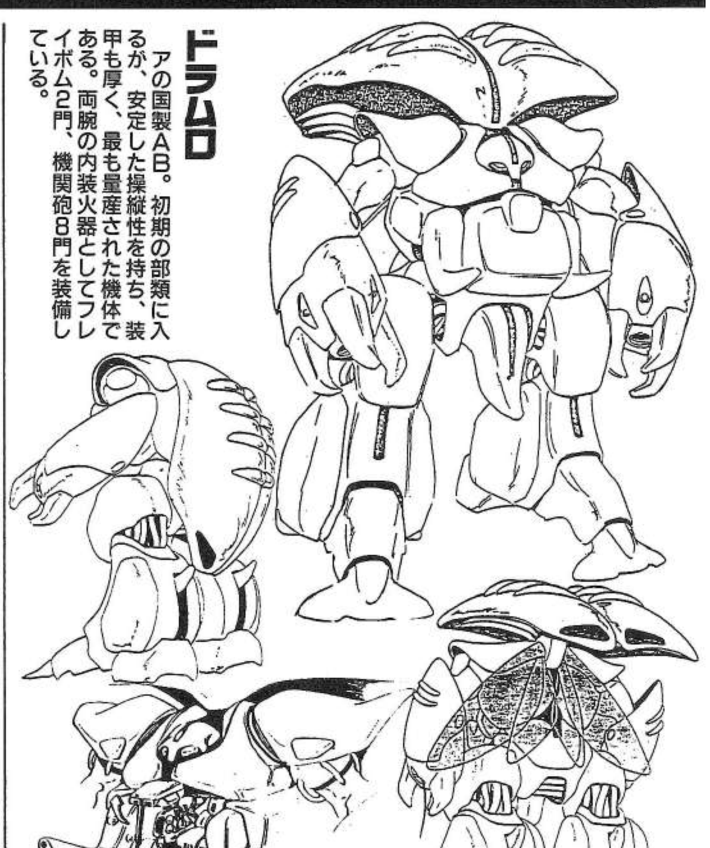
ダンバイン

アの国製AB。オーラ増幅装置が実用化される直前に完成しているため、充分に使いこなすには搭乗者の高いオーラ力を必要とする。固定火器はないが、4連装オーラショットを両腕に装備できる。



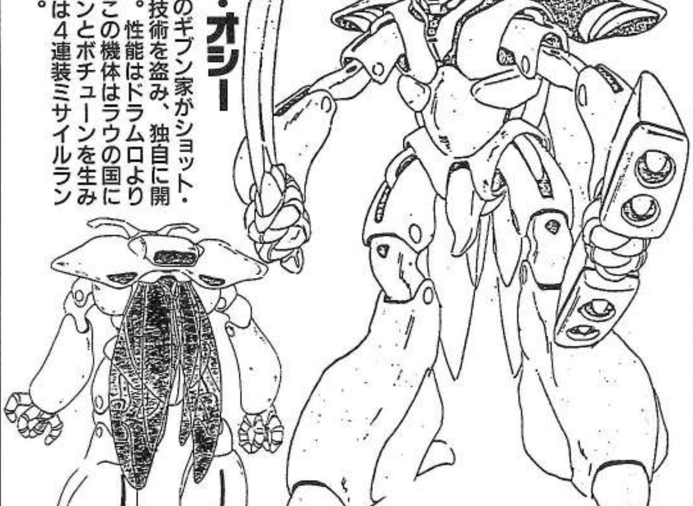
ドラムロ

アの国製AB。初期の部類に入るが、安定した操縦性を持ち、装甲も厚く、最も量産された機体である。両腕の内装火器としてフレイボム2門、機関砲8門を装備している。



ダーナ・オシー

アの国内のギブン家がショット・ウエポンの技術を盗み、独自に開発したAB。性能はドラムロより落ちるが、この機体はラウの国に渡り、ボゾンとボチューンを生み出す。火器は4連装ミサイルランチャーのみ。



黒の虜囚 STORY

「夢の来訪者」の前編とも言える「オーラバトラーズ」に掲載されたオリジナルストーリー「黒の虜囚」のあらすじを紹介します。

シオン・デル・パルミアンは、立身出世を夢みる若き騎士。戦役での殊勲を求め、様々な城を渡り歩いたが、名をあげる機会にはまだ巡り会っていなかった。

そんな時、耳にしたナの国で騎士を集めているという話。シオンは、故郷を旅立ったときから道連れになっているミ・フェラリオのシルキー・マウとともにナの国を目指した。

旅の途中、迷いこんだ深い樹海。まともな食事もできずにいた三日目のこと。シルキーが水を求めてみつけた赤い果実のなる木の繁みでシオンは白い一角馬の背に乗った哀しげな青い瞳の少女に出会った。

蹄の音もたてず、歩いていく一角馬。それはいつの間にかあたりを包んだ霧の中へと消えていく。

王族の出で立ちをしたその少女が、なにかを自分に伝えようとしている、そう思えたシオンはシルキーが止めるのも聞かず、一角馬の後を追った。

霧の中、二人がたどりついたのは中央に城がそびえつ湖だった。その城でシオンとシルキーを迎えたのはアスタルテ・ブラードという黒装束に身を包んだ若き城主。彼はこの城に来た久しぶりの客人である二人を歓迎し、滞在を許された。その上、晩餐への同席をもすすめられたのである。

しかし、シルキーはアスタルテという男に言いしれぬ怖れを感じていた。そう邪悪な何かを……。

晩餐の時、城主が他の国よりあずかっているという姫にシオン……は引き逢わされた。彼女は一角馬に乗ってシオンたちの前に現れた少女だった。しかし、哀しげな目は無く、さりとて笑うでもない、無表情でまるで人形のように見えた。いったい少女は何者なのか？

気散らしのために中庭に出たシオンは、シルキーに姫の話をした。魂を抜かれてしまっているのではないかというシルキーの言葉に、言いしれぬ思いを抱いたシオンだった。しかし、この城では客分の身、何も出来はしない。

シオンはいらだちをまぎらすように、闇の中に白く浮かぶポロポーズの花をながめ、たわむれにその一本を手折ろうとした時、

「手折ってはなりません」と少女の声に、止められた。そこには、あの白い一角馬に乗っていたままの姿の少女が立っていた。

姫は、シオンに助けを求めた。彼女はナの国の王女。王家付の魔道士であったアスタルテにさらわれ、ここに幽閉されたのだという。そしてアスタルテは『悪しき力』、ナの国の城に墓標として置かれていたオーラバトラーの残骸をも持ちだしたのだ。

そして、姫はシオンにアスタルテを討ち、『黒きドラウゲン』を解放させないでくれとたのみ、姿を消した。少女は実体ではなく、彼女の魂であった。

シオンが戦いの準備を進める間、シルキーは城の中の様子をうかがいに出た。城の中は無人であるかのように静まり、使用人たちの姿も消えている。不安を感じだしたシルキーはアスタルテに見つかってしまう。その時、アスタルテはシルキーの前世のことを語った。

「水牢に漂うそなたの姿も艶なものだった……」と。シルキーはその場から逃げだすことが出来たが、シオンのもくろみは、ばれてしまった。しかし、シオンの決心にはみじんのゆるぎもない。

オーラバトラーを手に入れるために、地下へと降りたシオンとシルキー。だが、そこには『黒きドラウゲン』が立ちふさがった。シオンはオーラの力に守られ戦ううち、自身の前世を思いだしはじめていた。そして、白いオーラバトラーに乗り込んだ時、その思いはしだいに強くなっていった。

サーバインを操り、ドラウゲンをしりぞけたシオン。しかし、その前に闇の魔道士アスタルテの操る2機のガドラムとズワウスが！

「そなたこそ……わたしの真のドラウゲンだ」アスタルテの魔術にシオンがはまりそうになった時、シルキーの力がシオンを守った。

（……チャムッ！……）

その時！シオンの心に前世の自分、そして仲間たちの姿が……。だが、再びシオンを黒い魔術がつつんだ。その暗黒を白いものが引き裂いた。それは白い一角馬だった。一角馬は形を変えて一角を持つ白い竜「白いドラウゲン」となった。白きドラウゲンはナの国の守護神、姫をアスタルテから守っていたのだ。シオンは3機のオーラバトラーとアスタルテをはげしい戦いの末、討ちはたした……。

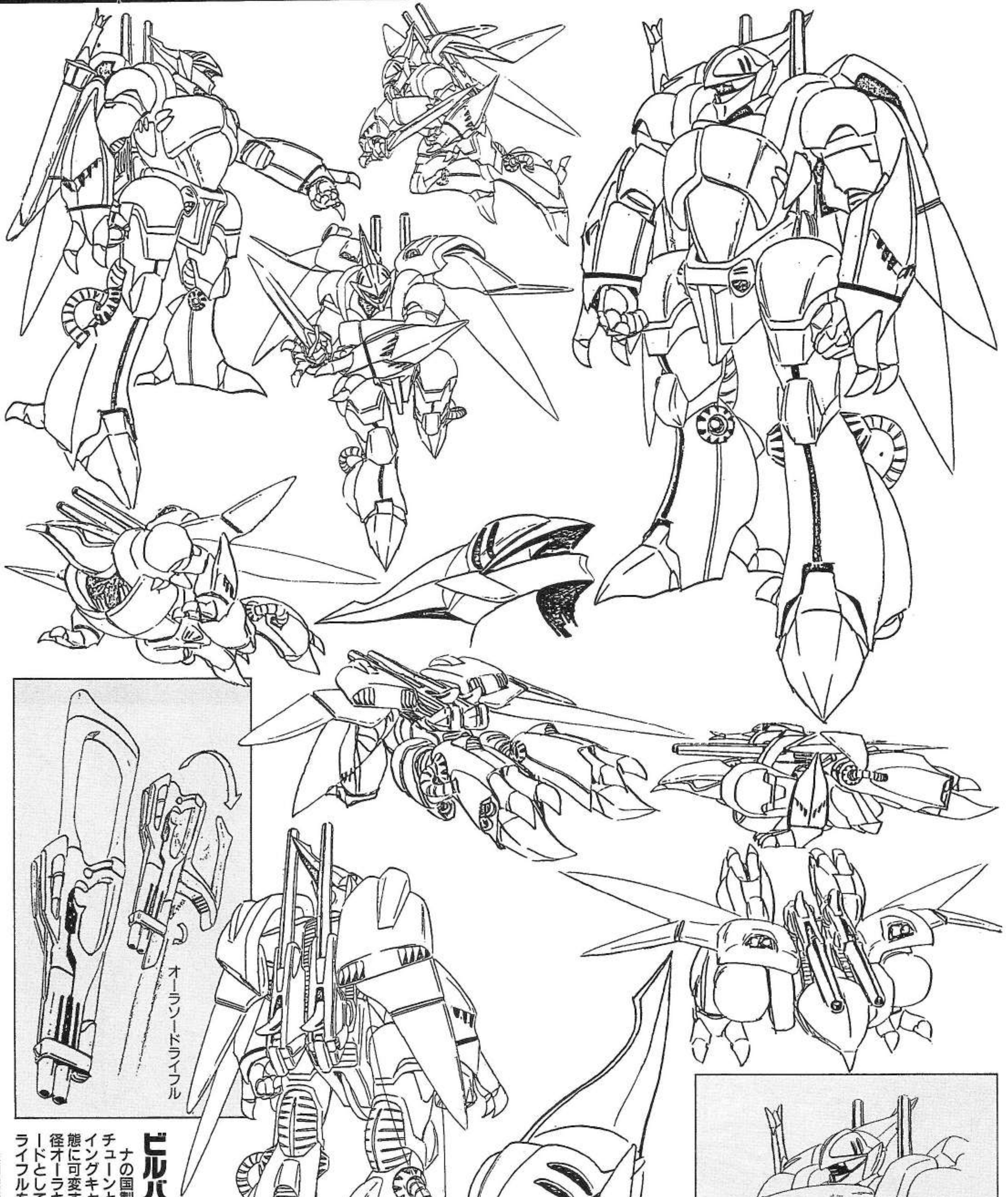
一夜が明け、はげしかった戦いも夢のように思えた。そびえたっていた城はまるで廃墟のような姿を見せている。アスタルテの作り上げた幻だったのだ。しかし、すべてが幻だったのではない。サーバインも、そして姫もここにいる。

城とサーバインは湖の底に沈んだ。

そして姫の名はメィネア・ラパーナ……。



オーラバトラー設定資料集





ビルバイン

ナの国製AB。ダンバイン、ボチューンという系統の発展型。ウイングキャリバーという戦闘機形態に可変する。武装も強力で大口径オーラキャノン2門にオーラソードとしても使えるオーラソードライフルを装備する。

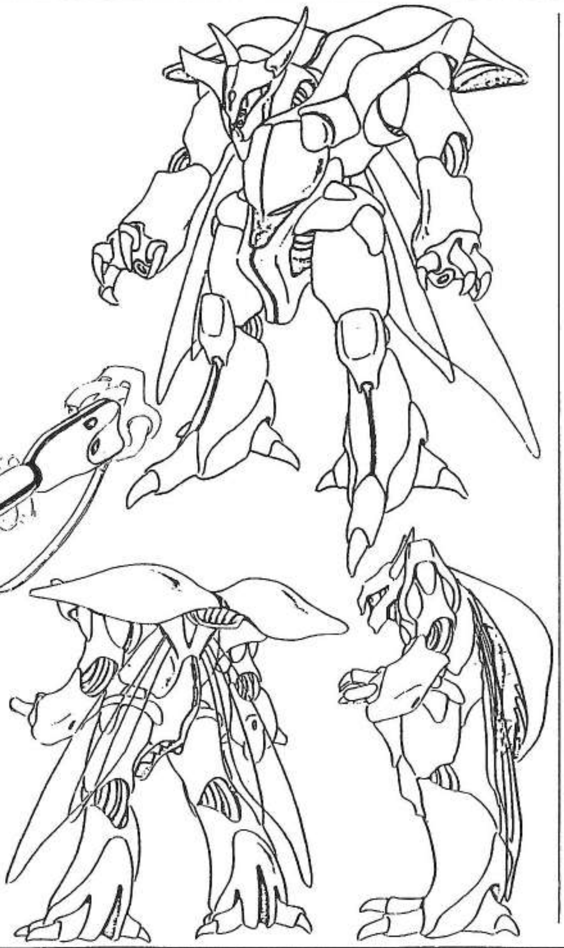
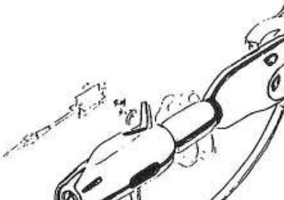
ビランビー

アの国製AB。初のオーラ増幅装置搭載機で、パワーが向上している。ダンバインの性能向上機であり、上級騎士用に量産された。オーラショットとオーラランチャーという火器を装備する。




ボゾン

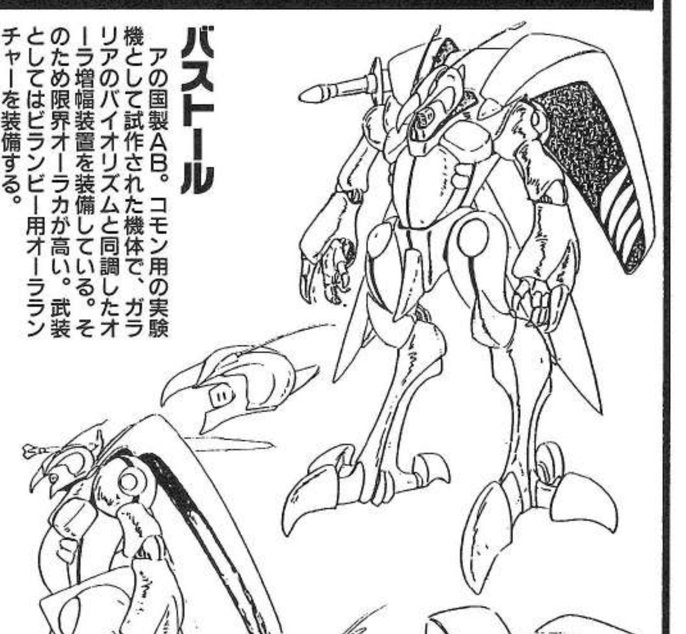
ダーナ・オシーを元にラウの国で開発されたAB。ドラムロ程度の性能でしかなかった。両腕にオーラショットを内蔵している。

狩猟兵器ガッシュ

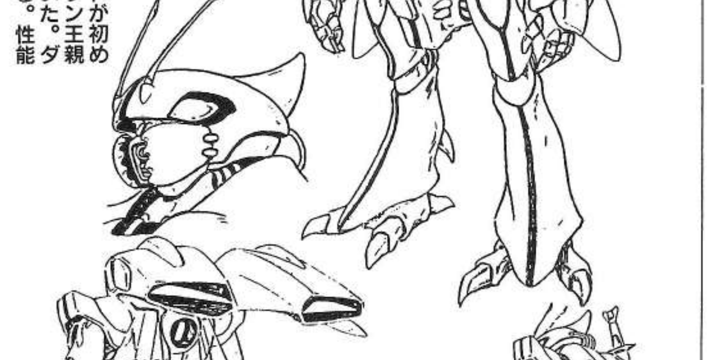
バストール

アの国製AB。コモン用の実験機として試作された機体で、ガラリアのバイオリズムと同調したオーラ増幅装置を装備している。そのため限界オーラ力が高い。武装としてはビランビー用オーラランチャーを装備する。



ゲド

アの国製AB。ショットが初めて開発した機体で、ホイゾン王親衛隊機として用いられていた。ダンバインの原型機にあたる。性能的には低い。

オーラバトラー設定資料集

ライネック

アとクの共同開発機。ズワアースと並ぶ高性能AB。両肩に6連装ミサイポッド、両腰に2連装ミサイルポッド、両腕にオーラバルカンを装備する。両軍の次期主力機に予定されていた。



短剣（投げつける）

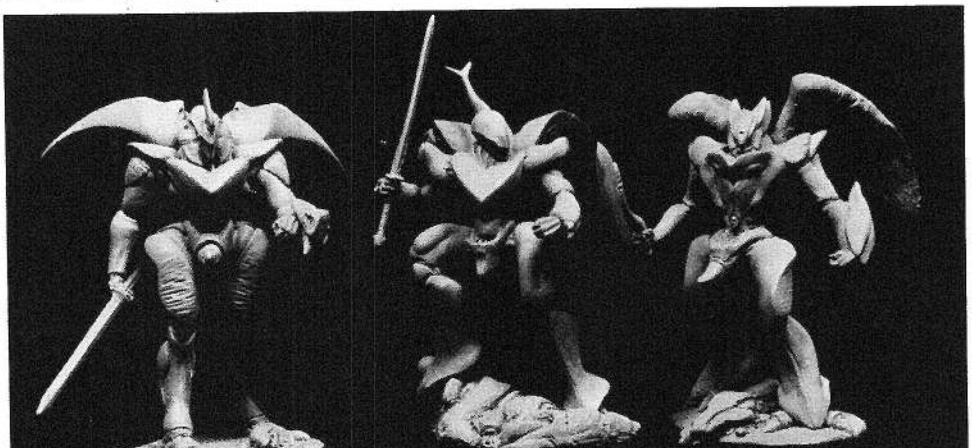
ズワース

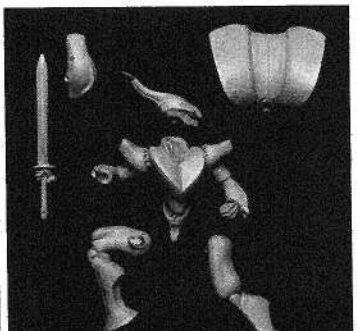
アの国製AB。ショットのABに対しての最終的結論ともいえる機体である。レプラカーンとビアレスの特徴を盛りこんでいる。オーラコンバーターにフレイボム砲2門を装備している。

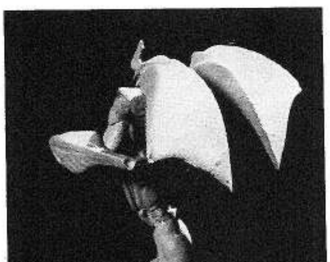


コトブキヤ新作ガレージキット紹介

同社から8月中旬に1／144スケールABシリーズが発売される。なんとTV版ABを全て統一スケールで出そうという試みで、13点が同時に発売される。原型製作は竹谷隆之氏で、キャストとメタルの並行販売が予定されている。





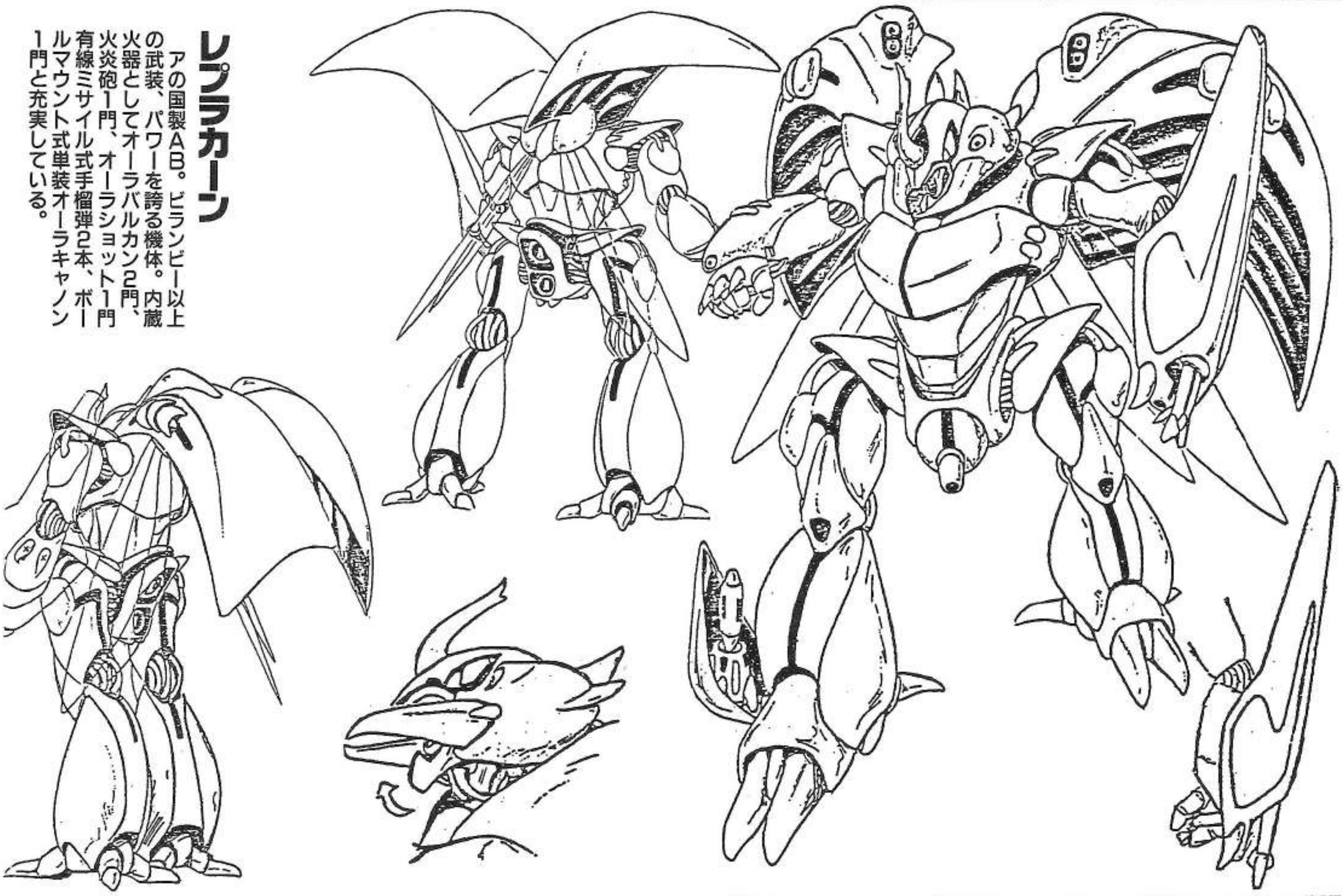






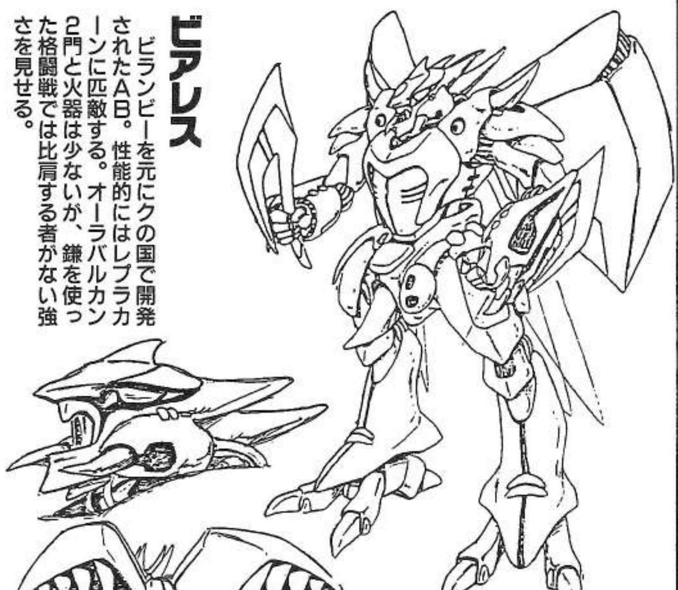
レプラカーン

アの国製AB。ビランビー以上の武装、パワーを誇る機体。内蔵火器としてオーラバルカン2門、火炎砲1門、オーラショット1門有線ミサイル式手榴弾2本、ボールマウント式単装オーラキャノン1門と充実している。



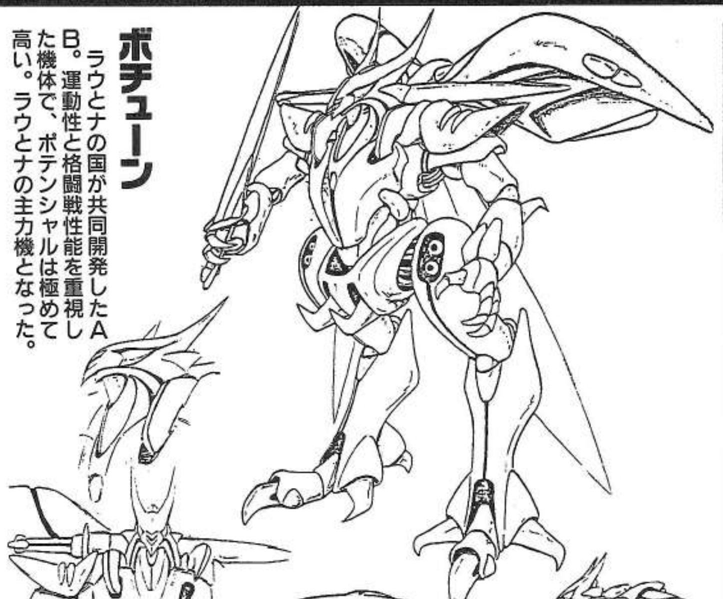
ビアレス

ビランビーを元にクの国で開発されたAB。性能的にはレプラカーンに匹敵する。オーラバルカン2門と火器は少ないが、鎌を使った格闘戦では比肩する者がない強さを見せる。



ボチューン

ラウとナの国が共同開発したAB。運動性と格闘戦性能を重視した機体で、ポテンシャルは極めて高い。ラウとナの主力機となった。



幡池裕行イラストコーナー



●描きおろし

幡池裕行イラストコーナー



●OVA「ダンバイン」のキャラクターデザインを担当した幡池裕行氏が描いたイラストを集録した。幡池氏の本業はイラストレーターであり、「青の騎士ベルゼルガ物語」「バレリアファイル」などの小説のイラストを多数描いている。

●描きおろし

幡池裕行イラストコーナー





●このページのイラストはキングレコードのLP・CD用に描きおろしされたものです







ガレージキットリスト

AURA BATTL



■コトブキヤ

コトブキヤのオーラバトラーキットは、そのほとんどを1/72で統一しており、値段のほうも3000円台から4000円台とお手頃である。かといってもキットの出来が悪いなどということはなく、多摩工房のスタッフが力を注いだ力作ぞろいである。

■1/72シリーズ

・ダンバイン
原型製作/横井健一　価格3000円

・ビルバイン
※ベース付
原型製作/石川雄一　価格4300円

・レプラカーン
原型製作/杉田晋　価格3800円

・ビアレス
原型製作/矢ヶ崎しんいち　価格4300円
※オノは手に持つタイプと腕に装着するタイプの選択式

・ライネック
原型製作/Dr多羅尾　価格3800円

・ズワース
原型製作/杉田晋　価格4300円

・ヴェルビン
原型製作/中沢博之　価格3800円
※出渕 裕氏描き下しオーラバトラー

・ギトール
原型製作/杉田博　価格4300円

・ガーゴイル
原型製作/杉田晋　価格4300円
※出渕 裕氏描き下しオーラバトラー
頭部は二種類の選択式

・サーバイン
原型製作/横井健一　価格3800円

・ズワウス
原型製作/柳沢 仁　価格9500円
※オーラコンバーターが開閉選択式

■1/35スケール

・ダンバイン
原型製作/横井健一　価格9800円

この他にもコトブキヤでは、竹谷隆之氏製作の1/144スケールダンバイン、ビルバイン、ダーナ・オシー、ドラムロ・ビランビー、ゲド、バストール、レプラカーン、ビアレス、ライネック、ボチューン、ボゾン、ズワースの13点をメタル製とキャスト製で並行販売するとのこと。価格はメタル予価4800円、キャスト予価1800円。



■ウェーブ(ラーク)

ウェーブ(ラーク)のオーラバトラーキットは、ソフビ製で各関節部がボールジョイントで可動することが売り物です。

■1/35シリーズ

・ビアレス
原型製作/――　価格3500円
※メタル製手オノ2ケ付

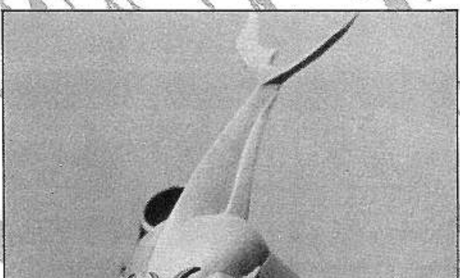
・ライネック
原型製作/――　価格3500円
※メタル製の剣、キャスト製のさや付

・レプラカーン
原型製作/――　価格4300円
※メタル製の剣、キャスト製のさや付

今後のラインナップとしては、完全変形ビルバイン、ズワース、ダンバイン、54ミリのメタルシリーズなどが企画中である。

■MAXファクトリー

MAXファクトリーでは、注目の1/32サーバインがいよいよ発売。剣、頭部装飾、羽根がインジェクション成型で、その他はソフビ製、価格は4800円。この他、OVAからはシルキー・マウのキットが発売。デコパージュ、飾り用真鍮線付。羽根は型紙付のプラバン製で価格が2800円。噂のヴェルビンも近々完成予定だよ。



●各社連絡先/海洋堂　HOBBY LOBBY　03(461)-2816　HOBY LOBBY2　03(770)-6410/コトブキヤ　0425(22)-3500/

ER GARAGE KIT LIST



■海洋堂

生態的な表面処理が売りものの、海洋堂のオーラバトラーキットは、プロポーション、見ばえを重視したオール固定ポーズ、可動部分なしというスタイルで、1／35スケール、1／72スケールと二種類のスケールで充実した商品を展開している。

出来ばえの方も、「北斗の拳」シリーズでおなじみの片山　浩氏を始め、今池芳章氏、原　詠人氏　坂本正則氏と多くの一流どころが原型を手がけ、申し分のない完成度である。

■1／35シリーズ（キャスト製）

・ダンバイン
原型製作／坂本正則　価格9800円
・ズワース
原型製作／今池芳章　価格14800円
・ライネック
原型製作／今池芳章　価格9800円
・ビアレス
原型製作／原　詠人　価格9800円
・ボチューン
原型製作／坂本正則　価格9800円
・ギトール
原型製作／今池芳章　価格18800円
※「オーラファンタズム」において、出渕裕氏が描き下ししたオリジナルオーラバトラーをキット化したもの。その重圧感と独特な生態感は多くの話題を呼んだ。

■1／72シリーズ（キャスト製）

・ダンバイン
原型製作／片山　浩　価格3000円
・ボゾン
原型製作／原　詠人　価格3000円
・ビランビー
原型製作／片山　浩　価格4800円
・ズワース
原型製作／ボーメ　価格5800円
・レプラカーン
原型製作／片山　浩　価格5800円
・ガドラム
原型製作／坂本正則　価格5800円
※ギトールと同じく「オーラファンタズム」にて描き下されたオリジナルオーラバトラーをキット化したもの。
・サーバイン
原型製作／片山　浩　価格6000円
・ズワウス
原型製作／片山　浩　価格12000円
※サーバイン、ズワウスともオリジナルビデオ「聖戦士ダンバイン」の新作部分用に、出渕　裕氏が新たに描き下した「ダンバイン」、「ズワース」のグレードアップヴァージョンをキット化したものである。



海洋堂では、これらオーラバトラーの他に、新作ビデオ版に登場するミ・フェラリオ「シルキー・マウ」を、海洋堂プリティ・フィギュアをほとんど手がけているボーメ氏の原型で、1／1スケール4500円で発売中。

その後のラインナップは、本誌に掲載されているメタル製のサーバインが近々発売されることになっており、80ミリシリーズとしてその他のオーラバトラーも企画中とのことです。価格の方は予価3000円ということだが、メタル製のキットの人気もじょじょに上がってきている昨今、オーラバトラーキットのマニアとしては、メタルという新分野もチェックを入れておきたいものである。



ウェーブ　0422(48)-4170／MAXファクトリー　0423(63)-6280

スタッフリスト

原画
佐々門信芳　山田政妃　湖川友謙
内田よりひさ　佐久門信計　さくましげ子
坂本三郎　外記康義　坂本英明
大島城次　遠藤栄一　佐藤道雄
大森英敏　北爪宏幸　矢木正之
恩田尚之　詫　祐二　秋野洋一
動画チェック　平野謙一
動画
ビーボォー　アニメ浪漫　スタジオ・ダブ
タイガープロ　コクピット　ニシコプロ
カナメプロダクション　アニメTOROTORO
スタジオ・ムサシ　スタジオ・トライ　スタジオ・ワールド
伸童舎　タマ・プロダクション　九月社
大曽根真知子　江山梨恵　仲田美歩
中谷マリ
仕上
スタジオ・ディーン　サンライズスタジオ
スタジオ・ジャスト　スタジオ九魔
スタジオ2001　木のプロダクション
スタジオ雲雀　スタジオ・ラック
色彩設定　高島清子　戸辺尚子
仕上助手　前林文恵
特殊効果　マリックス　千場　豊
背景　スタジオ・ユニ
スタジオ・イースター
プロダクション・アイ　スタジオ・アクア
製作進行　中川一敏　富永恒雄　渡辺　努
目崎一彦　杉島邦久　山口美浩
文芸担当　風間　洋
設定助手　原田奈奈　福田倫子
制作デスク　内田健二
プロデューサー　中川宏徳
キャスティング
ショウ・ザマ　中原　茂
チャム・ファウ　川村万梨阿
マーベル・フローズン　土井美加
ショット・ウェポン　田中正彦

調整　依田章良
録音　ニュージャパンスタジオ
タイトル　マキ・プロ
撮影　旭プロダクション
現像　東京現像所
編集　井上編集室　布施由美子
演出助手　原田奈奈
制作進行　久保田信司
制作担当　山本之文
プロデューサー　高梨　実（バンダイ）
指田英司（サンライズ）
制作　バンダイ　サンライズ
製作・著作　サンライズ

オリジナル新作
「復活」
「七百年の野聖」
「地上に近き者」

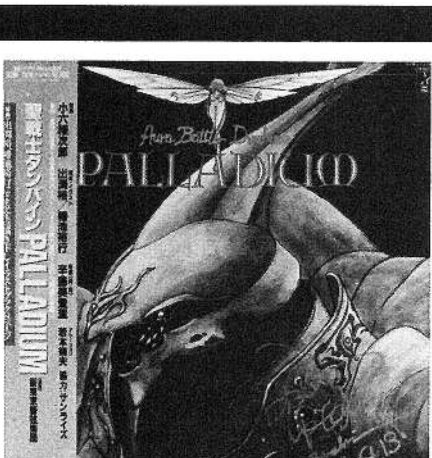
企画　サンライズ
原作　富野由悠季　矢立　肇
監修　富野由悠季
監督・ストーリーボード　滝沢敏文
脚本　五武冬史
キャラクターデザイン　幡池裕行
メカニカルデザイン
スペシャルアドバイザー　出渕　裕
音楽　小六禮次郎
音響監督　藤野貞義

色彩設定　吉田恵子
美術監督　平川栄司
背景　メカマン　甲斐政俊　東　浩行　竹田雄行
太田　文　大塚麻紀　荒井貞幸　横田哲男
特殊効果　奥村友規
撮影監督　奥井　敦
撮影
旭プロダクション　朝稲田紀　福田　寛
大神洋一　小野広子　土岐浩司
現像　東京現像所
編集　井上編集室
効果　佐々木純一
録音　ジャパンニューススタジオ
調整　依田章良
音響制作　千田啓子
テーマソング
「Lust No」
「モノローグを染めて」
詩・曲・歌　辛島美登里
編曲　戸塚修
レコード　キングレコード
レコーディングプロデューサー　重松英俊
レコーディングディレクター　大月倫夫
タイトル　マキプロ
演出　篠　幸裕
演出助手　原田奈々
制作進行　久保田信司
プロデューサー　高梨　実（バンダイ）
指田英司（サンライズ）
制作　バンダイ　サンライズ
製作・著作　サンライズ



聖戦士ダンバインIII「霧愁の章（編集版）」＋「地上に近き者（オリジナル新作）」は、カラー75分（予定）／ステレオHiFi／VHS:BES-233 Beta:BEB-233／¥12,800（8月25日発売）
レーザビジョンディスク:BELL-191／¥9,800（9月25日発売）
ビデオカセットとレーザビジョンディスクは発売元：株式会社バンダイ　販売元：（株）AE企画です。

オリジナルアルバム
聖戦士ダンバインPALLADIUM
CD／K32X-7120／¥3,200 LP／K28-7374／¥2,800 MT／K28H-4495／K28H-4495／¥2,800
主題歌「Last No」はシングルレコードのみ K07S-10242／¥700 以上キングレコードより発売中



（商品に出渕氏のサインは入っていません）

聖戦士ダンバイン スタッフ&キャストリスト

編集版「鳳麟の章」「天魔の章」「羇愁の章」

企画　サンライズ
原作　富野由悠季

——シリーズスタッフ——

総監督　富野由悠季
脚本　富田祐弘　渡邊由自
音楽　坪能克裕
キャラクターデザイン　湖川友謙
メカニカルデザイン　宮武一貴
メカニカルゲストデザイン　出渕　裕
美術　池田繁美
撮影監督　斎藤秋男
演出　関田　修　川瀬敏文
ストーリーボード　斧谷　稔　菊池一仁　今川泰宏
作画監督　湖川友謙　佐々門信芳　佐々門信計　坂本三郎　遠藤栄一　秋野洋一　矢木正之　大森英敏

バーン・バニングス　速水　奨
ガラニア・ニャムヒー　伊倉一恵
ルーザ・ルフト　火野チカコ
ドレイク・ルフト　柴田秀勝
リムル・ルフト　色川京子
ニー・ギブン　安宅　誠
フェイ・チェンカ　橋本晃一
キーン・キッス　木藤聡子
ミズル　戸谷公次
ジェリル・クチビ　大塚智子
フラオン・エルフ　キートン山田
ゼット・ライト　立木文彦
トッド・ギネス　堀内賢雄
老臣　龍田直樹
シュンカ・ザマ　筈川　純
司令　村松康雄
兵　星野充昭
ナレーター　若本規夫
構成・演出　井内秀治
音響監督　藤野貞義
主題歌　「ダンバインとぶ」
作詞　井荻　麟
作曲　鋼倉一也
編曲　矢野立美
歌　MIO
レコード　キングレコード
副主題歌　「みえるだろうバイストン・ウェル」
作詞　井荻　麟
作曲　鋼倉一也
編曲　矢野立美
歌　MIO
レコード　キングレコード
音響制作　千田啓子
効果　佐々木純一

キャスト
シオン　中原　茂
メムノン　宮内幸平
シルキー　横沢啓子
ベラーナ　安達　忍
レムル　鷹森淑乃
ガルー　郷里大輔
ラバーン　速水　奨
ショット　田中正彦
男　沢木郁也
兵　星野充昭　菊池正美
部下　大滝進矢
ナレーター　若本規夫
作画監督　谷口守泰
メカ作監　吉田　浩
原画　スタジオ・ダブ　古泉浩司　西村誠芳　中野美佐緒　佐久間信一
動画　スタジオ・ダブ　洋田　徹　高木恵子　佐久門正辞典　渡辺文夫　後藤由美　アニメ・アール　スタジオ・ムー　木のプロダクション　スタジオ・ムサシ　シャフト　うさぎ屋　ワークショップ　中谷まり　橋本千津子　林　鳳翔　松野悦子
動画チェック　松野悦子
仕上　スタジオ・ボギー（第3スタジオ）　庄村利幸　中村三郎　崎向勝海　福井　薫　松岡久美子　高野智恵子　坂本千賀子　金田明子　原美由紀　スタジオMAC　シャフト

ビデオカセット LD レコード

聖戦士ダンバインI（VC）
「鳳麟の章」＋「復活」



カラー80分／ステレオHiFi／VHS：BES-231 Beta-231／¥12,800

聖戦士ダンバインII（VC）
「天魔の章」＋「七百年の野望」



カラー80分／ステレオHiFi／VHS：BES-232 Beta-232／¥12,800

聖戦士ダンバインI（LD）
「鳳麟の章」＋「復活」

カラー80分／ステレオ／BELL-177／¥9,800　聖戦士ダンバインII「天魔の章」＋「七百年の野望」も発売中　カラー80分／BELL-179／¥9,800



B-CLUB SPECIAL

オーラバトラー 2

ISBN4-89189-353-2 C0079 ¥980E

定価980円



カット／福地 仁

AURA BATTRERS 2

EDITORIAL STAFF

構成・編集	伸童舎
	井上 徹
	千葉 暁
	渡辺 聖
デザイン	福地 仁
	しいばみつお
フォト	高瀬ゆうじ
協力	サンライズ
	出渕 裕
	幡池裕行
	キングレコード
	海洋堂
	コトブキヤ
	ウエーブ

B-クラブ スペシャル

オーラバトラー 2 **定価980円**

■発行日 昭和63年 8 月25日

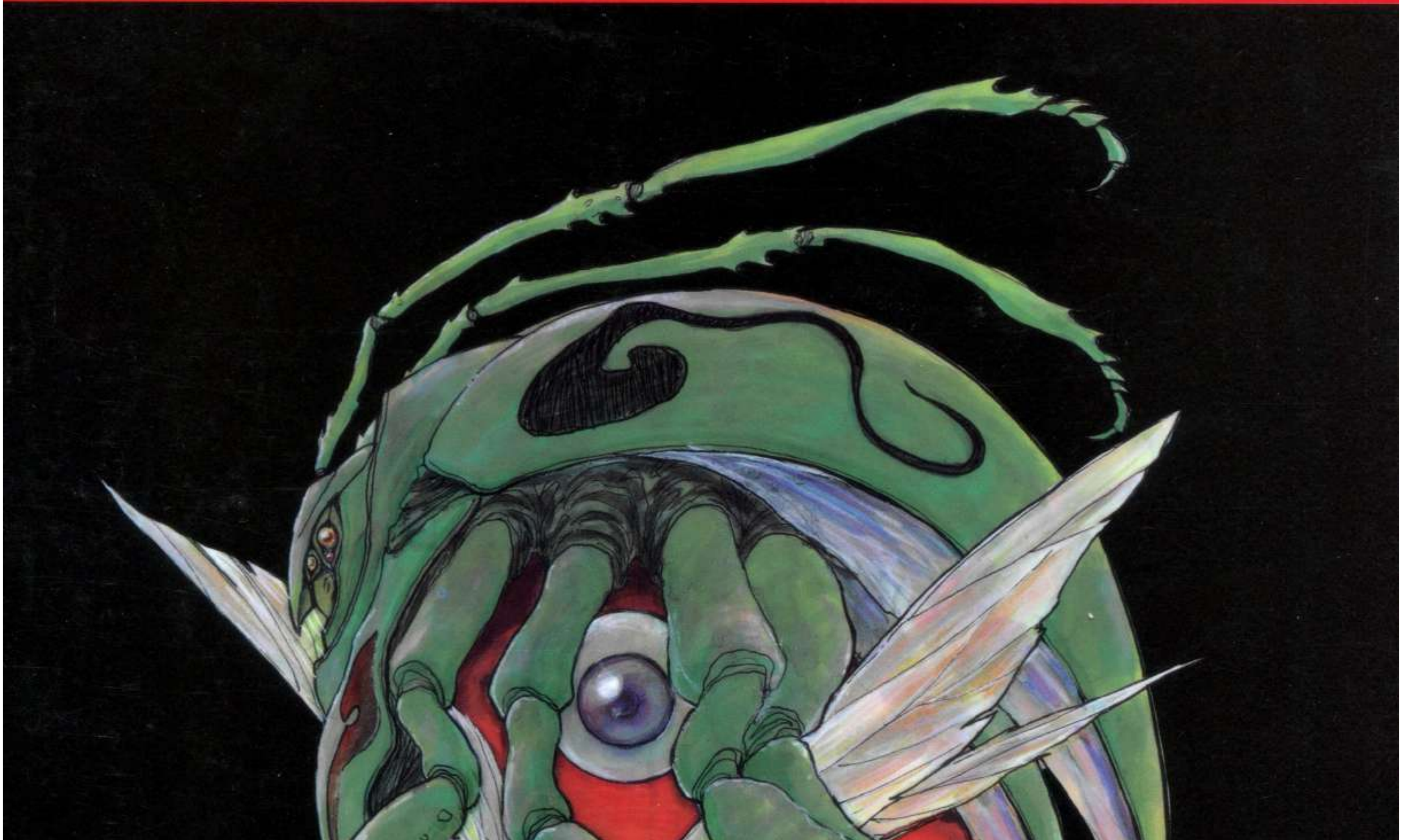
■発行人 山科 誠

■発行 株式会社バンダイ
〒111 東京都台東区駒形2-6-7
電話 03-842-5151(代)

■編集人 稲川俊文

■印刷 共同印刷(株)

ISBN4-89189-353-2 C0076 ¥980E



◯海洋堂、片山　浩氏によるジオラマピンナップ◯幡池裕行氏描き下しイラストピンナップ◯オーラバトラー3Dフォト◯OVAフィルムストーリー◯バイストンウェル絵巻◯草彅琢仁氏描き下しコミック◯オリジナルストーリー「夢の来訪者」など盛り沢山のこの内容。この本を読まずして「バイストンウェル」は語れない！



ISBN4-89189-353-2 C0076 ¥980E ㈱バンダイ

定価980円



B-CLUB SPECIAL

AURA BATTLERS 2

NEO BYSTONEWELL STORY

ISBN4-89189-353-2 C0076 ¥980E

定価980円